WATERBEAT
2002-2018（下）

楸

R18

Adult only

○目次

WATERBEAT 2002-2018（下）

理想の箱庭 - Side Black - ……4
Melancolia ……29
籠は連理、鳥は比翼 ……40
輪（リング） ……59
手記 ……125
とけあう恋 ……156
3倍返し ……164

別冊　（上）

FIREHEART WATERBEAT
理想の箱庭 - Side White -
Selfish Gene
La Vie en Rose
微睡
幼馴染
大人の特権
大人の特権　後日譚

大人の特権　後日譚の後日譚

剣とハープと貴方

聖地と故郷と貴方

水の守護聖

WATERBEAT

2002
-
2018

(下)

理想の箱庭 – Side Black –

夜闇の中に、雨が細く降っていた。
こんな日でも、あいつは何時ものように、何時もの場所で待っているのだろう。ほとんど何も考えられない頭で、オスカーはぼんやりとそう思った。
だらりと下げられた両手からは、少しずつではあるが血が滴り、オスカーの歩いた小道を点々と辿る。
これほど酷い怪我をしたのは久しぶりだ。
それはまた、今日のオスカーが下界でどれだけ荒れたかという証拠でもあった。
どんな些細な怪我でも、オスカーから発せられるサクリアの僅かな歪みからか、対の存在であるあの人はそれを察して――オスカーの密かな帰り道の先、いつも決まったあの場所で、いつもの小箱を持って待っている。
ましてやこんな日に、来ない訳がない。
ましてや今日、オスカーに訪れた変化に、気がついていない訳がない。
変化――炎のサクリアの、喪失の前兆に。

炎の私邸の敷地内。
オスカー自慢の薔薇の庭園。
一面に真紅の花が咲き乱れるその場所は、夜の暗闇に包まれると血のような赤黒い海に変わる。
その海の前で佇む、淡い水色のひと。
青い月光に照らされたその姿は燐光のように仄かに光り、薔薇の海にも月にも満天の星にも、何者にもその神聖性を冒すことができないほどに――綺麗だ。

何度も見てきた光景だ。
何度も見たはずの光景だった。
何の感慨もなく。時には、無闇矢鱈とも感じられるほど過剰に注がれるその優しさに、疎ましさえ感じて。

なのに、この光景を見るのももう最後だろう、と思った瞬間――オスカーは言い様のない息苦しさに囚われた。
喉元いっぱいに苦さが広がる。
呼吸ができない。

オスカーは一度立ち止まると、大きく息をついた。

それから、歩みを元に戻して、一歩一歩歩く。
道程の先には、深海色の眼差しをこちらに向けたままのひとがいる。
小箱の取っ手を持ったままの両手を、真っ白になるほど硬く握り締めて。

オスカーの視線は何処に結ばれているか判然としない。
ただ2人の距離だけがどんどんと縮まってゆく。
硬直したまま動かない人の横を擦れ違う直前、オスカーはぴたりと歩みを止めた。
「……嘲笑いに来たのか」
低い低い声が、炎の守護聖の身体から発せられた。びくり、と水の守護聖の肩が揺れる。
オスカーの真左で、リュミエールが浅い呼吸を何度も繰り返す音が聞こえる。
オスカーはただ沈黙したまま、その場に立っていた。
やがてリュミエールは、ひとつ大きく息をついた。先ほどのオスカーのように。
「……手当てを、」
いつも穏やかで優しい声音は、隠しきれない震えを帯びていた。
「傷の、手当てを、させて下さい……」
雨の雫が、紫に近くなった唇の上を滑る。
しばらくの沈黙の時が流れた後、オスカーは黙って東屋のほうへ歩き出した。

それが、いつも、そうやって歩いた、いつもと同じ道程だった。
少し離れた後ろを、リュミエールが付いて来る気配がした。

東屋のベンチに座ると、リュミエールは小箱を開けて、いつもよりもぎこちない仕草でオスカーの手当てを始めた。
かたかた震える白い手で、消毒液のびんがかちゃかちゃと音を立てる。オスカーの手に触れる手は氷のように冷たかった。
やがて手当てが終わり、リュミエールの手が、治療の済んだオスカーの手を、ゆっくりとオスカーの膝の上へ戻す。
オスカーはただ、されるがままになっていた。
白い手が道具を小箱の中に収め終わると、再び沈黙のみが2人の上に降りる。
リュミエールの髪の先から頬へ、雫になって流れる雨露だけが、無為に過ぎ去る時間を表していた。
オスカーは正面を向いたまま動かない。視線はリュミエールに向けられることなく、その氷色の瞳は目の前に広がる一面の真紅の薔薇を映していた。
「……どうして」
触れれば壊れてしまいそうな、弱々しい言葉がリュミエールの口からこぼれた。
「どうして、貴方だけが……」
続きは言葉にならなかった。

「地の守護聖が降りて、ジュリアス様、クラヴィス様ももうすぐ聖地を去られる。――――順番から言えば妥当なところさ」
光と闇のサクリアがその主を変え、新しい守護聖たちの研修期間も終わりに近づき、光の守護聖、闇の守護聖が下界に降りる日はもう、片手で数えられる程になっている。
「……違うんです」
リュミエールの声音の震えが大きくなった。
応えるオスカーの声音は低く、リュミエールとは対照的に、奇妙なまでに平坦だ。
「まあ、確かにお三方に比べれば俺の在任期間は酷く短かったがな」
「違う……！」
リュミエールの声が悲鳴に近くなった。俯いた顔を強い勢いで左右に振る。
柔らかい青銀色の髪が、流れを描いて宙に舞った。

瞬間、オスカーの頭に、一気に血が上った。
胸の中にどす黒い感情が広がる。

本気で疎ましかった。
誰にでも分け隔てなく注がれる、その優しさが。

「黙れ！」

強さを司る炎の守護聖が、大地が震えるかと思われるほどに有りっ丈の力を込めて怒鳴った。
俯いたままの水の守護聖がびくりと揺れて、全身を強張らせた。

「お前に俺の何が判る！」
加熱した自我が水の守護聖にそう怒鳴りながら、頭の片隅の自分が冷静に自分に問う。
――何が、とは、何のことなのか――――

水の守護聖の表情を見れば、目を閉じたまま強く唇を噛みしめている。泣きそうな顔をして、それでも泣き出すことはしない。
どんな状況であれ泣く男など、オスカーが最も軽蔑する部類の人間だ。
リュミエールもそれを判っているからこそ、であろう。
――だが、この水の守護聖ならば。
そんな表情も、綺麗だ、とオスカーは思う。思ってしまう。
耐え切れずに涙を零しても、きっとそれは、一種の感嘆をさえ呼んでしまうような美貌であるに違いない。

見たくなかった。そんな顔など。
リュミエールの優しい、何処までも優しい顔など、見たくなかった。

「もう、お前の顔など、見たくない」
だからそう告げた。
オスカーは無言で立ち上がった。全身に拒絶の意思を帯びさせて。
リュミエールは身体を強張らせたまま、微かに震え続けている。

いつの間に、これほど離れてしまったのだろう。
長い長い年月を、ただ反発しあうことしかできなかった人。
何かが少し違っていれば、分かり合えたのだろうか。

オスカーの胸が、きしきしと軋んだ。

「次代の炎の守護聖とは、仲良くしてやってくれ」

それまでの口調とはうって変わった静かな声だけが、水の守護聖とともにその場に残された。

なぜだか分からない。

これが何なのかも判らない。
ただあの人が居なくなるのだと考えると、身体が半分えぐり取られたように痛くて、痛くて、ずきずきと痛くて痛くて堪らない。
それから、気分が悪くなった。眩暈がする。悪寒がする。体中の内臓が逆流するような吐き気がする。
我慢できなくなり、吐いた。
吐くものが無くなると胃液を吐いた。
それすらも無くなると身体が何も受けつけなくなった。食欲は皆無だったが、それでも無理矢理口にしたものは片端から吐いた。水を飲んでも吐いた。
自分の身体が自分のものでないような感覚。
身体も心も、ばらばらの方向へ四散してしまいそうなほど、気分が悪かった。

退任の決まった光と闇の守護聖に気を揉ませたくなかったから、という理由で、オスカーのサクリア喪失は2人が下界に降りた後に公表された。
みな、一様に酷く驚いた。地、光、闇に続き、今度は炎と立て続けだ。しかもオスカーの在任期間は他の三者に比べると酷く短かったことがなおいっそう驚きであるようだった。ましてやオスカーは、光の守護聖の退任後、次代の首座に任命されていたから。

結局、オスカーの公表までの間、オスカーのサクリアの変化に気が付いた者は女王を含め誰もいなかったようだった。
――あの日以来顔を合わせなくなった、水の守護聖を除いては。
それが対の力を持つ者ということの意味だ。
例えそれが、反発を招く為だけのものであったとしても。
オスカーはそう自嘲気味に思った。

新しく炎の守護聖となるべき人物はすぐに見つかり、まもなく聖地へ招聘された。
短く切り揃えられた、少し固めの黒髪。整った顔立ちは、オスカーほどの迫力はないものの、その気の強さを伺わせている。
オスカーが聖地へ来た時と同じくらいの年頃のその少年は、やはりその頃のオスカーと同じように少年の域をすでに脱しかけていた。上背もすでにオスカーとほとんど変わらない。
そして、紛うことなき、炎のサクリアの気配。
一日一日ごとに弱くなるオスカーのサクリアとは対照的に、天に向かって燃え上がる盛りの炎のようなサクリアを背負ったその彼は、昔のオスカーと同じように、栄えある場所での栄えある地位に任じられた事を――酷く誇らしく思っているようだった。
そのような後継者であることを、オスカーは喜びもしなかったが、残念にも思わなかった。
ただこいつなら引き継ぎは順調に進みそうだな、と薄く思っただけだった。
よく自分に似ている。新守護聖としての教育に自分も相手も戸惑うことはないだろう。

ただひとつ、黒髪の少年が、その前任である炎の守護聖とは似ていなかった点。

黒髪の少年はすぐに、オスカーに伴われ、他の守護聖たちへ紹介された。謁見の間に集まった一同に、順々に紹介されてゆく。

水の守護聖の位置が近くなるにつれ、オスカーは息苦しさを覚えた。

あの日以来、水の守護聖には会っていなかった。久しぶりに見る顔は、いつもより更に一層、透けるように白い。

順番が回り、新しい炎の守護聖と共に自分の前に立ったオスカーと、リュミエールは一瞬だけ目を合わせた。

縋るような、瞳。

誰も気が付かないほどの短い時間、微かに、しかし確かに合った視線は――すぐに黒髪の少年へ移された。

「水の守護聖、リュミエールです」

そう優しい声音で告げ、誰もが見惚れる柔らかな美貌をふわり、と見せる。

オスカーが再び、あの時のように、その優しさに胸を苛立たせかけた瞬間、

隣の黒髪の少年が息を呑み、水の守護聖へ只ならぬ視線を注いでいるのに気が付いた。

予感は的中した。

どうやら新たな炎の守護聖は、一目で水の化身たる麗人に心奪われたらしい。既にかなり本気で熱を上げているらしく、炎の私邸に帰ってからリュミエールのことをオスカーに根掘り葉掘り訊いてきた。

「あいつのことは殆ど知らない、俺とあいつは聖地でも有名な犬猿の仲だったからな」

いい加減オスカーがうんざりしてややぶっきらぼうにそう告げた時、黒髪の少年はひどく驚いた。対の性質のものを求めるのは当然のことではないか、と。

「なんていうか、こう、……自分の体中に満ちているサクリアが、全身であの人を求めてるんです。」

全身があの人を求めている

オスカーは自分の肌がざわつくのを感じた。残された僅かなサクリアが、首の後ろ辺りから立ち上るように。

意識しない不快な冷汗がにじむ。

「そうは言っても、男同士で、守護聖同士だぞ」

「男だろうが守護聖だろうが関係ありません！」

唐突に黒髪の少年の声が強くなった。恐いものを知らない若さを思わせる険しさだった。

が、その声のトーンが急に落ちる。
「あの人が欲しい」
低い低い声でそう、独り言のように、次代の炎の守護聖が呟いた。
「この身の中のサクリアが、そう言ってるんです」
オスカーは自分の中で、何かが徐々に崩壊していく気配を――感じた。

――心が、叫んでいる
あの人が欲しい
あの人が欲しい
他には何も要らない
ただ　あの人だけが　欲しい

数日もたたないうちに、若い炎の守護聖のいない時を見計らって、リュミエールがオスカーのい

る炎の守護聖の執務室へ訪れた。
訪問はあらかた予想していた。あの黒髪の少年の熱の上げ方を見れば、オスカーならずとも他の守護聖にですらわかる事だ。相談の内容もオスカーの想像していた通りのものだった。
「どうするって言われても、俺はあいつの好きにさせておくが？」
水の守護聖が言葉を無くす様子が見て取れた。
「……でも、幾ら……あの子から好きだと言われても、同性同士で…守護聖同士ですよ？」
「同性だろうが守護聖だろうが関係ないだろう」
数日前、オスカー自身が口にした疑問に返された返答を、そのまま告げる自分が滑稽だった。
「言っただろ、仲良くしてやれって。俺には他に何も言うことはない」
水の守護聖を視界の端に写す自分の、胸の奥が再び不快な暗雲に襲われそうになるのに、気が付かない振りをして意識の底に押し込める。
「それと、もうひとつ言ったよな。……お前の顔など見たくないと」
自分に出せることができたのかと自分で驚くほどの、オスカーの低い声が、リュミエールにそう告げた。

水すら摂取できなくなったので脱水が酷いらしかった。それほど外面には出てないはずだったが、自分の生活の実情を知っている私邸の使用人たちが見るに見かね、王立研究院の医療班のスタッフ

が呼ばれ、医師は診察を少しするなり問答無用で点滴を打った。
酷く痛んだらしい身体が点滴だけで容易に戻るはずもなく、身体の気持ち悪さとだるさは増す一方だった。
身体の痛みなど、もうどうでもよい。
こんなに悲鳴を上げる身体が、今更浅ましく、必要だとは感じない。
ただ心が、痛くて、痛くて、痛くて痛くて痛くて痛くて如何仕様もない。

オスカーが聖地を去る日が、明日というその日。
水の守護聖が倒れたと、連絡が回った。
オスカーの元にその知らせが届いたのは、聖地の日が傾きかけた頃だった。

何かあったのか？
ここ最近の執務の内容は、確かに炎の代替わりで少し忙しいが、体調を崩すほどではない。
リュミエールはああ見えても自分の体調管理には気を払う。自分の身体が大事だからではなく、自分の体調不良によって他人に迷惑を及ぼすことを酷く嫌うからだ。
そのリュミエールが倒れるようなほどのこととは……

そこまで考えて、オスカーは忌々しく舌打ちをした。
今日を含めあと2日だ。なぜ今更、今この時になっても、あいつに心を乱されなければならない？

ずっとそうだった。
初めて逢った時から、今まで、ずっとそうだった。
あの優しげな顔を見るたびに、柔らかな微笑を零しているのを目にする度に、心を掻き乱された。
あの優しさが嫌いだった。

でも、今は。
水の守護聖が運ばれた、水の居館へ出向く自分の方が、もっと嫌いだ。

――酷く衰弱されていて
――極度の栄養失調と、脱水症状だそうです
――何でも繰り返し嘔吐されていて、ここ数日間、何も口にされてなかったと…
――水を飲んでも吐いていらっしゃったそうで、この何日かは医療班のスタッフが毎日点滴を施していた程らしいです――

――どうなさったのでしょうね。大事がなければ良いのですが

優しい顔が、嫌いだった。
包み込むような、柔らかな笑顔が、嫌いだった。

でも、衰弱しきって、血の気を無くした白い顔の方が、もっと嫌いだと。
今になって、初めて、気が付いた。

カーテンの重く下ろされた部屋の中、冷たい身体でぐったりとベッドに沈む、水の守護聖を目の前にして。

「……リュミエール」
意識の無いらしいリュミエールの、滑らかな頬に、掌で触れた。
自分の内にわずかに残された、炎のサクリアをそこから送る。
ほんの少しだけ、リュミエールの肌が赤みを帯びる。同時に、凍ったように閉じられたままだった瞼が、二・三度、揺れた。

ゆっくりと開かれていく瞳は、深海で揺らめく、深い碧で。
身じろぎもせず、オスカーにじっと注がれた。

「……とても、気持ちがいいと思ったら……」
深く柔らかく、静かな声がゆっくりと部屋に満ちる。
「出来過ぎた、夢を、見ているようです……」
そう言って、ひとつ息をつき、自分の頬に当てられたままのオスカーの手に、自分の手を添えた。
開いた時と同じように、再びゆっくりと、目を閉じる。
「オスカー」
リュミエールから手を外す事も、視線を反らす事も出来ず立ち尽くすオスカーに、水の守護聖が言葉を紡ぐ。
「貴方に、嘲笑ってほしいことがあるのです」
オスカーの手に添えられていた、リュミエールの手がするりと、ベッドの上、散らばる青銀の髪の横に落ちた。
ベッドに力なく沈む、しなやかな躯が――――綺麗だと、思う。
「……何だ」
どくどくと音を立てて早くなる鼓動と共に、胸の奥に燻り出した感覚を、無理矢理心の奥に押し込めて、尋ねた。
リュミエールの唇が、笑みの形に動く。

「貴方を、愛しています」

閉じられたままの目尻から、水滴が滑り落ちた。

「嘲笑ってください」
「……」
「貴方を、愛しているんです」

涙に濡れた瞳を、開いて。
水の守護聖は、オスカーへ、ふわりと、微笑った。

オスカーの中の、何かが音を立てて砕けた。

手首を掴んで思い切り力任せに引き寄せて、起こした躯を背が折れるほどに抱き締めて、乱暴に唇を塞いで深く口付けた。
身体の奥から沸き起こる嵐のような衝動のままに。
事態を理解できない腕の中の細い身体がもがく。
暴れる体に回した両手に力を入れ、細い身体を強く抱き締めて縛めた。逃げられないように。
重ねた唇を離して、白い首筋へ滑らせる。そのまま体重をかけて、抱き締めた体ごとベッドへ倒れ込んだ。
時間がそこで硬直したように、全ての動きが止まる。

驚きに目を見開いたままの水の守護聖が、震える手をゆっくり動かして、自分の上に圧し掛かる体に手を回すと。
オスカーの背が、細かく震えていた。

「……俺は」
リュミエールの首筋の辺りに顔を埋めたままのオスカーの声は、奇妙なほど低く平坦で、そして細かく震えていた。
「俺は、お前なんか、愛していない……」
そう呟きながら、オスカーの唇が、言葉とは裏腹に甘い仕草でリュミエールの首筋を滑り、何度

も何度も口付けを降らせる。時折強く吸われ、その度に水の守護聖の躯が揺れた。
オスカーの手がリュミエールの手を探り当て、指を絡めて指先を指先でなぞる。それが不意に激情に駆られたように、強く握り締められた。
力の込められたオスカーの手は、細かく震えていた。
「お前を愛していると認めてしまったら、お前を何処かに閉じ込めて、誰にも見せないで、誰にも逢わせないで、壊れるほどに滅茶苦茶に愛してしまうから……」
リュミエールの耳元に寄せられたオスカーの唇が、柔らかな耳朶を舐めた。甘い戦慄がリュミエールの中を走る。
「だから、ずっと前から……」
そこまで言って、再びオスカーはリュミエールの首筋へ顔を埋めた。
「ずっと前から、俺は、お前なんか、愛していない……！」

強い衝撃とともに、初めて逢った時から。
気づいていた、自分の感情。突き動かされる衝動。
その場限りで、鍵を掛け、自分の中へ永遠に封じ込めたはずの禁忌。

――気がついていた。
気がついていた。

それらから目を背け続けてきた。今日という日まで。

リュミエールはしばらく硬直していた。
それから、見開いたままだった瞳を、ゆっくりと閉じた。溜まっていた雫が目尻から零れ落ちた。
「……はい」
穏やかな声音が、そう応えた。

――なんと私は愚かだった事か
彼がその内に秘めたまま、下界まで持っていくはずだった尊い愛情に、欠片も気づかず。
最後の最後になって、いちばん残酷な方法で暴き立てた。
――いかに私は、無知な子供であったことか――

「ごめんなさい」
リュミエールが譫言のようにぽつりと呟く。

オスカーはゆっくり上体を上げると、目を閉じたままの水の守護聖の顔を見やった。
「ごめんなさい」
リュミエールの口から繰り返される言葉。オスカーは片手で、ゆっくりと水色の髪を撫でた。
「謝るな」
「……ごめんなさい」
唇を重ねて、水の守護聖の言葉を遮った。初め優しかった口付けは、徐々に深くなる。
何度も角度を変えて、長い間、唇を貪った。

抱きたいと思った。自分の下で震える躯を。
そしてリュミエールがそれを拒まないであろう事を知っていた。

その衝動に、オスカーはシーツを強く掴んで耐えた。
やがてオスカーの体から力が抜け、ゆっくりと、深い溜息が吐き出された。

揺らめく深海色の目を開いてオスカーを見上げるリュミエールの目元に、そっと唇を寄せる。
リュミエールの左耳に手を伸ばして、そこに付けられていた青い石のイヤリングを手に取った。
それを握り締め、オスカーはベッドから立ち上がると、扉の方へ向かって歩き出した。
「……幸せに」
最後に、その言葉だけを部屋の中に残して。

薔薇の海を背にして、オスカーは芝生の上に腰を下ろしていた。
暗闇の中に、星はひとつも見られない。厚い雲が重く垂れ込めているらしかった。
手の中の青いイヤリングを見つめる。

――抱けたはずだった。
抱いてもいいはずだった。

けれども只人となり、聖地を去る自分が、水の守護聖たる身に何を残してやれる？
遠くから幸せを祈っていれば、それでいい。

風に揺られ、ざわざわと赤黒い薔薇の波が音を立てた。建前の陰で自分の心の中に押し込めた、黒い感情のように。

――何もかもを奪いたい
誰の目にも晒したくない
腕の中に囲って、思うままに抱いて、愛して愛して愛して、

――永遠に傍を離れる、その前に、壊してしまいたい――

オスカーは大きく息をついた。

何よりも大事な人だ。あの人を傷つけるであろう自分の感情を、永い永い間、縊り殺し続けてこれたほどに。

それは嘘偽りではないはず。

オスカーは目を瞑り、掌の中の青いイヤリングにそっと口付けた。

「……オスカー様」

固い声が、頭上から降ってきた。

遠くの自邸の明かりを背景にしたシルエットがオスカーの上に被さる。

反射的に手の中のものを握り締めて覆い隠し、オスカーが見上げたそこには、黒髪の次代の守護聖が立っていた。

夜目にもその拳が震えているのがわかる。

「……リュミエール様のお相手は、貴方ですか」

「…何の事だ」
殊更に声を冷やして、オスカーはそう答えた。目の前の姿が大きく震えたのが見えた。
「……今日の夕方、リュミエール様の所へお見舞いに行きました。玄関先で、立ち去る貴方の後姿が見えました」
その声は、傍から聞けば滑稽なほどに震えている。オスカーは無言でその言葉を受けた。
「リュミエール様は酷く顔色も悪くて、お疲れの様子で、目を合わせて下さらなかった。どうしてそこまで無理をしたのか、どうしても聞きたくて、無理矢理こちらを向かせたら……首筋の、痕が、」
震えが大きくなりすぎて、言葉はそこで途切れた。何度も荒い呼吸を繰り返し、言葉を続けようとする。
オスカーはただ、遠くを見たまま黙っていた。
ようやく震えを収めた少年が、再び口を開く。嘲りの口調で。
「どうやって、あの躯を開かせたんですか？」
暗い炎が、オスカーの中で火を灯した。
「……何だと？」

様子の変わったオスカーに気づかず、黒髪の少年は自嘲気味に言葉を繋いだ。
「かっとなって無理矢理抱こうとしたら、泣き喚いて抵抗されましたよ。何も知りませんっていうような綺麗な顔をして、貴方にさんざん抱かれてきたんでしょうに」
とうの昔に頭に血が上っているらしい少年は、オスカーから立ち昇る気配に気がつかない。
「聖地から出てお行きになる前に、どうやったらあの人が落ちたのか、是非教えていただきたいですね。あの躯を何度も楽しんだんでしょう？」

風を切る音がしたあと、どさりと片腕が芝生の上へ落ちた。
黒髪の守護聖は呆然と、何も無くなった自分の肩から先を見た。拍動に合わせて血が噴き出している。
「……ふざけるな」
痛みを感じる暇もなく、黒髪の守護聖は目の前の先代から迸る殺気に恐怖を覚えた。目が驚愕に見開かれる。
「どうしてお前のような奴が、あいつの隣に立つ権利がある？……炎のサクリアを持つというだけで。」
むしろ静かなほどに、そう言葉を紡ぐオスカーの左手には青いイヤリング、そして右手には長剣が握られていた。
「返せ」

瞳の中には怒り。そして、狂気。
「返せ。……それは俺のものだ」
立ち竦む黒髪の少年へ、オスカーは大きく剣を振りかぶった。

オリヴィエが夜になって見舞いに来た時から、リュミエールは極度に疲労を滲ませていた。半日ベッドに横になっていたはずなのに、少しも休養になっていなかったかのようだ。
心身ともに打ちのめされたようなそのあまりの痛々しさにオリヴィエのほうが狼狽えてしまい、なんか食べる？とサイドテーブルにあった林檎を手についつい聞いてしまった。
ベッドにぐったりと体を沈ませたまま、リュミエールは緩く頭を振った。今のリュミエールが水すら飲めない状態であるということはオリヴィエも聞き知っている。
溜息をついて、ベッドサイドの椅子に腰掛けたその時だった。
ふ、とリュミエールが顔を上げた。
「リュミちゃん？」
「……オスカー？」
オリヴィエから逸れた方向に向けられていた、何処となくぼんやりしたリュミエールの瞳が、急速に覚醒していく様子をオリヴィエは見た。
「オスカー!?」

いきなりそう叫んで、リュミエールがベッドから飛び起きた。その目が大きく見開かれたと思うと、リュミエールは自分の体を抱え込むように床の上にくずおれた。
「リュミちゃん!?」
あわててオリヴィエが傍に寄る。リュミエールは目をぎゅっと瞑り、強く頭を振った。
「駄目です、オスカー、駄目です……オスカー!」
苦痛の表情で頭を抱え込んだリュミエールが、悲鳴を上げた。
「いやぁぁぁぁぁ!」
次の瞬間、オリヴィエもリュミエールの感じた炎のサクリアの異常に気がついた。
とてつもない力で無理矢理、炎のサクリアが捻じ曲げられるような衝撃。流れ落ちる水の流れを強引に引き戻すような、酷く不快な感覚の波がオリヴィエを襲う。オリヴィエにすらこれほど悪寒を抱かせる感触は、炎の対となるリュミエールであればいかほどかに感じさせられている事か。
ひとしきりその波が収まり、自分の体を抱き締めるようにして床に座り込み、震えていたリュミエールが、急に立ち上がった。テラスに続く戸を開け放って外に駆け出してゆく。
「リュミちゃん!?」
驚いたオリヴィエも慌てて後を追った。嫌な予感がした。今、引き止めなければ、取り返しのつかないことになると。
しかし裸足で走るリュミエールは、その体の痛み具合からは考えられないほどに素早かった。
オリヴィエは、ほどなくしてリュミエールの姿を見失った。

（オスカー、……オスカー）
リュミエールはただひたすらに、炎のサクリアの気配へ……オスカーの気配へ向かって走る。
場所はわかっていた。
あの薔薇の庭園だ。

茂みを抜け、視界が開けた瞬間。
リュミエールはその場で立ち竦んだ。
全身を血の色に染めたオスカー。その体から立ち昇るのは、紛れもない、全盛の力強い炎のサクリアだ。
そして、その足元に積もる肉塊。

夜闇の中に、雨が細く降り始めた。

「……許せなかった」
頼りなげな細い言葉が、俯きがちに佇んだオスカーの声で聞こえてくる。
「炎のサクリアを持つというだけで、平然とお前の横に立つこいつが、…平然とお前を傷つけるこいつが、許せなかった……」

リュミエールは、不思議と恐さを感じなかった。
死者への畏敬も抱(いだ)かなかった。
ただ、剣を持ったまま立ち尽くすオスカーを痛ましいと思った。

「……リュミエール」
「はい」
そこで初めて、オスカーが顔を上げ、リュミエールのほうを向いた。
剣を持った掌が広げられた。炎の長剣は落ち、金属音を立てた。
空になった手が、真っ直ぐにリュミエールのほうへ伸べられる。

「お前を、愛している」
アイスブルーの瞳は、穏やかな色を湛えていた。
「……駄目なら、お前が、俺を裁いてくれ……」

――お前を何処かに閉じ込めて
――誰にも見せないで
――誰にも逢わせないで

――壊れるほどに、滅茶苦茶に愛して……

リュミエールは、オスカーの言葉がその全てを指しているのだと判った。

判っていて、躊躇いなくその手を取った。

やがてオスカーの手はリュミエールを強く抱き締め、リュミエールの両手がオスカーの広い背中へ回された。

雨足が強くなる。

雨粒に当たった赤黒い薔薇が、一本ずつ、その色を白へと変えていく。

降り続く雨は、抱き合ったままの２人の足元の赤い血を、ゆっくりと押し流していった。

Melancolia

冷たい月光が一面を青く照らす部屋の中へ一歩踏み込んだところで、オスカーは立ち竦んだ。
白い身体に目一杯の四肢で絡む、毒蛇を想像させる薄黒い姿は、この星の歴史上最悪と称される独裁者の顔を脱ぎ捨て、白磁のような胸の上で号泣していた。
水の守護聖が、未だ挿入されたままの態勢で、月光に淡く光るすらりとした片足が、天高く掲げられてさえおり。
薄く汗を佩いた顔をゆるりと傾けてオスカーに向けられた、限りない聖性を伴ったその視線と、目の前で行われているその光景のグロテスクさとの齟齬に激しく混乱して、２つの物体をまとめて両断したくなる衝動を辛うじて抑えるのが精一杯だった。

その透き通った視線に、清廉な微笑に、何故か覚えた既視感の元を、どうしても想い出せないままだった。

「オスカー様。ジュリアス様が執務室の方へお呼びでございます」
星から次元回廊を通って王立研究院に戻り着いて早々、炎の守護聖の顔色を窺って怯えた表情の研究員からそう言伝(ことづ)てられた。

「……後にしていただけないか。」
業火のような氷青色の瞳で睨(ね)め付ける。
今すぐにでも、この水の守護聖の所業について問い詰めなければならなかった。今すぐ。
「帰還次第、必ずすぐに来参せよ、とのお達しでございます」
泣きそうな声で研究員が応じる。
「オスカー」
腕の中の水の守護聖の声音で促されて、その身体を下ろした。どこをどうして痛めたのか考えたくもなかったが、帰り道、片足を軽く引き摺っていたので、ここまで抱え上げて運んだのだった。
視線を合わせて淡い笑顔を向けられる。
「…どうぞ、ジュリアス様のご招請をお先に。私は私邸へ戻っております。本日の件について検討が必要であれば、いつでもお出で下さい。」
清らかで完璧な水の守護聖の微笑に、熱くなった血がなお沸騰して全身から吹き出すかと思った。
「判った。首を洗って待っていろ。」
穏やかならぬ、凄まじいまでの怒気を孕んだ発言に、その場の僅かな数の研究員たちが一斉に怯える。
「…首のみと言わず、全身綺麗に清めてお待ちしておりますよ。」
これ以上はない、自分に対する痛烈な皮肉だと、そうオスカーは受け取った。

初めてのあの出会い方が、良かったのか悪かったのか判らない。目覚めるまで穴が空くほど見詰め続けていたのに、先入観で女性だと思ったのは、その姿に一瞬で心奪われていたから、だった。
恋愛対象ではなく同僚だと知らされて、否応なく見方を切り替えた。歓迎されないことを知りつつ、言いたいことを言った。曰く、お前は大事なことから逃げてきた。俺はしたいからする、言いたいから言う。自分が傷つくことを恐がっている。自分が一番大事か。自分を認めろ。
俺はお前にはなれない。
本来そうであろうと思われた落ち着きを目に見えて取り戻した彼を見、自分の言動に改めて自信を得た。
少年期の終わりから青年期へ脱する過程を間近で見ていた。年月の積み重ねはその人を綺麗にし続けるばかりで、聖性はよりいっそう研ぎ澄まされ、立て直したはずのオスカーの心は否応もなく傾き続けるだけだった。
自分を認めろ、そう言ったのは自分だと気付き、ごく最近になってからある種の諦めと開き直りを得て、思いの丈を打ち明けた。自然なことだった。
その時の自分の愛の告白が、リュミエールの心を揺らした手応えを確かに感じたのだが。
「…私には、そんな資格はありませんから」
目を伏せられて返ってきたのは、そんな台詞だった。哀しむ風でもなく、事実を淡々と述べるようなその態度に、度が過ぎる謙遜か、と思ったが、これからいくらでも説得に時間を掛ける心構えは十分にあった。
折々の、心を尽くした言葉の数々。首を横に振られ続けるばかりだったが。

一度などは相当に強引に抱き締めて、半ば無理矢理に唇を重ねた。すぐに力尽くと言ってもいいほどの強さで引き剝がされたが、恋の手管に関しても百戦錬磨のオスカーの勘は、リュミエールの裡に秘められた確かな想いを感知していた。
ただその時に向けられた、深海色の瞳に籠められた激しい敵意だけは紛れもない本物で、そのアンバランスさを訝しく思ったことを覚えている。
これまでは気付いていても看過してきた、水の守護聖の密かなる外行を、追い始めたのはそれからだった。
過去にもあったことだった。内憂なり外患なりでざわつき、守護聖たちがどう力を尽くそうともサクリアの動向が安定しなかった星が、大海に丸ごと落ちたように一瞬で静けさを取り戻したことが、一度や二度ではなく。その前後に水の守護聖がどうやらその星へ密かに訪れているようだと、気付いたのは着任してからのかなり初めの頃からだった。
以前は気付いていても気にも留めず、ましてや追うことなど考えもしなかったが、自覚した恋心がそれを素直な心配に変えた。概ねの場合、既に聖地の王立研究院へ戻ったところで出会ったが、一度は次元回廊が水の守護聖の戻りを待つ形で開かれていて、途中まで出迎えに向かった。だがそれを知った光の首座から、何故か「今後は厳に慎め」と言われた。
「何故ですか」
「…リュミエールの行動が星の安定を得るためであると、そなたも理解しているであろう。一触即発の情勢の真っ只中へ、そなたの炎を持ち込んでどうするのだ」
水の守護聖が向かった、そこで何が行われていたのか、今まで考えもしなかった自分の迂闊さを、

オスカーは今や呪うばかりだった。

光の守護聖の執務室には、力強い眼光を宿した光の守護聖と共に、陰鬱な闇の守護聖の姿があった。それでオスカーは確信し、かつ愕然とした。ここに至っても信じたくなどなかったが。

リュミエールの行動の、その内情のすべてを、この二人は知っていた。

「…ジュリアスに言われたであろうに。愚者は自ら愚を弄す。無闇に動かずば、知らずに済んだものを」

「クラヴィス」

闇の守護聖を鋭く窘め、光の首座は凛とした眼差しを緩めずにオスカーを見遣った。

「こうなった今、ひとつだけそなたに言うべきことがある。

…あれを責めるな。あれのした事を罪と言うのなら、我々二人も承知していたことで等しく罪を背負っているのだ。」

「罪、と言うのであれば、水の守護聖という座の存在そのものが罪となりうるのであろうな」

その闇の守護聖の口振りに、薄く知覚した。代々の水の守護聖の、これが初めての事例ではないのだと。

「……女王陛下は。…ご存じないのでしょうか」

「愚かな事を申すな。どなたが星への次元回廊を開いていると思っている。」

「……」

無意識のうちに歯軋りが鳴る。知らぬは自分ばかりなり、という訳か。
今まで、対の存在だと思ってきた。炎の守護聖と水の守護聖というものは。どれだけ対立していても、全てが互いに、どこまでも察(あきら)かであると思っていた。
「そなたの口惜しさは計り知れぬであろう、それは理解できる。だが炎の守護聖には、いかにして知ろうとも、この事実を絶対に相互後代へ伝えてはならぬことになっているのだ」
「何故!!」
「この定めが成立するよりも以前、就任直後の水の守護聖が、炎の守護聖に斬殺されたことがある」
「……」
激しい眩暈に視界が歪み、代わりにあの日の光景が嫌というほど鮮烈に脳裏へ浮かんだ。
紗のような噴水の流れよりも清らかに、眠るその姿。息をするのも忘れ、手を触れることも出来ずに、ただ見守ることしか出来なかった。
あの限りない聖性が、汚される日が必ず来ると、そう知らされていたなら、俺は――俺はこの手で、あいつを――
体の芯が砕け、昏い中空を仰いだ。
「…分かるであろう。
我々だとて、こうなることを望んでいた訳ではないのだ。出来得れば起こらぬままであってほしいと。事実、最後まで縁のない話で終わった水の守護聖の代もある。だが――」
「それより先は、あれの話を直接聞くが良い」
気怠げに闇の守護聖が立ち上がりながら、憐れみを含んだ目でオスカーを見遣った。その視線に、

リュミエールに対する自分の想いをこの闇の守護聖は知っている、のだとオスカーは気付かされた。
「…さて、罪人となるのは、果たして誰であろうな。」

最後に投げ掛けられた闇の守護聖の言葉の意味を理解できないまま、重い足を引いて水の館へ向かった。

恋情を語るために何度か訪れた水の館の居室は、以前よりも薄暗く、そしてどれだけ招かれざる用件であったとしても、必ず扉まで出迎えに出ていたその姿は、今晩に限って仄暗い部屋の奥で佇んだままだった。
辛うじて表情を見分けることができる程度のその昏さが、今のオスカーには幸いだった。全てが明るい光のもとに晒されていたならば、即座にその姿を斬り捨てかねない衝動がある。
「…ですから、申し上げたのです。諦めていただきたいと。忘れて欲しいと。」
距離を縮めないまま、遠くから緩く微笑んでリュミエールがそう語る。
敵意を纏う必要はもうない。そんなことをせずとも、炎の守護聖がもはやその身体に近づかず、触れようとしないことは明らかであった。その生命を手に掛ける場合を除いては。
「……最初から、正直に言えば良かったんだ。何故、そうしなかった」
「言えば貴方は、私を殺したでしょう？」

「そうかもな。死ぬのが恐かったのか？」
「いいえ」
場に似つかわしくない語気の強さで断言されて、オスカーは訝しく眉根を寄せた。
先刻までの緩やかな微笑は消え失せ、時折ふと垣間見ていた、その芯の強さを思わせる強い瞳の色で見据えられた。
水の守護聖が、ゆっくりと両手を広げた。世界の全てを受け容れるが如くに。
「この生命は女王陛下に捧げた物。宇宙の安寧を守るために、全てを尽くすべき身。貴方ごときに殺される謂(いわ)れはありません」
このような場で女王の名を持ち出す不敬と、その底の知れない透徹な意志とに、オスカーの意識が混濁する。
ふと気配が緩められて、水の守護聖は困ったように僅かに首を傾げた。よく見慣れた、憂いを帯びたあの表情。
「…貴方も、ですか。」
「…何がだ」
「私が三文芝居のような安っぽい同情で、誰にでも見境いなくやすやすと足を開いていると、貴方

もそうお思いなのですか」
その清らかな姿からは似つかわしくない、下卑た文章が紡がれる。だがオスカーは、その言葉を否定できる己の言葉を持っていなかった。
静かに溜息を吐かれる。これもまた、明るい陽の下でよく見た光景。
「…だとしたら、私もずいぶん侮られたものですね。惚れただの何だのと仰っていただいても、その程度ですか。」
「……」
「皆様方は、私をどれだけ不具扱いにすれば気が済むのでしょうね」
真っ直ぐに向けられる仄青い視線と、どこまでも深い水底から響き渡るようなその声音に、身震いがした。

「守護聖のサクリアが集団心理学的にしか作用し得ないということは、貴方もご存知でしょう。如何に宇宙を司る存在とはいえ、サクリアのみを用いての介入には自ずから限界があります」
平穏の乱れた地。炎のサクリアを送れば逆上し、引き上げれば恐慌に陥る。水のサクリアを送れば倦怠に泥濘み、引き上げれば乾き切る。
だからこそ炎の守護聖は、必要とあらば王立派遣軍を率いて現地へ向かう。
「私は、貴方に諭されたあの日から、考えました。どこまでも考えました。私にしか出来ないことを。貴方が戦神として、貴方にしか出来ないことをしているように。」
「…それが、これか」

「見極めはしているつもりでおりますよ。それこそ、見境なく、ではなくて、ですね。」
軽く微笑われた。

「問題はキーパーソンです。集団心理学的に作用し得ず、かつ情勢が治まらない、ということであれば、ごく少数、大抵はたった独りの者が強大な権力を有していることが多い。
その暴走が精神病質者（サイコパス）や気質障害者（パーソナリティディスオーダー）、もしくは各種の薬物等の中毒などによるものであれば、これもまた私の出る幕ではありません。しかるべき医療に照らすべきものですから、王立研究院へ対応を依頼します。
ですが大体において、独裁者というものはそのような特殊な人間ではなく、孤独と裏切りに怯えるただの哀れな一人の人間なのですよ。両手を押し包んだだけで、泣いて改心してくださる方もいらっしゃるほどです。
しかしながら、この身を用いることがどうしても必要とあらば、それを躊躇うつもりはありません」

リュミエールのその言葉の、どこまでも貫かれた芯は疑いようもなく、言葉もなくオスカーは俯き、歯軋りを鳴らした。
「…オスカー、私は貴方に感謝しているのです。私にしか出来ないことがあると、そう仰ってくれた貴方に。」
（…感謝しますよ、オスカー。）

思い出した。既視感を覚えた、あの視線。あの日、あの湖で告げられた、あの言葉。
激しい嘔気を覚えた。
「…先程、王立研究院より連絡が来ました。かの星で、第三国への核配備のために進軍中であった艦隊へ、撤退命令が出たと。」
項垂れたままの緋色の髪の上から、穏やかな水の守護聖の言葉が降ってくる。
「必発であった核による世界大戦が回避され、何十億の生命が損なわれずに済んだことを、私は女王陛下の名誉に懸けて、誇りに思います」

顔を上げられないまま、光の首座の言葉を思い出す。
（最後まで縁のない話で終わった水の守護聖の代もある。だが――）
だがその平穏な任期の陰で、現任の水の守護聖ならば救えたはずの生命が無数に喪われた可能性を、オスカーは否定することができなかった。

判った。もういい、と思った。
だが。だが、それでも。
胸が痛かった。苦しかった。

この砂を噛むような感情を、何とかして欲しい、と思った。

それは炎の守護聖ではない、宇宙の平穏を無視した、ただの一人の男としての弱さだった。

「ひとつだけ、答えろ」
「…何でしょうか」
「俺のことを、愛していたか」
「……何を今更。愚かな事を」
「最初で最後だ。金輪際、二度と問わない。答えろ。」
「……」

長い沈黙が流れた。
やがて細い溜息が零れた。微かな震えを帯びて。

「……貴方に愛されたかったと。その願いを想い留めることも、それを貴方に偽ることも、私には出来ません」
視線を上げて、その人を見た。穏やかな、少し困ったような、あのいつもの微笑。
「それを私の弱さだと、そう批判する方がいらっしゃるのなら、それだけは甘んじて受けましょう」

ベルトを外して大剣を投げ捨てた。けたたましい金属音が室内に響く。
性急に距離を詰め、後退る身体に追い付いて、力の限りに抱き締めた。
息をも吐けない気配がして、腕の中でその身体が身悶えた。
「何を……」
この細い身体ひとつで、何もかもを最後まで背負い続けるつもりだったのだ。この人は。
息もできないほど狂おしく、愛おしかった。
嘘を吐かれなくて良かったと、何よりも生涯最大の僥倖としてオスカーはそれを受け止めた。
「愛している。離すつもりはない、諦めろ。お前も俺を愛せ。」
「血迷い事を…」
「正気だ。どこまでも。」
「ありえません。貴方をどれだけ苦しめるか、そのことに私がどれだけ苦しむか。地獄を見ろと?」
「その通りだ。俺と共に地獄を見ろ。」
「…なんて残酷な事を、貴方は……」
「お前が誰よりもよく知っているだろう。俺は俺のやりたいようにやる。お前をどれだけ苦しめることになっても、宇宙の誰より多くの愛をお前に注ぎ続ける」
「……」
腕の中の身体は震え続けている。この先の長い任期中、オスカーもリュミエールも、どれだけの苦悩を背負うのか、その果てしなさを一つ一つ確かめているように。

やがてリュミエールの震える吐息が、長く尾を引いて零れた。賭けに負けた、その事を哀しみと共に悟った、長く細い吐息だった。
水色の睫毛に伏せられていた視線が上がり、オスカーの氷青色の瞳と絡んで、抱擁は初めての深い深い口付けに続いた。
「…ひとつだけ、約束を下さい」
唇が離れ、首筋を覆っていた衣服を露わにし、白い肌に残された跡をオスカーがひとつひとつ丹念に上書いていた途中、リュミエールが囁いた。
「…何だ」
細い指が、オスカーの緋色の頭を緩やかに包んだ。
「もしも私が壊れて、任を果たせなくなる時が来たら。その時は、貴方が私を殺して下さい。必ず。」
動きを止め、永遠かとも思われるその至福の瞬間を、心ゆくまで味わった。
「女王の御名と、炎の守護聖の剣に懸けて、必ず。」

籠は連理、鳥は比翼

不自然なほど離れた場所で、端正な古典派の彫刻のように佇む、顔面蒼白の水の守護聖と二人――どれだけ不本意でも二人と言わざるを得ないのであろう――この場の二人で、ただ沈黙した。

真っ白な、ベッドの前で。

この奇妙な場所に辿り着いた経緯を、ここから逃れる何らかの鍵がないかと縋る思いで、オスカーはもう一度、思い返す。

聖地の庭園で、栗色の髪の女王候補と金の髪の女王候補が、オスカーにとっては実に愛らしく可愛い調子で互いに言い争っていた。星の育成の事で競っているのかと思いきや、手紙を送った、いや受け取っていない、などという、女王試験の当初の状態から考えると随分と微笑ましくなった内容でお互いを責めている。

そこへリュミエールが通り掛かった。異変が起きたのはその直後だ。

空間が捻り上げられるような感覚があって、異様な違和感にオスカーは咄嗟に近くの金の髪の女王候補の身を抱き締め、庇った。視界の隅でリュミエールが同じように栗色の髪の女王候補を抱き込んだのが見えた。

ねじれの感覚が最大限に達した瞬間、唐突に腕の中の女王候補の存在が消滅してオスカーは急激に前のめりになり、転びかけて数歩、たたらを踏んだ。
根拠のない全くの直感的な推測でしかないが、彼女らは元の聖地に残った、ようだった。だが自分が辿り着いたここは、一体――
顔を上げてみれば、同じように顔を上げて図らずも目を見合わせた同僚と、この通りの空間だ。

壁は見えないが、部屋の中に在るという感覚がある。床は見えないが、地を踏んでいるという感覚がある。透明に近いが透明というよりはまさしく見えない、の方が適切であり、内部の空間は薄暗い。いずれにしても、通常の摂理で出来た通常の場所ではない事が明白だった。例えるなら、夢魔の世界に近い。残念な事に夢ではないようだが。
色を持つものといえば、少し離れた所で視線を向こうへ遣る水の守護聖と、同じ方向へ視線を遣る自分の身体、その二人の視線の先の――ただ白い、全てが白く覆われたベッドだけだった。

部屋らしきものの中に、自分と、犬猿の仲の同僚と、ただベッドらしきものだけ。

想像を絶した全く訳の判らない状況に、オスカーは驚きを通り越し、もはや呆れた果てた。
次元の隙間にでも落ちたのか。ひとまず、直近の危険はないようだが。
ぐるりと360度、見えない壁、を見回し、更には見えない天井を見上げ、見えない床を見下ろした。
出口のようなものは無い。どこにも。

となれば、残る調査すべきものはひとつ。
オスカーは徐ろに、ずかずかと歩き出して純白のベッドへ近付いた。傍らまで来ると、一応の安全確認とこの訳判らなさの多少の腹立ち紛れを兼ねて、ベッドの縁をブーツで思い切り蹴り上げる。だん、と響いた派手な音に、背後の同僚がびくりと身を竦めた気配がした。
ベッド自体は、その大きさがオスカーの邸のそれをも凌ぎかねない特大サイズであることを別にすれば、どこまでもごく普通のベッドでしかなかった。ベッドヘッドの材木には重厚な浮き彫りがふんだんに施されていて、素材の良く判らない純白のシーツがベッド全体を覆い、滑らかな純白のカバーが薄く掛かっている。ああ、あと、矢鱈滅多と肌触りの良さそうで、マットのクッションの良さそうな高級感。
しかしそこに、出入り口など在る訳も当然のように無い。念の為無造作にシーツを捲り、ベッドの下も確認してみたが、その床も他と同様の掴み所のない透明感で統一されているだけだった。
途方に暮れてシーツを掴む手を離し、ひらりと身を翻して、そこでまた、多少の違和感に襲われる。
眉を顰め視界に入るものを再度確認し、違和感の正体にすぐ思い至った。
水の守護聖がこちらを、すなわちベッドの方向を、足元に落とした視線で見遣り、真っ青な顔で硬直している。
その表情はあからさまに、この状況の何かを知っていた。知って、彫像のように硬直していた。

「…何を知っている。リュミエール。」
オスカーが思わず発した、その機嫌の悪さが透けて見える低い低い声で問えば、水の守護聖の姿が目に見えて狼狽えて身震いする。
「何だ？　さっさと答えろ、リュミエール。こんな茶番に長々と付き合う気はない。」
水の守護聖は唇を噛み締め、視線を上げてオスカーを強く見据えたが、一瞬合った視線はすぐに逸らされ、落とされた。
「…噂を。聴いたことがあるのです。」
「噂？　何だ？」
「…不可思議な時空の。そこを出るには、ある……行為が、必要だと。」
ある行為？　空間と自分以外の一名と、ベッドしかない部屋で？
「何だ、それは。眠るのでもなければベッドだけで出来る事など、セッ…」
そこで辛うじて止められたのが幸いだった。自分が発言しかけた内容にオスカーは絶句した。
水の守護聖は体の前で長く細い指が食い込まんばかりに両手を組み合わせ、先程よりも一層、これ以上無いほどに青褪めている。
「……」
…まさか。本当に？
「…リュミエール。」
「……」
名前を呼ぶだけで、リュミエールの身が震える様が見て取れた。

真偽の程はともかく、その血の引き様を見るに、水の守護聖が聴いた噂とやらがオスカーの想像しているものと一致しているのは確かだった。
眠るなり何なりだけで事が済むというのならリュミエールは率先してとっくのとうの先にそう言っているだろう、これほどまでに青褪めて頑なに発言を拒む様子は――

今、この状況的には、自分の相手はリュミエールしかいない、その――水の守護聖と？
このベッドで、つまり――性行為を？

開いた口が塞がらないまま、二・三度、何かを言おうとして口が歪み、結局何も言えないまま、オスカーは盛大なる溜息を吐き出した。視線の先でびくりと水の守護聖が身を震わせる。
「巫山戯（ふざけ）てやがる」
それだけを辛うじて吐き出すように言えば、水の守護聖は眉根を歪めてきつい表情で押し黙った。そう言いたいのは自分の方だ、と今にも聞こえてきそうな表情で。
オスカーはもう一度天井を見上げ、周囲を見渡し、足元に視線を落とした。何とかなるのならそれ以外の手を幾らでも取るつもりだったが、掴みどころなく全く手掛かりのない部屋の中は先程から少しも変化する様子がない。
再度、炎の守護聖は盛大なる溜息を吐いて、ありとあらゆる呪いの言葉を脳裏で巡らせてから、視線の合ったリュミエールを、端麗な顔に眉根を強く寄せてこちらを見遣る水の守護聖を、仇の如くに忌々しく見据えた。

「認識の違いがあったら冗談にもならないから、はっきり確認しておく。この部屋は、セックスをすれば出られる。そうだな？」
「…あくまでも、噂です。私の聴いたものは。」
「同じ事だ。確証できるものなど何もない。だがこんな場所で時間を浪費する気はさらさら無いし、セックスの一つや二つくらい、とっとと済ませて出ていくぞ」
　案の定すぎるほど表情を強張らせたリュミエールを、オスカーは敢えて鼻先でせせら笑った。怯えられるよりは憎まれる方が随分とましだ。
「どうせ事が済めば忘れることだ、それとも何だ？　いい思い出とやらにして後生大事に覚えておくか？」
　流石に癇に障った様子のリュミエールが強くオスカーを睨み返し、目を閉じて大きく息を吸い込む。
「……忘れます。勿論。」
「じゃあ話は決まりだな。」
　薄く笑って右手を差し伸べたオスカーを、やや酷薄に表情を変えたリュミエールが冷たく無視した。
「…ご自分が主導権を握っていいのだと、勝手に思ってはいませんか？　オスカー。」
　主導権、という言葉にオスカーが眉を顰め、その発言の意図するところに思い至ってますます眉根を寄せる。
「まさか、この俺に女役になれってことか？　冗談じゃない」

「条件は公平なはずですよ。私も男なのですから。」
話さえ付けば大人しく組み敷かれるかと思っていたが、こういう機会にこういう強情さを、不意を打たれて思い知らされるのだ。これまでも。
しばらく睨み合いが続いたが、さっさと済ませると言ったのは自分だ。強行突破を諦め、話し合いに持ち込む。
「判った。が、出来る限り、それは遠慮したい。他にそっちの希望はないのか。される側を断れるのであれば、多少の要望には応じる。」
悦くしてやるぜ？　男が相手でもな、と言い掛けて流石に控える。
「要望……」
リュミエールにもその台詞は不意だったらしく、寄ったままの眉根を少し緩め、軽く目を見開いた。
しばらくの沈黙を重ねた後、水の守護聖は観念したように目を閉じて、答えた。
「……では、こういうことで。」

「……おい」
相当に異様な状況に、脳髄がじんわりと痺れ、もはや冷静な判断もままならず、視界ゼロと沈黙との圧迫感に耐えきれずにオスカーは声を掛けた。眼の前にいるはずの相手に。
妥協の結果ではあるし、自分もその提案に脳内は驚天動地で引っ繰り返ったものの、最終的に挿

れる方なら、と同意はした。したにはしたが……
「……何でしょうか。」
返すリュミエールの、声だけで判断するその機嫌は相当に悪い。おそらくこちらを見たのだろう、少し離れたマットレスが僅かに揺れる気配が背中に伝わった。
「余計なお喋りはご遠慮したいのですが。」
「大丈夫か？　手伝ってやろうか？」
「結構です」
自分の不安を覆い隠すように余裕を装って咄嗟に発した提案は、発言し終わらないうちに一刀両断のもとに切り捨てられる。
盛大に吐いた溜息の中に、身の内の熱の籠りを密かに自覚した。

ブーツを脱いだだけで服を着たままベッドに横たわった、オスカーのそのアイスブルーの両目は、裂かれたシーツの端布できっちり巻き覆われている。
『私を見ないでください。私の身体に触れないでください。準備は、それぞれ自分で。』
自分が挿入される側になることと引き換えに、リュミエールの出した条件がそれだった。
多少の要望には応じると言ったし、オスカーがその条件を飲むことで屈辱的な側を回避できるのなら上々なのかもしれない、が、それにしても。
これだけ完全に視界を塞がれては、相手も気遣いもあったものではなく、問答無用でされるがま

まにならざるを得ない。
「遣り方は知ってるのか？　終わってみたら血塗れ、なんてのは御免だぞ」
「……ご心配なく。」
オスカーの発言に水の守護聖が明らかに怯んだ気配を感じたが、口調だけは先程からの冷淡そのものままだ。
「勝手にしろ。そっちの準備ができたら呼べ。」
半分以上の自棄で、わざとらしく両腕を頭の上に投げ出して組んだ。
「……」
多少の怯えの残る気配に、ほんの少しの憐憫が頭を掠めたが、言えば言うほど反発されるだけなのは明白なので後はもう、向こうの要望通りに黙りこむ。
（黙ったら黙ったで、困ることもあるんだがな……）
この水の守護聖は、はたして気付いているのだろうか。

圧し殺した溜息と、意を決したように動き出す気配。
沈黙の中、マットレスの微かに揺れる振動。
密やかな、自分のものでない衣擦れの音。あの裾の長い、薄いローブの。
しゅる、と、何かを――下着を？――脱ぐ音。
……小さく息を呑み、…僅かに吐き出される吐息。再び聴こえ始める、衣擦れ。
そのいちいちが、視界を塞がれて過敏になったオスカーの聴覚を揺らす。

否が応でも、脳裏で想像せざるを得ない。

あの、水の守護聖が。自分で自分の秘部を。その、長い指で。

男の見た目などに興味はないが、そのオスカーでもリュミエールの顔は端麗だとは思う。

その顔で自分に向かって眉を寄せ、憂い、あるいは冷淡にあしらわれるから余計に腹立たしいのであって。他の奴らには愛想良く振る舞う癖に。

その綺麗な顔で多少なりとも自分に好意を寄せてくれ、今回の事態にも少々控えめに、従順に応じてくれれば、女性を抱くのとほぼ変わりなかっただろう。

正直な話、全く興味が無い訳でもなかった。

美しいという点では掛け値のないこの水の守護聖に受容され、きちんと手順を踏み、向き合って、愛撫を加えたなら、どんな反応をするのか。どんな表情を見せるのか。

どうせ忘れるのだからこんな場でくらい、明らかに経験値の高い自分に任せればいいものを、強情な水の守護聖は今も、自分で自分に、おそらくは拙いであろう児戯を施している。

苛立ちと共に沸き起こるのは、断続的に響く衣擦れの音に掻き立てられる、後ろ暗い想像。

水の守護聖が、目を伏せて。白い足を開き。長い指が後ろの孔を、絶え間なく、その周りを、その中へ。

時折り漏れ聞こえる密やかな吐息が想像を一層煽る。

闇に閉ざされたままの世界だけの中で、脳裏がじんじんと痺れ、自分の判断力が麻痺してきてい

るのだと思い知らされた。

「……オスカー」

やがて時間が過ぎてから、事更に冷静を繕った声が、小さく呟いてオスカーを促す。

オスカーは黙ってズボンのボタンを外し、ジッパーを開いて、ズボンと下着とをまとめて短く下げ、自分のものを取り出した。既に相当に反応していた事実からは目を逸らし、軽く扱けばそれは呆気なく硬さと容積を増した。

リュミエールが息を呑んだように思ったのは、自分の気の所為だったろうか。

引き続いて耳聡く聴き付けた、密やかにも熱を帯びた溜息は紛れもない本物で、間を置かずにリュミエールが横たわったままの自分へ近寄り、足を開いて、自分の上へ跨った、ようだった。視界の閉ざされた闇の中、感じるのはベッドの振動と気配だけで、身体同士が接触しないようにリュミエールが細心の注意を払っている節がある。

はらりと流れ落ちたローブの裾がオスカーの腹を撫で、ぞくりと身震いがした。

随分長いような、実際には僅かな時間だったのだろう、リュミエールは躊躇ってから、やがてゆるゆると、自分の上へ身体を下ろしてくる。

乏しかった身体感覚の、一番敏感な自分の先端に熱く窄まったものが当たり、オスカーが一瞬身動ぎしたのと同時に、リュミエールが息を詰めた。

僅かに力が掛かるが、閉ざされた入口は案の定まだ硬く、容易に開く気配がない。

この空間が一体何物かは知らないが、潤滑剤のひとつも無く、ましてやこの手の経験が無いはずのリュミエールにとって無理が過ぎるのは当然といえば当然だった。気が利かないことこの上ない、と得体の知れない対象に毒づく。

「息を吐いて、力を抜け。怪我をするぞ」

平静を装ってそう言えば、リュミエールは思ったよりも素直に息をゆっくりと吐き出し、合わせるようにして沈み込む力を加える。先端が僅かに飲み込まれて、オスカーの口から思わず呻き声が零れ掛けた。

まだ途中で留まっている自分のものを、リュミエールの腰を両手で掴み、思い切り引き下げ突き上げて一気に貫きたい激しい衝動に唐突に駆られる。頭上で投げ出した腕に、熱が籠った。

触れたい。触りたい。両腕で絡め取りたい。

潤いもなく途中で止まったままの、秘部を震わせ、リュミエールの声が漏れた。

「…い、た……オスカ、ァ、」

…たすけて、と、音のない声が聴こえた気がした。

オスカーは自分の目隠しを勢いよく取り去ると、同時にリュミエールの腰に両腕を回して身体を引き抜きながら身を起こし、逆らう間もないリュミエールの身体を引っ繰り返してベッドへ埋めた。

「こんなん、セックスじゃねぇ。セックスってのはもっと熱くて気持ちよくて、幸せなもんだ。」

これまでの痛みで涙に潤んだ両眼を、これ以上無いほどに見開き、紅潮した頬で自分を凝視するリュミエールに、顔を寄せ、低く囁いた。

「全部一から遣り直しだ。どうせ忘れるんだ、今だけ俺に任せろ。最高の経験をさせてやる。」
震えるリュミエールの両頬に手を回し、何かを言い掛けた唇を唇で撫でた。触れるだけのキス。ずっと感覚に飢えていた肌へ、たったそれだけの刺激がぞくぞくと全身へ響き渡る。
「あ、ん、オス、」
喋るとそれが重なったままの唇への刺激に繋がることに、気付いたリュミエールが言葉を切る。吐息が熱い。
オスカーは続けて唇を唇に滑らせ、啄み、押し当てた。
自分の下のリュミエールに、この上ない躊躇いはあっても、抵抗はない。
試しにリュミエールの、赤くなった唇を舌先でちろりと舐めてみる。唇が戦慄いて薄く開いた。
様子を見ながら、殊更ゆっくりと、深々と唇を重ね合わせ、舌を忍び込ませたら、口内で舌が逃れながらも僅かな反応を見せた。リュミエールの経験の多寡は知らないが、こういう行為に応える勘所を直感的に理解している。
深く唇を絡めたまま、何度も角度を変えて、長い間唇を貪った。漏れた唾液で唇が滑るのが気持ち良い。
離した唇で顎下を食み、同時に胸のブローチを外したら、幾重もの布の重なりがあっさりと解けて肌が顕になった。息を呑むリュミエールを他所に、抑えきれない衝動のまま掌を胸元へ滑らせる。しっとりと吸い付く肌。
「は、あ、……あ！」
誘惑されるがままに赤く色づいた胸先を指で虐めて、反応を示す躰と、艶を見せ始めた声を堪能

した。
「敏感で感じやすい、いい躰してんな。男にしておくには勿体無い。誰か抱かれたい相手でもいるんなら、そいつの想像でもしてろ。」
戯れに口からついた言葉だったが、目の前のリュミエールがあからさまに顔中どころか全身を紅潮させ、オスカーはその想定外に思い切り不意を打たれた。
「……ふぅん。図星、か。」
オスカーの言葉に震えたリュミエールが身を起こし、逃げ惑ろうとする、その躰に背中から両腕を回して引き戻し抱き締める。
オスカーの内側から、ちりちりと熱く身を焦がす感情。
「…他の男はどうだか知らないがな。俺は、嫉妬で燃える性質(たち)だ。覚えておけ。」
驚いて肩越しに振り返るリュミエールの、その頬に唇を押し当て、耳朶を食んだ。
「……優しくしてやるよ。」
衣装の隙間から腰に手を回し、もう片手で胸元を撫で乳首を摘み、その耳に、熱を帯びた吐息を吹き込んだ。
「は、あ、やぁ、……ぁん、あ……」
断続的に漏れ溢れる切なげな声音を聴きながら、両足をまとめて後ろから片腕で抱え込み、眼の前に差し出され赤く熟れ始めた秘所の弾力と疼きを、舌と、指とで愉しむ。
深い快楽に狼狽え揺らめく腰を引き寄せ直し、背後から手を伸ばしてリュミエールの唇を探り、

指を差し入れて舌をなぞれば、閉じ切れない唇から唾液が溢れ、オスカーの指を甘く濡らした。滑る指を乳首に絡め、弄って摘み、局部のわななきが一層酷くなったところをその震えに合わせ、孔を拡げて、舌を深々と差し込む。

「ひぁ、や、ん……！」

中を舌の動きで少し探ってから、唇を離した。

「物足りない？」

短く訊いてから、自分の中指を口内で濡らし、答えも待たずに秘部へ深々と差し入れる。

甘い悲鳴は声も出せない、様子だった。背が大きく反り、中が疼く。前で屹立するものは限界まで張り詰め、触れればすぐにでも達きそうで、時折微かに撫でる程度にしか触っていない。

先端からぽたり、と、雫が落ちた。

「……リュミエール」

指を入れたまま背に乗り上げ、シャツの前だけはだけた胸筋と腹筋をリュミエールの素肌に密着させて、耳元に囁いた。リュミエールが言葉もなく秘部の中と肌とをわななかせ、幾筋もの快楽の涙が更に溢れる。

躰が熱い。リュミエールの汗ばむ首筋から甘い良い匂いがし、甘い声が自分の耳を擽り肌を撫で、最高に気持ち良い。

もう耐え切れなかった。

中指を入れたままの後ろの孔へ、人差し指を忍び込ませ、親指の先端で更に揉み解し、割り込ませて、充分に解(ほぐ)れた様子だけは冷静に確認する。その場所は熱く潤い柔らかく蠢いて、オスカーの

愛撫に反応し、この上なく甘美にオスカーを誘惑していた。
指を全て引き抜き、オスカーはそのまま後ろから、少しも触れられずに硬く膨張したもので、ゆっくりと、だが最奥まで一息に、水の守護聖の細い身体を刺し貫いた。
「ひあ、あ、あ……！」
中が蠢き、不意にリュミエールの体が震え、オスカーは前に手を回して達しかけたリュミエールのものの根本を強く握り、快楽の解放を堰き止める。
「やああ、あ……！、あ！」
びく、びくりと白い躰が波打ち、涙が溢れ、オスカーが追うその視線の先で、唇の隙間からちらりと真っ赤な舌が覗いた。
ようやく躰の戦慄きが収まると、オスカーは間を置かず、リュミエールの腰を支えてもう一度最奥まで押し入り、内股に手を滑らせて指を這わせ、胸を撫でてその先端を掌で転がし、絶え間なく肌を愛撫する。
「はあ、あ、や、あぁ、ぁん、」
オスカーのものを収めた内壁が絡みつき、締めつけ、熱く蕩ける、それに合わせてオスカーが愛撫を繰り返しながら時折り腰を動かせば、声は一層高くなった。
「や、オス、カ、ぁ…」
自分の動きに合わせて躰を震わせながら肩越しにこちらを振り返り、自分の名を呼ぶ赤い唇。涙に濡れて自分を見詰める、深海色の瞳。
奥まで自分を差し入れてから、身体を傾けて寄り添い、その背筋を舌先でなぞり上げた。背が戦

慄いて反り返る。
「…ねぇ。誰にこうされたかったの。」
背の肌の表面に口を付けたまま、低くて飛び切りの甘い声で囁いた。
驚いて自分を見返し大きく見開かれた深海色の瞳は、オスカーが見計らったように身体を離して殊更ゆっくり抽送を始めると、すぐに強すぎる快楽に眉根を寄せて閉じられた。
「あ、ああ、ああん、ん」
「……クラヴィス様か？」
オスカーに後ろから責められ、ベッドのマットレスへ沈みそうになる細い身体が力なく頭を振り、水色の長い髪を揺らめかせて否定する。
不意に思い当たり、オスカーの中で暗い炎が一気に燃え上がった。身を焼かれる焦げ臭ささえ匂いそうな、嫉妬心。
「あの男か？　あの軍人、精神の教官の」
思い返せば随分と、この水の守護聖はあの男と親しくしていた。自分と同じ軍人であるにもかかわらず。打ち解けた笑顔。寄り添う姿。
そいつにこうされたかったのか、思いながら深々と突き刺した。
「やあああ……！、や、違う……！　あ！」
…それは嘘だ、と、思った言葉を飲み込んで、唐突にリュミエールから自分のものを引き抜いた。リュミエールが息を呑む一瞬の間に、その身を返して表向かせ、手を付いて、真正面から見据えた。アイスブルーの目で。

頬を真っ赤にして目元を潤ませ、自分を見詰め返す深海色の瞳に。
「……じゃあ、誰。」
優しく、優しく囁いた。
狼狽を隠しも出来ないリュミエールの腰を片手で抱え上げ、また挿入した。どこまでも奥深くへ。熱く滑るリュミエールの内側。
「はああ、ああ、んぁ…！」
体重を掛けて最奥まで貫くと、白く柔らかな脚は天を向き、戦慄いてオスカーの脇腹に絡んだ。
眉根を寄せて目を逸らそうとするリュミエールの、頭の下に腕を滑らせ、もう片手を軽く額に添えて促すと、その綺麗な目は再度開かれて自分を見詰める。
「オス、カー……」
視線を合わせたまま腰を動かして抽送すれば、また瞳は潤んで新たな涙が溢れた。
「ひあ、あ、オスカ、」
「…ね。誰？」
内に燃える暗い炎を押し殺したまま、優しく突き、優しく問い掛けた。
赤く色付いて薄く開いた震える唇を、親指でそっと、撫でた。目を合わせたまま。
自分のアイスブルーの目に釘付けられた深海色の目が、観念したように哀しみの色を帯びた。
「ごめんなさい。オスカー。ごめんなさい。」

白い手が伸び、ただ無意識のままに誘導されて身を屈めたオスカーの首筋に、リュミエールが顔を埋める。
「ごめんなさい。オスカー。貴方が、好き。ごめんなさい。好きです。ごめんなさい。」
力なく震えてオスカーの首に触れる、指。服越しの、背に添えられた掌。
呆然とするオスカーの脳裏に、唐突に出会いからこれまでの幾百ものリュミエールの表情が蘇った。
『私を、見ないでください。』
……目を合わせれば、きっと貴方には、悟られてしまうから。
『私に、触れないでください。』
貴方の手を密かに待ちわびる、この私に。
眉を顰め、冷淡に、自分を責めるようなあの視線は、でも違う、そうではなくて、哀しみの。
ゆっくりと身を翻し、自分の元から離れようとする、その唇が動いて、紡いだ言葉は、
『…ごめんなさい。』
「…ごめんなさい。貴方が、好きです、オスカー。ごめんなさい。」
ベッドに埋もれ、自分の身から滑り落ちた手で顔を覆い、泣きじゃくる眼の前のその人の現実に戻って、爆弾を落とされたような衝撃を受けた。
薬物を摂取したように身体が一気に火照り、繋がったままの局部が一層膨張したのが判った。リュミエールが涙に濡れた眼を見開いて息を呑む。

「リュミエール。馬鹿野郎。めちゃくちゃ、可愛い。反則だ。」
水色の頭を抱え込み躰を抱き締めて、繋がった腰を動かした。ぬる、と熱い中の自分のものが滑る。
愛したい。この人を。今すぐ。どこまでも果てなく。
「ひあ、あ、」
甘い悲鳴の溢れる唇を性急に唇で塞いで口内を深々と犯した。舌を吸い噛んで責める。
息苦しさに離れた唇を舐め、耳朶を噛み、乳首を指で摘んで責め苛み、抽送を続けながらリュミエールの前のものに手を伸ばした。濡れそぼった熱い塊を腰の動きに合わせて手の中で愛撫する。
「ふあ、あ、あ…！」
達きかけたところを強く握り締め、
「……リュミエール。」
限度を超えた快楽に朦朧とする瞳と、
「オスカ、ぁ……」
自分を呼ぶ声に満足して、手を離し、自分自身の欲望も思い切り解放してリュミエールの最奥に叩きつけた。
「ひぁん、ぁ、あぁ……！」
白い躰が跳ね、熱い雫が肌を濡らし、中が熱く蠢いて、オスカーの快楽をもどこまでも引き出そうとする。耐え切れず低く呻いた。
長く打ち震える解放の時間があって、余韻に何度か身を震わせた細い躰が、やがて力を失ってベ

ッドに埋もれる。
オスカーが躰の中から抜けてゆく感覚にもう一度震えると、瞼に覆われていた瞳がゆっくりと開いて、オスカーを見詰め、
「……ごめんなさい。」
再び、呟いた。

唐突な空間のねじれの感覚に、オスカーは咄嗟にリュミエールの躰を抱き締めた。
二人の間を引き裂こうとする見えない力に逆らい、その本質を見極めようとしながら、気を張って自分の望みを強く願う。

何処かからか落ちてきた気がしたが衝撃は全く無く、気が付けば、自分の邸の寝室のベッドの上で、腕の中には、水色の長い髪の、水の守護聖。

戒める腕をゆっくり緩めると、水の守護聖はそろそろと顔を上げ、その真っ赤な、泣きそうな顔で自分を見上げた。
ベッドの上で後退って身を引こうとする、その腕を捕らえて留める。
「待て」
泣き出しそうになる水の守護聖の、長い髪の一房を掬って口付けた。
「約束してくれ。逃げるな。」

泣きそうな表情のまま長い逡巡があって、やがてリュミエールは顔を伏せ、立てた両膝にその顔を埋め、両腕で縮籠(ちぢこも)った。
「…今、俺から離れたいと、そう、願ったな？」
「……」
返事が無いのが何よりもの明確な肯定形だった。
「…あの空間を望んだのも、お前か？」
「……」
震える躰はあからさまに怯えていて、可哀想になったオスカーが水色の頭を引き寄せ、優しく何度も撫でた。少しだけ警戒を解いて見上げる顔の、唇に触れるだけのキスをして、無言のままに促す。
「…意識したつもりは、なかったのです。でも、」
そうなのだろうと思います、と、言葉にならない言葉が続いた。
「……ごめんなさい。」
再度頬を伝う水の守護聖の涙を、舌で舐め取った。
「もう謝るな。俺も、」
悪かった。今までどれだけ恐ろしい思いをしたのだろう。俺の冷徹な目に、悟られ、蔑まれる可能性に。
「嬉しいよ。お前に愛されることは。思っていたよりも、ずっと嬉しい。」
この胸の中の、炎が熱く燃え上がるほどに。

ぼろぼろ泣く水の守護聖を腕の中に収め、オスカーも気を抜けば涙が零れそうだった。水色の柔らかい髪に目元を埋め、涙の欠片を残す。
しばらく思うままに泣かせ、やがて少し落ち着きを取り戻したリュミエールに、徒然にそれとなく問うた。
「……手紙の精霊が。迷い込んできて…。うっかり、宛名を読まずに、少し内容を開いてしまって……」
…なるほど、と得心した。
彼女らの、消えた手紙。
そういう部屋が、あるのだと。具体的に対象がだれこれ、というものでもなく、ただあるらしい、とそれだけの話の遣り取りで、きゃっきゃと無邪気に盛り上がるだけの話だったようだが。
とすると、空間の生成に女王候補達の力が無意識に作用していた可能性も否定できない。

オスカーはベッドサイドに手を伸ばし、見慣れた置き時計のガラス面をこちらに向けた。
時間の経過はほぼ体感通りで、まだ昼過ぎの早い時間帯だった。
自分たちと唐突に分かれた彼女らは狼狽し、今頃は聖地の中を訪ね歩いているだろうが、本格的な騒ぎになるにもあと1時間ぐらいの猶予はあるだろう。
「オスカー……？」
炎の守護聖の決意を感じ取ったリュミエールが、戸惑いながら無言で尋ねる。
どうしたのか、と。

どうするか、と言っても。
「決まってるだろ。部屋に閉じ籠って、セックスすんだよ。出してやらないからな。」
腕の中に囲い込み唇を寄せながら吹き込んだら、水の守護聖の頬が真っ赤に染まるのが見えた。

輪（リング）

1

いつさよならが来ても、泣かないように
あなたから強さをもらって、私は強くなった

それはあなたを信じていないからじゃない
永遠を信じていないだけ
時の流れを信じているだけ
そして好きになったものを好きと言える
嫌いになったものは嫌いになったと言える
あなたの強さを信じているだけ

いつその時が来ても
何も悔いることはない
その時が来ることをいつも考えていても

何も恥じることはない

だって私はあなたを愛しているから
あなたから愛されるその瞬間
私も全力であなたを愛しているから
過去も未来もなくただこの時
精一杯あなたを愛しているから

だから　どんな事も　恐くない

恐いのは

私がその強さを無くす　その事だけ

今を永遠に巡る輪を　私自身が壊す　その事だけ

何かの苦しみを押し隠しているような、何か重いものに圧し掛かられているような声で目が覚め

た。
自分の声ではない。
お互いに疲れ果てて引き落とされるように眠りにつくまでの濃密な時間、自分の名を熱く囁いていた狂おしいほど愛おしい優しい声が、苦しみに上げる声にならない声で目が覚めた。
「リュミエール？」
氷青色の目を開き、肘を突いて上半身を起こし、傍らに眠る愛しい人を見る。閉じられたカーテンから漏れ入る青い月の光と、シーツの微かな衣擦れの音が部屋の中に響いた。
先ほどまでの時間、自分の愛撫に敏感に反応していた、しなやかな身体。ベッドの上に散らばる、豊かな青銀色の流れ。
しかしオスカーに追い落とされるように先に眠りについた時の、この上もなく暖かな幸せに彩られた微笑は消え、今は押し殺すような苦悩が汗とともにその白い顔に浮かんでいた。
綺麗だった。
綺麗なだけに、その表情が表す悲哀感はオスカーの胸を締め付けるようだった。
「リュミエール」
たまらずに先ほどより大きな声で名前を呼ぶ。リュミエールはそれでも目覚めず、苦しげな表情を見せながら、緩慢に身悶えた。
まるで首を絞められて、呼吸が出来ないかのように。
「リュミエール！」
オスカーははっきりと、目を覚まさせる意図で呼びかけた。両手で愛しい人の頬を包む。

苦痛にゆがめられていた表情が、ゆっくりと解かれていく。
同時に、眠りの海から浮かび上がってくる気配。桜色の唇が一つ深い息をついた。
深海色の目が開かれて、ぼんやりと焦点の鈍った視線がオスカーを彷徨う。
「……オスカー？」
優しい声が自分の名を紡いだ。それだけで、オスカーは愛しさに胸が締め付けられるような、眩暈のような感覚を覚える。
リュミエールが白い手をオスカーの腕に縋らせて身を起こそうとする。オスカーはそれを助けるように、肌触りのいいしなやかな身体を抱きかかえた。
「酷くうなされてたぞ……どうかしたのか？」
囁く自分の声は甘かった、ように感じた。
リュミエールはその言葉に目を上げた。オスカーと視線が合う。
だが、オスカーへ向けられたリュミエールの視線は、焦点を結ばずにあいまいにオスカーの顔を包んだ。
「……オスカー？……」
自分が問い掛けられているのに、まるで逆にオスカーに問い掛けるかのような声が漂う。
白い手がゆっくりと上がって、オスカーの頬に添えられた。
まだ寝ぼけているのだろうか、とオスカーは思った。ぼんやりとした表情は曖昧で、そこから何かを読み取ることは出来ない。
頬に添えられた手に触れようと、オスカーが自分の手を持ち上げ、重ねようとした瞬間、急に重

力に逆らう力を失ったように、する、とリュミエールの手が抜け落ちた。
シーツの上に落ちる、ぱさり、という軽い音がした。
まるでその動作に導かれるかのように、リュミエールの視線がゆっくりとオスカーの首の辺りへずれ落ちた。
髪より少し濃い色の睫が、月光を受けて弾き、光った、と思った。
いや、――――光ったのは――――
オスカーはびくりと身を震わせて、酷く動揺した。
リュミエールの両目から流れ落ちる、光の粒を目にしたから。

表情は全く変わらない。
まだ眠りの淵に漂うかのような、ぼんやりとした無表情。
何も感情を感じさせないその瞳から、止め処もなく涙の粒が生まれ、青い月光を吸っては白い頬を次から次へと転がり落ちてゆく。
瞬きもせずに。

見ているオスカーが呆然とするほど、美しく、哀しい光景だった。

「……リュミエール!?」

一瞬の茫洋の時間が過ぎ、慌ててリュミエールの肩に手を添えた。きめ細かな肌の温度は冷えている。

触れられた瞬間、ぴくり、とリュミエールの肩が跳ねた。

そのまま、……オスカーの手から染み込む暖かさを実感するかのように、リュミエールの身体が細かく震え始めた。

深海色の目を伏せ、閉じる。閉じられた目から止まることを知らないかのように涙が溢れつづける。

小刻みに肩を震わせながら、嗚咽を押し殺して忍び泣く。震える肩の波動が掌を通してオスカーに伝わる。

何時の間にかリュミエールの唇は強く噛み締められ、普段より濃い朱の色を立ち昇らせていた。

オスカーの胸が、締め付けられるように痛んだ。

自分の心の軋みに耐えかねるかのように、オスカーはリュミエールを強く掻き抱いた。

細い腰がしなる。青銀色の髪が乱れて跳ね、オスカーの腕の上に流れを描いた。

胸に涙の感触が触れる。

「……どうした」
耳元で囁いた自分の声は、まるで哀しみが移ったかのように少し震えていた。
応えは、ない。ただ自分の腕の中で、先ほどよりも強く震える細い身体の感触を感じるだけだった。
声を押し殺して泣く。
オスカーにはそれが辛かった。いっそ声を上げて泣いてくれた方がどんなにか楽だろう。
「何かあったのか？」
リュミエールはオスカーの腕に抱きすくめられたまま、震えながら、その言葉に緩慢にかぶりを振った。青銀の色の波が揺れて、月光の下に淡く光る。
では何故、とそれ以上問うことは出来なかった。あまりに張り詰めた空気がそれを許さなかった。
オスカーは震えの止まらないリュミエールの身体を強く抱きしめながら、零れつづけるリュミエールの涙を自分の唇で拭うことしか出来なかった。

今だけ
その次も、今だけ
その次も、今だけで
永遠に今の繰り返しであればよい

今を巡りつづける輪の中で　今がある限り
幸せでいるだけでよい

「……」

半透明の海の中にたゆたうような『それ』のイメージとともに、窓から差し込む光を迎え目覚めたオリヴィエは、朝一番限定の金一色の髪を掻き揚げ、これまた朝一番限定の素の顔に手を当て、ベッドの上に起き上がったままの態勢でしばし考え込んだ。

【オリヴィエより通達】
（対象：オスカー及びオリヴィエ自身）
『輪』に注意すべし。

水の守護聖の立ち姿は凛然と美しい。
白と水色のローブを纏う背筋はいつもしなやかに、そして威圧的でない程度に張っている。
自らの司る優しさを湛えながらも、その内に潜む芯を感じさせるきりりとした美貌は、聖地の誰もが見惚れずにはいられない。

地の守護聖の執務室に書類を届けにきた彼を、ルヴァがまじまじと見つめてしまうほどには。
「ルヴァ様？」
自分の方から離れない視線に、リュミエールが小首を傾げて尋ねる。
「あー、いえいえ……最近ますます綺麗になりましたねぇ、と思ってたんですよー」
顔色も変えずにさらりとそう言ってのける地の守護聖も大した玉である。リュミエールは戸惑い、それからほんの微かにその顔に血色を浮かべた。
次の瞬間、ルヴァの後頭部に衝突する軽い拳の感触。
「なーに女の子口説くような台詞言ってんのよ」
扉の方からではなくテラスから進入したであろう無作法な人物は、相変わらずの派手な髪と衣装と宝石を身につけた夢の守護聖だった。
何するんですか～、と地の守護聖のやや情けない声があがる。
聖地のお茶好き3人組がこうやって昼下がりにたまたま揃うと、基本的にそのまま茶会への運びとなる。この日も例外に漏れることはなかった。
「あー、ちょうど良かったですねー、今年も桂花が咲いたのでまたお茶を作ったんですよー」
「あ、もうそんな時期？　気がつかなかったわ」
年中春に設定されていた聖地の気候は、お転婆な金の髪の女王候補が新女王となり即位した後、相も変わらずな彼女の趣味でずいぶんと四季の流れを感じさせる気候に変わっていたが、昔も今も、冬の花も春の花も、どういう仕組みか花は周期性を持って毎年定まった時期に咲くのである。
ひどく手間が掛かるせいでわずかの量しか作れない地の守護聖お手製の桂花茶は、水の守護聖に

とっても夢の守護聖にとっても例年の大いなる楽しみのひとつだった。
微妙な味わいや香りを楽しむ余裕のまだまだない年少組とも、普段から茶葉とは異なる強い香りと味を好む2人とも、共有することのできない貴重なティータイムだ。
恐縮する主を押し留めて水の守護聖が準備したポットから、快い芳香が上がる。
「女王陛下が譲位しても、守護聖が交代しても、花は変わらず咲く、かぁ」
桂花茶の注がれたカップを口に運びながら、感動とも感慨ともつかない声でオリヴィエはそう呟いた。
「自然の流れは巡るばっかりで、時間の流れに押し流されるのはアタシたちだけ、ってことかしら」
そう言ってやや機嫌の悪くなった顔で頬に手を当てる夢の守護聖が、そういえば最近肌年齢を気にしだしているということを思い出して、リュミエールは少しだけ小さな声で笑ってしまった。
「あー、そういえばこの間、時間の流れといいますか、そういう事に関する本を読んだんですよー」
話し出してしまえば止まらないのがルヴァの悪い癖とわかっていても、彼がそうやって話を切り出せば、オリヴィエもリュミエールも、ついついそちらのほうを向いて話を聞く態勢になってしまう。
「なんでもですねー、文明が十分に発達する以前の段階では、時間は巡るものであって、流れる、という概念はないんだそうですよー」
「へぇ？」
夢の守護聖が合いの手を入れる。
「要するに、食べていくだけが精一杯の文明だと、春が来て種まきをして、秋が来れば収穫して、

という季節の流れを繰り返すだけなんですねー。確かにそれでは、時が流れると考えるより繰り返すと考える方が自然な気がしますねぇ。」
「けど、種まきしたり収穫したりする人間の方は年を取っていく訳でしょ？」
「ああ、それもですね、個の人間として見れば時の流れ、ということになるのかもしれませんがー、全体として見てみれば、ある個体が生を受け、次の個体を残した後に枯れていく、ということの繰り返しの一環に過ぎないわけで……まあいわば、人間も作物も同じような繰り返しを永遠に続けるという点で、大した違いはない、という考えなんだそうですよー。」
ふと、夢の守護聖は軽く目を見開いた。
それから、２・３度まばたきを繰り返して、
「――――ああ」
得心がいったように、誰に語るともなしに呟いた。
「――――時の輪、かぁ」
視界の片隅で、水の守護聖の肩がわずかに跳ねたのをオリヴィエは見逃さなかった。
「そうそう、そんな感じです。時の輪、うん、なかなか良い喩えですねぇ」

自分の言いたいことが伝わった嬉しさに、ルヴァは満面の笑みで微笑んだ。
「――幸せなのかしら」
「はぁ？」
夢の守護聖の唐突な問いかけに、ルヴァのやや間の抜けた返事が返る。
「時の輪の中にいる人間って、幸せなのかしら」
ああ、そういうことですか、とルヴァは納得し、それから、うーん、と考え込んだ。
「――――幸せだと、思いますよ。変わることのない日常、というのは――」
そう聞こえたのは水の守護聖の声音だった。夢の守護聖の視線は意味ありげにそちらへ流れた。
穏やかさを好む水の守護聖の発言としての、正直な、及第点の回答、と取ることも出来る。が――。
オリヴィエは自分の考えが間違っていないことをそこで確信した。
地の守護聖はやや俯いて考え込んだまま、うーん、ともう一度呟く。
「うーん、たしかに変わらない日常、というのは幸せかもしれませんが……時の輪、というのは、生きるだけで精一杯の生活を受け入れるための、緊急避難的な考え方なんではないんでしょうかねぇ……」
生きるだけで精一杯の生活を受け入れるための
「やはりですね、もっと文明が発達して、さまざまな娯楽や余暇を楽しむゆとりが出来、精神文化

が栄えて、初めて人間は本当の幸せ、と言えるものを手にすることが出来るのではないのでしょうかねぇ……」
まあ知恵とか知識とかいうものが、繰り返しという性質のものとは程遠いですから、そう思うのかもしれませんけれどねー、と言って地の守護聖は笑った。
オリヴィエはもう一度、水の守護聖のほうを見た。
リュミエールは――――

水の守護聖は、凛然と美しい。
その姿のままに、微笑んでいた。

「遅い」
自分の執務室に帰るなり飛んできた言葉を、夢の守護聖は首を傾け手で払って避ける仕草をとった。
「イキナリそんな不機嫌な顔さらして、最高級茶葉の茶会の余韻を台無しにしないでよね」
その不機嫌な、しかし端正な顔と紅い髪の持ち主に、オリヴィエは顔をしかめ手をひらひら振ってそう抗議する。
「誰のせいだと思ってるんだ」
言葉の刺がさらに2・3本増えたようだ。

「何のコト？」
「このメモは何だと聞いてるんだ」
炎の守護聖が突き出したそれは、オリヴィエが今朝方オスカーの所へ回した走り書きのメモである。
「なんだこの、『輪』に注意すべし。」とかいう訳のわからん台詞は。輪ってなんだ。だいたい何にどうやって注意すればいいんだ、そこらへんの輪っか状のもの全てに訳もわからず気を払えってことか」
本当はメモを回されてすぐ聞きに来たかったのだが、執務に手間取って今の時間になったんだ、とオスカーが苦々しげに呟いた。
「仕方ないじゃない、今朝の時点ではホントにそれしかわかんなかったんだから」
オスカーは眉根を寄せたまま、すっと氷色の目を細めた。今朝オリヴィエにあった出来事、そして今朝から今までの間に新たに判明したこと、その2点を問う目付きである。
どうしてそう短気かしらね、と心の中で呟きながら、オリヴィエは話し出した。

半透明の水の中にたゆたう『輪』のイメージ

「……なんだそりゃ」
「聞かれたって困るわよ。あくまでもイメージなんだから」
朝、夢の守護聖の起き掛けの意識に入ってきたそれは、しかし彼自身の夢ではないのだという。

夢を司る守護聖としての彼の中に流れてきた、他の誰かの夢だ、という事はオリヴィエにもはっきりとわかった。
それはオスカーではない。しかしイメージに重なる印象はオスカーを対象としていた。
「そのときはそれしかわかんなかったから、とりあえずそれだけアンタに伝えておいたんだけど」
それから。
そう、それから。
先ほどの3人での茶会の時に。
オリヴィエは気づかざるを、確信せざるを得なかったのだ。

『輪』の夢を見た、他ならぬ当事者がリュミエールであること。
『輪』は「時の輪」を指すこと。

「時の輪ぁ？」
聞きなれない単語の意味を掴みかねている炎の守護聖。
オリヴィエは先ほどルヴァから語られた「時の輪」の話をしてやった。
「……それが俺とリュミエールとこの話に、どう関係するんだ」
「アタシの方が聞きたいわよ」
どうやらこの様子では、全く心当たりのなさそうなオスカーから事の真相を突き止めるのは難しそうである。

「……それにしても」
と、呟いたのはオリヴィエ。
無言のまま視線だけで、オスカーが何かと問い返す。
「ずいぶん普通に、リュミちゃんのこと話すのね」
その言葉に、滅多に見られない炎の守護聖の動揺を、オリヴィエはわずかに垣間見た気がした。
「まあな」
すぐに自分を取り戻したらしいオスカーが、にっ、と唇の端を吊り上げて笑う。
にじむ嬉しさは包み隠しきれない。
「単刀直入に聞くけど、どうなってんのよ、リュミちゃんとのこと?」
「ご想像にお任せするぜ」
「――――あ、そう」
この分では、行き着くところまですでに行き着いているのだろう。
当てられた形になったことに気がついて、オリヴィエは少しだけ気が抜けた。
オスカーのリュミエールとの仲は、公表したわけでもないがことさら隠しているわけでもないせいで、改まって聞くものは誰もいないものの、周囲はおおよそ察している。
特に咎め立てすることでもない。同性の恋愛を認めるのは十分に成熟した文明では当然のことであるし、2人の仲が公務に差し障ったわけでもなく、ましてや当代の金の髪の女王は、即位してすぐに「守護聖退任後の聖地出入り自由」を宣言した前代未聞の女王陛下である。2人の恋仲を喜びこそはすれ、咎めるなどとはとても考えられない。

何も障害のない、祝福されうる2人。そのはずだった。
「だからこんなものは、ただの妙な夢、でいいんだよ」
オスカーはそう言うと、例のオリヴィエメモの紙を片手でくしゃっと丸めてごみ箱に投げ入れた。
オリヴィエがその様子にむっとして、思わず手を出す。
ごん。
後頭部に受けた拳の衝撃に、オスカーが思い切り機嫌の悪くなった顔つきで振り向く。
「お前なぁ――！」
「このバカ！　アタシが単なる夢でわざわざ警告すると思うの？」
揶揄りながらもその下の真剣な表情に、オスカーは言葉を遮られた。
「……詳細もわかんないのに、こんな事言うのはどうかと思うけどさアタシも。でも、……ホントに気を付けなさいよ」
眉を潜めて、辛い何かを耐えるようにオリヴィエが言葉を続ける。
「イメージがさ。本気で、本当に、痛かった、んだよ」
嗚咽を殺して身体を震わせ、閉じられた両目から青い雫を止め処なく溢れさせる細い身体が、オスカーの視界に重なった。

「……何か、他にわかることはないのか」
オリヴィエから視線を逸らして、炎の守護聖が呟いた。
「……そうねぇ……」
今朝見たものを、頭の中に描き直す。
「……輪が漂ってた水のイメージ、リュミちゃんのイメージだと思ったけど、もしかしたら」
そこで一息ついた。
「涙、かもしんない」
今度の炎の守護聖の動揺は、誰の目にもはっきり見て取れるものだった。
しばしの沈黙が夢の守護聖の執務室の中を漂う。
「……お前さ」
先に切り出したのはオスカーだった。
「あいつが泣いてるところ、見たことがあるか？」
「んにゃ、無い」
そう。リュミエールは泣かないのだ。どんな時も。一見たおやかで、渡る風にも涙しそうな風情の水の守護聖が。
守護聖という立場にある限り、その目の前で進んでいく宇宙の営みは心温まるものばかりでは決してない。たいていの守護聖が一度は涙するそれに遭遇した何度かの折にも、リュミエールはかの凛然とした姿のまま、目を逸らさず、唇を強く噛み締めて、しかし涙を流すことは決してしなかっ

た。
多分この場にいない他の守護聖たちの中にも、水の守護聖の泣く所を見たことがある人間はいないはずである。
「アンタはどーなのよ？」
それこそが、この男の言いたいことなのだろう。
「……あいつが泣いてる所なんて、見たこと、無かった。」
語尾の過去形は、夢の守護聖の予想した通りのものだった。

……そう
どんな時にも、あいつは泣かなかった。
初めて抱いた時にも……

……もう
もう、ずっと長いこと恋焦がれてきた。
どうしようもなく自分に欠けたものを全て補ってくれる、俺だけの半身。
どれ一つとして自分と一致するものがないからこそ、気になって、反発して、……狂おしいほどに魅かれた。

いや、あの時の自分はすでに狂っていた。
満たされない渇望を忘れるために、毎晩女に溺れた。
抱きながら思った。この体があのしなやかな躯なら。この指があの細くて長い指なら。この髪があの青銀色の髪なら。この瞳があの深海色の瞳なら。
この飢えは、どれほどに満たされるかと。この渇きは、どれほどに癒されるかと。
その行為ですら飢えと渇きをただ増すだけに堕ちた時、オスカーの本能は完全に理性を置き去りにした。

2

新月の夜だった。
月の縁が微かに光り、細い輪を描いて夕日と共に堕ちていったその晩、深夜と呼べる時間になってから唐突に水の守護聖の私邸のテラスに現れた執務服のままのその姿に、リュミエールは驚きながらも扉を開け放ったのだ。
「オスカー？　こんな時間にどうかなさったのですか？」
扉を開いたその細い両手首を、オスカーは強引に掴みあげた。
「オスカー？」
戸惑いを含んだ声が響く。

氷青色の瞳の中に、白い炎が上がった。

「……お前は」
抑揚を欠いた、低い、激情を押し殺した声がオスカーの体全体から響いた。
「どうして平気なんだ」
掴んだままの両手を、思いきりねじ上げる。

痛みはあっただろうが、リュミエールの瞳はそれを上回る驚愕に竦んでいた。
手首が熱い。掴まれた痛みからではなく、掴んだオスカーの手が、全身が、燃えるような熱を孕んでいたからである。
「俺はこんなにもお前の存在を求めてやまないのに」
リュミエールは、オスカーの背後に上がる白い炎を見た気がした。
「お前はどうして平気でいられるんだ」
リュミエールの寝着に包まれた細い腰が、急激にしなる。
「……ッスカー！」
アルコールの匂いの染み着いた、オスカーの両腕に締め上げられて。
「酔って……いらっしゃるのですかっ……？」
急激に呼吸を制限された苦しさに息をつきながら、辛うじてリュミエールがそれだけを尋ねる。
視界に遮られて見えないオスカーの顔が、ふ、と笑った気配がした。
「……酔ってるさ」
自分が壊れることなど、どうでもいい。
狂おしいほど愛おしくて、哀しいほど大事に護ってきたはずの人を壊すのは、泥酔するだけの酒の力を借りないと無理だった。
次の瞬間、抑え続けていた凶暴なものが、弾け飛んだような感触。
リュミエールの背が強く反らされて、視界がオスカーの髪の緋色一色に染まった。

深く、深く口付けられた唇。
無作法に、強引に侵入する舌がリュミエールの舌に絡みつく。
リュミエールの全身の血が沸騰するように熱くなって、足元から一気に逆流した。
「……っ……！」
自分の腕の中で跳ねる身体にオスカーは煽られる。
濡れる唇を滑らせて、乱暴に、これ以上はないほどに深く重ね合わせる。
全身を探られるような舌使いに、リュミエールの視界が明滅した。
「……っん……」
身を捩って辛うじてついた息はすぐに再び塞がれる。首筋のあたりをオスカーの手が探る。
リュミエールの脳髄が燃やされるように熱く急き立てられた。
指先が、全身が痺れて動かせない。膝ががくがくと震える。
くずおれそうになるリュミエールの身体を掻き抱きながら、オスカーの舌はリュミエールの舌を、口内を犯し続けた。
身体が熱くなって、言うことを聞かない。意識が白光とともに遠ざかる。
深い口付けに思考を奪われたリュミエールの姿は、オスカーの本能を煽り立てた。
リュミエールの手の下に腕を回し、片手で抱え上げるようにして引きずるように隣の寝室へ連れて入る。
ベッドの上にリュミエールの身体を投げ遣ったのと、その上にオスカーの熱い躯がのしかかるのとはほぼ同時だった。

リュミエールの唇が何かを言うよりも早く、再びオスカーの濡れた唇に塞がれる。
駆り立てるように唇を貪る。リュミエールの熱を孕んだ全身が、さらに煽られて一層の熱を帯びた。
押さえ付けられたリュミエールの手が、狼狽の形に動く。
唇の間に、距離が生まれた。
ようやく息をすることを許された口付けは、しかしそのままリュミエールの首筋に滑る。
「……っ……！」
全身を貫く、快感とも悪寒ともわからない感覚。悲鳴を飲み込むような声がリュミエールの口から挙がった。
反射的に握り締められた手がオスカーの流れた指先に当たり、爪の形を印し付ける。爪を立てられたオスカーの指が、リュミエールの指と絡むように移動した。どちらからともわからずに強く握り締められる。
首筋に口付けたまま緩く開かれたオスカーの唇から、舌が伸びてリュミエールの首筋をなぞる。
とたんにリュミエールのしなやかな身体が跳ねた。
「……っやぁ……！」
何故自分の口からこんな声が出るのか。何故自分の身体が自分の身体とは思えないほどに熱く熱せられているのか。今自分が感じているものが何なのか。
リュミエールの身体だけがオスカーの与えるものを知っているかのように、淫らに動き、ベッドの上でシーツを乱す。

全くの未知の感覚、初めて感じるであろう強烈な官能に、何が起こっているかも理解できず身も世もなく狼狽して乱れるリュミエールの姿は、理性を放棄したオスカーにとって媚態以外の何物にも見えない。
音を立てて引き裂かれた。いつもと変わらずに水の守護聖の穏やかな眠りを守るはずだった薄い夜着が、オスカーの節くれ立った手によって。
夜目を欺く白い肌が、月も照らさぬ闇に晒される。
狂うほどに恋焦がれつづけた滑らかな白い肌が目の前にある。
ようやくこの手に入れられるのだ。
最初で、最後。ただ一度きり。
オスカーの最後の抑制は弾け飛んだ。
後はただ、残酷な本能のままに暴走するだけだった。
噛み付くように滑らかな白い肌に口付け、強く吸い上げた。痛みにか、リュミエールが小さく鋭い声を上げる。
オスカーの両手と唇がリュミエールの身体を探り、苛烈な愛撫を加え続ける。
「やっ……」
オスカーから与えられる、躯中を走るどうしようもない感覚に、悲鳴のようなリュミエールの高い声が上がった。
自由になったリュミエールの手は行き場を無くしたようにしばらく宙を泳いだ後、胸の上に覆い被さるオスカーの緋色の髪を強く掴んだ。

オスカーの手が白い身体を伝って、リュミエールの胸から腰へ、そしてさらにその先の、常識として絶対に触れないことになっている辺りへ伸びる。
リュミエールの狼狽が急に強くなった。
「……っだ！　やっ…オスカー！……んぁっ……いやっ……！」
リュミエールが抵抗し、揉み合うようにベッドの上でしばらく暴れた後、リュミエールはいつのまにか全ての着衣を剝ぎ取られ、全てを晒した状態でオスカーの前に横たわっている自分に気がついた。
その間も、それでも、リュミエールの躯の奥までも探るようなオスカーの愛撫は一時も止む事がない。与えられ続ける強烈な羞恥と、体中を電撃のように走る未知の感覚に、リュミエールの声が高く強くなる。
「オスカー！　駄目っ……っや！　や……んやぁ！」
オスカーの髪を掴む白い手の力が強くなる。首が強く反らされて、背が大きくしなる。身体が跳ねる。
オスカーの愛撫は、苛烈さを増してゆく。リュミエールの理性はオスカーに与えられた熱で細片にまで砕かれ、白光の彼方に消え去ろうとしていた。
いつのまにかリュミエールの片足は、着衣を半ば脱いだオスカーの肩に乗せられ、高く掲げられていた。
オスカーが身を乗り出して、唐突に深く唇を重ねる。熱い舌が進入してリュミエールのそれと長く絡んだ。

「んは……」
苛烈な愛撫に上がった呼吸を急に塞がれた反動で、唇が離れた瞬間、リュミエールは大きく息をついた。一瞬、躯から力が抜ける。
白熱する意識の片隅で、自分の身体でないものが触れる感触。オスカーが身を勢いよく乗り出した。
瞬間、リュミエールの全身を、激痛と快楽が貫いた。
「いやあああああああ！」
反射的に引こうとした腰をオスカーの大きな手が強引に押さえ付ける。オスカーの褐色の背に、リュミエールの両手の爪が強く立てられた。
躯の中に進入してくる強烈な存在感。身体中が、頭まで串刺しにされたような感覚。
痛みに締め付けるその部分を、オスカーは何度も何度も腰を打ち付けるようにして最後まで深く刺し貫いた。
最奥まで到達したそれは、しかしそれでもリュミエールの中で、上に横に、緩やかに動いて、その動きを止めない。
「あうっ……あふ……ぁん……や、だ……あ……」
深海色の目が焦点を失って潤む。リュミエールの片手が胸の上にあるオスカーの頭に移り、紅い髪の中を力なく彷徨った。その間も止まらないオスカーの動きに合わせて、密やかな声が上がり続ける。
「オスカー…ぁ……あ、だ……や……ぁは……」

急にオスカーの動きが激しくなった。
「オスッ……やぁっ！　や……あぁん！……っ……っ！　やっ！」
急激なリズムで身体の奥を叩きつけられる。オスカーの存在がリュミエールの身体の中に刻み込まれていく。
深く刺し貫かれ、身体の中身が抜かれるかと思うほどに引き、再び深く沈む。テンポが次第に上がってゆき、それと共にリュミエールの声が高く、大きくなってゆく。
「……っ、オスカっ、……っ、やっ、あっ、やあああああああ！」
リュミエールの白い喉が仰け反った。オスカーの背に爪が強く立てられる。
視界を奪う白光に包まれた遥かな高みに上り詰めさせられて、リュミエールの唇から、この上もなく強烈で華麗な快楽の嬌声が上がった。

オスカーの褐色の背から滑り落ちて、ベッドの上に力なく投げ出されたままの白い腕。
呆然として焦点を結ばない深海色の瞳。
滑らかな肌に付けられたいくつもの紅い印。
聖痕（エニグマ）だ。

壊した。
狂おしいほど愛しい、綺麗で大切な人を。

自分の手で。

呆然として、目を見開いたまま動かない姿を見て、そう思った。

もっと、壊したい。

自分の手で。

そう、思った。

手を伸ばして、滑らかな肌の上に指を滑らせた。

快楽に慣らされた躯が、揺れる。

オスカーの中で、凶暴な衝動が再び頭をもたげる。

ゆっくりとリュミエールに覆い被さり、唇を深く重ねる。

欲望に濡れた舌をリュミエールの中へねじ込んだ。

前から、後ろから、オスカーは一晩中リュミエールを陵辱し続けた。

何度も嬌声を上げさせ、何度も達かせ、もう止めてと何度も懇願させた。

どんな懇願もオスカーの暴走した欲望を煽るだけだった。

その度に唇を塞ぎ、苛烈な愛撫を与えて喘ぎ声を、嬌声を上げさせた。リュミエールの声が掠れても枯れても止めなかった。
繰り返される痛みと、それを上回る快楽にリュミエールが意識を手放しても、オスカーはリュミエールを抱き続けた。

……夢を見た。
穏やかな、日常。
その中にいた時は、穏やかなどと思わなかった、昨日までの日常。
顔を合わせれば皮肉ばかりが口から出た。
かの愛しい人はそんな自分を、よく困惑の表情で見つめ返したり、時には辛辣な返答を寄越したりしたけれど。
ああ。
なんて愛おしい、穏やかな日常だったことだろうか。
変わらぬ日々の、繰り返し。
永遠に繰り返されるはずだった時の輪は、自分の手で、壊した。
二度と取り返しのつかぬほどに。

目尻から、涙が零れた。
堕ちて粉々に砕け散るはずの雫は、優しい手が拭った。

「……オスカー」
覚めたときにはすでに開いていた視界に入った光景は最初、オスカーの意識に容易くは受け入れられなかった。
あるはずのない光景。この手から失ったはずの存在。
「オスカー」
それが現実のものであることをようやく認識できたのは、目尻から零れつづける涙を4回拭われ、かさかさになるまで掠れた、しかしそれでも優しく穏やかな声で、2度目に名前を呼ばれた後だった。
「……リュミエール」
手をついて斜めに身体を起こしていた、青銀色の髪の人は、名を呼ばれて微笑んだ。
オスカーは横たわったまま、優しく見下ろしてくる深海色の瞳を見つめた。頬に触れる愛しい人の手の感触。自分の震える手を、確かめるようにそっと重ねた。
「……どうして」
目の前の状況が理解できずに、ただ、それだけを呟いた。

オスカーの言葉を聞いたリュミエールが。
リュミエールの微笑が、わずかに霞んだ。

瞬間。
オスカーの渇望が弾け飛んだ。
否定される恐怖に全身が慄いた。拒否の言葉を聞きたくなくて、リュミエールの言葉を塞ごうとした。
ベッドから跳ね起きて、細い身体を強く掻き抱いた。
「嫌だ!!」
強さを司る炎の守護聖が、悲鳴のように叫ぶ。
「嫌だ！嫌だ！」
まるで子供のように強く首を振って、白い首筋に顔を埋める。
「お願いだ……何処にも行かないで、離れないで……嫌いにならないで……」
泣きながら唇を滑らせて、リュミエールの唇に触れる。身体ごと唇を震わせながら、そっと塞ぐ。
リュミエールは目を閉じて、成すがままにされていた。
「……愛しているんだ……」
わずかに離れ、唇を触れさせたまま囁く。
「愛してる」

一度離して、強く、抱きしめた。
「愛している」
……腕の中で、微かに、頷く気配を感じた。
「愛してるんだリュミエール。離したくない」
再び、頷く気配。
「……嫌いにならないで」
その言葉に、確かに、腕の中の人は頷いた。
「何処にも行かないで」
頷く。
「離れないで」
再び頷く。
「……俺を、愛して……」
……少しの、間があって。
背に回された腕が、オスカーの服を強く掴んで。
リュミエールは、小さく、だが確かに頷いた。

オスカーはその時、朝日の昇り始めた彼誰(かわたれ)の淡い光の中で、初めて人の胸で大声を上げて泣いたのだった。

ぼろぼろになるまでオスカーに犯され、痛めつけられたリュミエールの身体が回復して、次にリュミエールを抱いたとき、オスカーは最初から全部やり直した。
何度も愛してると囁いた。愛してるから、お前の何もかもが欲しいと。
リュミエールが頷くのを見届けてから、オスカーは触れるキスから始めた。
顔のラインを、指で、唇で、何度も辿った。唇を何度も掠め取った。
口付けは徐々に深くなり、愛撫はだんだんと熱を増していった。
やがてオスカーの自制心も薄れ、苛烈な愛情で翻弄して予告どおりにリュミエールの何もかもを奪った時、リュミエールは高みへ上った快楽に意識を失う間際で、この上もなく暖かい表情でオスカーに微笑みかけた。
オスカーは、この時に、確かにリュミエールから愛されている自分を知ったのだ。

……けれど。
それを、聞くのは、怖い。
尋ねれば、否定の言葉が返ってきそうで。
あれ以来、何度も夜を重ねた。何度も愛してると告げた。
しかし、リュミエールの口からその言葉を聞いたことはない。
聞くのは、怖い。

愛していると言われなくても構わない。
傍にいてくれるのなら。
だから、追求しない。

……だが……

何度も、夜を重ねて。
何度も夜を重ねてから、初めて見た、リュミエールの涙。

……何故、泣いた……？

初めてリュミエールの涙を見たあの、いちばん最近の夜を思い出しながら、オスカーは月が再び輪を描いた晩、涙を見たあの夜以来の逢瀬の通い路を再び歩いていた。

言葉にして言われはしなくとも、愛されている、と、思う。

「オスカー」

そうでなければ、こんな綺麗な優しい……心から嬉しそうな表情で出迎えられる事はないはずだ。

聖地に来る前には軍人としての訓練を受けていたオスカーである。他人の表情が真実のものかそうでないかくらいは見分けられると思っている。

「待たせたな」

そう言うと、返事するひまも与えず抱き寄せて口付けた。触れ合う柔らかい唇の感触が心地よい。

唇を塞がれながらリュミエールの手が背に回されて、オスカーの身体のラインをなぞった後、不意に強く服を掴んだ。

リュミエールの中から自然に湧き出る強い愛情の証だ、と思う。

長くて穏やかな口付けを終えると、リュミエールは自分の見せた激情を恥じるように、その顔に薄く血色を昇らせてオスカーから目を逸らした。

何度逢っても、可愛くて、素敵で、綺麗だ。

身体も、心も。

抱きあったままそう考えていたら、唐突に、するり、と腕の中からリュミエールが身を翻してす

3

り抜けていった。
瞬間、真っ黒い閃光のような悪寒がオスカーを襲った。
イカナイデ
手を伸ばして、リュミエールの手首を思いきり掴んだ。
驚いたようにリュミエールが振り返る。肩から流れる薄いショールが風になびいた。
「オスカー？」
問い掛けるリュミエールの表情はいつもと同じ暖かさだ。
オスカーを襲った暗雲が一瞬のうちに気配すらも残さず消え去る。
「あ……いや」
今のは……何だったのか。
手首を掴んだ腕の力が抜ける。ふわり、と重さを感じさせない動きでリュミエールの手が離れていった。
リュミエールを見つめたまま動かないオスカーに、リュミエールが柔らかく微笑みかけた。
「何かお飲みになるかと思いまして……いつものものでよいでしょうか？」
「え？……ああ、そうだな……いや」
肯定の返事を聞いて再び歩きかけていたリュミエールが振り返る。

「お前の淹れた茶が飲みたい」
リュミエールは最初に目を見開いて、それから嬉しそうに微笑んだ。
「珍しいですね、あなたからお茶を飲むなんて」
「悪いか」
「いえ、嬉しいです」
オスカー以外の人間には見せない、素直な想いを包み隠さない子供のような微笑。
先ほどの暗雲が全くの杞憂だったと思えるような。
「今日、ルヴァ様のところで桂花茶を頂いたのですよ」
「ああ、オリヴィエから聞いた」
「あなたにも飲んでほしかったのですけど、茶葉が僅かしかないもので……それにあなたはあまりお茶を好まないかと思いましたから……でも」
「でも？」
リュミエールはその言葉に、ふと、茶の準備をする手を止め、オスカーのほうへ振り返った。
我に返ったような表情で。
「……いえ」
ゆっくりと、ポットの方へ向き直る。
先ほど消えたばかりの暗雲が再び沸き起こる、嫌な感触をオスカーは感じた。
「来年は一緒に飲みたいな」
不安を消すようにオスカーは言葉を綴った。

少し、間があって。
「そうですね」
振り返らずに、いつもと同じ暖かい声で答えるリュミエールの、表情はオスカーの位置から見えなかった。

……貴方は
いままで、何人のひとに、そう言ってきたのでしょうか……

……いえ
貴方の事を、貴方の想いを信じなければ
……信じたい……

……いいえ
来年も、どんなに時が巡っても
きっとあの桂花茶を一緒に飲む事はないのでしょう……
……今、この時の、同じ時の、永遠の繰り返し……

……ああ、まただ。
私の思考は、いつも輪を描く……

色恋沙汰に関する知識も経験も皆無だったリュミエールに、オスカーはその1つ1つを自分の手と身体で教え込んできた。
手段を知った愛情は、身体を交わす相手にその想いを強く伝えてくる。
愛されている、と、思う。
今まで数え切れないほど付き合ってきた女性たちがいつも快楽の嬌声を上げていた、オスカーの技巧を凝らした愛撫をリュミエールに与えると、却ってリュミエールの身体が冷たくなっていく事を夜の時間の中で知った。
「貴方を置き去りにする快楽なんか要らない」
かつて疑問に感じたオスカーがリュミエールに尋ねた時の、返事がそれであった。
オスカーがリュミエールへの愛情に我を忘れるほどのめり込めばのめり込むほど、リュミエールもそれに答えるように、オスカーへ、体で、声でその激情を示してくれる。
今日もそのままに、リュミエールの望むままに強く愛した。
そしてそれに応えるように、オスカーに劣らぬ情熱を返してくれたリュミエール。
愛されている、と、何よりも実感する瞬間だ。
愛されているはず。

しなる躯。熱い囁き。強く力の込められた指先。
この反応に、愛が無い訳がない。
オスカーの強引な行動、無理矢理な愛情から始まった事とはいえ、嫌われてはいないはず。
そのはずなのに。

ぽたり、と、シーツが音を立てた。

……お前は、それほどまでに……何に蝕まれているのか？
躯を交し合って共に眠りに落ちた後、その深夜。
気配に意識が覚醒しても眠った振りを続ける俺の横で、俺のほうを覗き込んで。
……声も立てずに涙を流し続けるほど。

恐い。
リュミエールへ目を向けることもできない。
起きてしまえば、それをリュミエールに知られてしまえば、この日常が壊れてしまいそうで。

夢現にまどろんでいるような振りをして手を伸ばし、冷えた躯を引き寄せて、腕の中へ強く抱き込む。
目を開けられないままに。

腕の中の存在が、じわじわと消えていく感触。

恐れている。

焦がれ続けてようやく手に入った愛しい人が、腕の中から消えてしまうのを、オスカーは確かに恐れていた。

２度の涙の訳を問い質す事ができなかったのもそのせいだった。

……だが、さすがに。

オスカーも、３度目には見過ごすことができなくなっていた。

逢瀬に水の館を訪れた夜、同じように真夜中、目を覚ますと、愛しい存在はベッドの中から消えていた。

足音を立てないよう、館中を歩いて探し回ったら、リュミエールの姿は静寂に冷え切った窓辺に佇んでいて。

やはり、泣いていた。

少しずつ、少しずつ遠くで泣くようになっていく人。

「……リュミエール」

驚かせないように、小さな小さな声で呼びかけた。

強さを司る炎の守護聖の口から発したものとはとても思えないような。

いや。

少しでも、この緊張感を揺さぶれば、音を立てて崩れていきそうな気がして……

リュミエールはその小さな声にも驚いて、オスカーのほうへ振り返った。

頬に光る筋。

だが、その視線はすぐにオスカーから逸らされた。

「リュミエール」

近づいて、そっと肩に手を置いた。

普段の凛然とした姿からは考えられないほど小さく見える肩が、跳ねて、震えた。

怯えている。

痛い。

オスカーの身体が胸が心が、痛みに悲鳴をあげる。

「リュミエール」
よく見たかった愛しい人の表情は、白い手の中に埋められた。
オスカーに見られないよう。
オスカーの眉根が、哀しみの形に歪んだ。
背後からリュミエールを包むように、そっと抱きしめた。
「……何故、泣く」
独り言のように、ぽつりと呟く。
聞かずにはいられなかった。
「……ごめんなさい」
いつもオスカーを安心させる声が、今は涙混じりになって、オスカーの痛みを大きくすることにしかならない。
「謝るな」
「……ごめんなさい」
優しい顔は、白い手に覆われてオスカーから見えないまま。
腕の中の存在が、じわじわと遠のいていく感触。
肌が総毛立つ。

突然の破滅（カタストロフ）より、ゆっくりと壊れていく日常のほうが遥かに恐怖感を煽られる事を、オスカーはこれほど強く思い知らされた事はなかった。

行かないでくれ。
離れないでくれ。

何よりも大切な人を、繋ぎ止めるための方法。
どうすればいい？

オスカーはいつしか、そんなことを常に考え続けるようになっていた。

水の中にたゆたうリング。
――あ、あの夢だ、とオリヴィエは思った。
そのリングが、目の前で、唐突に、弾けるように粉々に砕け散った。
水の中で水飛沫を作り、水を泡立てる。

「――――――ああ」
気がついたら、清清しい朝の光の差し込むベッドの上に起き上がっていた。

身体が、軽い。
正確には、身体が軽いと心が感じていた。

そういうことか。

【オリヴィエより通達】
（対象：夢の守護聖の館の使用人）
全宇宙より布地集められたし。
条件は以下の通り。
……

急に明日、視察に出る事になった。
だから、知らせに行こうと思ったのだ。水色の愛しい人に。

視察といっても主星の王立研究院に行って少し調査をするだけのもので、聖地時間では1日にもならない仕事だった。
それでも、異なる時間の流れを過ごすその間の時間を、あのひとを自分の手に繋ぎとめておきたかった。
理由もわからずどんどん細くなっていくような感触の、あの人との絆を少しでも強くしておきたくて。
だから探しに行ったのだ。あのひとを。

「リュミちゃん、あなた、ホントの気持ちをオスカーに言ったことあるの？」

唐突にそんな台詞が聞こえた。

その方向から聞こえた声の主の姿は見えず、植え込みの陰から遠目に透き見ることができたのは、胸が締め付けられそうなほどに愛しい人の姿で。

その人が、オリヴィエの言葉に、笑った。
血の滲むような微笑で。

「貴方には、何も隠し事ができないのですね……オリヴィエ」

オスカーの背筋が、氷水を浴びせられたように凍えた。

本当の気持ちって、何……
隠し事って、何……

「オスカーにさ……言ってごらんよ。」
水の守護聖は目を伏せてしばらく逡巡すると、ゆっくりと頭を振った。
「……できません」
「リュミちゃん……お願いだからさ……アンタが言ってくれたら、私は」
「オリヴィエ」
言下に、オリヴィエの言葉を遮る。
「あの人に……惹かれていました。でもあの人が私を好ましく思っているとは、とうてい思えなくて。だから私が求められていると知った時は、ひどく混乱しましたけど、……あの人を好きになれ

ると思ったんです。」
俯いたまま、一言一言を奇妙なほどにはっきりと話す。
「ずっと変わらず、穏やかな気持ちのまま、好きでいられると……思ってたんです。」
水の守護聖は、顔を上げて……もう一度微笑った。
痛々しいほど凛然とした姿で。
「今は、甘かったと、思っています……」

オスカーの心が、悲鳴を上げて、血を流した。

「……だったら、なんでオスカーに言わないの。なんでアタシにも言ってくれないの」
「オリヴィエ」
リュミエールの微笑は、一層深くなった。まるで滲んだ血が広がるように。
「それでも私は、あの人との穏やかな今を、……今を巡る時の輪を、私自身の手で壊したくはないんです。……わかって下さい」

リュミエールがオリヴィエに一礼して、きびすを返し、凛然と美しく伸びた後姿を見せてその場を去っても。

大きな溜息をついて、オスカーともリュミエールとも違う方向へ立ち去る瞬間、植え込みの間から垣間見えた、大きな荷物を下げたオリヴィエがその場を去っても。

オスカーは、その場に立ち竦んだまま、一歩も動けなかった。

追いかけなければ――
追いつかなければ――

最初に思いついたのは、ただ、それだけだった。

追いかけなければ――
あの人が、自分の手から去ってしまう――

見つけた後、何を言えばいいかもわからないまま、オスカーはただ、リュミエールを探した。

リュミエールは。
さっきの所から、さほど離れてはいない場所にいた。
大きな金木犀の木の下。

金木犀の花は、その黄金色の花を咲かせる数日の間、一面に広がるその匂いで世界中を支配した後、涙のように花を散らせて降り頻る。
大きな木であれば尚更。

青銀色の髪に、水色の肩に、木を見上げる白い顔に、細かい音を立てて落ちる黄金の花粒。
彼の人の周りに、橙色の花絨毯が輪を描く。

その表情は、一片の曇りもない幸せに彩られていて。

「……ユミエール」
声が、掠れた。
「オスカー」
彼の人は、一瞬、驚いた顔を見せて、振り返った。
髪に肩に降り積もっていた花粒が滑り落ちて。
深海色の瞳を自分に向けた、あの人は――――

笑ったのだ。本当に、嬉しそうに。心から。

大声で叫びたかった。
お前はいったい何を考えているのかと。
何を想っているのかと。

「オスカー？」
花絨毯の輪から抜けて、立ち竦むオスカーの方へリュミエールが歩み寄ってきた。
手が届く範囲に入った瞬間、オスカーはリュミエールを思い切り引き寄せて抱き締めた。
「オスカッ……！」
痛みにか、驚きにか、リュミエールが声を上げる。
細い肩を抱き締める自分の腕が、滑稽なほどにぶるぶる震えていた。
自分がどんなにこの人を求めているか、痛いほど思い知らされる。
震えの収まらない手を、どうにか緩めて躯を離した。リュミエールと視線を合わせる。

硬い表情のオスカーを不思議そうに見上げてくる瞳には、先ほどの血の滲みなどは欠片も残っていなくて。
何かを言おうとして開いたオスカーの唇は、乾いて震えるだけだった。
「オスカー？」
目の前の美しい人が小首を傾げた。さらりと長い青銀色の髪が揺れて、白い首筋が顕わになった。
「あ、ああ……明日、視察に出ることになったから」
大した用事じゃない、1日で帰る、と急いで付け加えた。長い期間、離れるかと思われると、何がどうなるか、何もわからないだけに一層空恐ろしかった。
「そうですか……お気をつけて」
リュミエールが微笑んだ。多忙な炎の守護聖を心から労わる微笑だった。
オスカーの眉根が、痛々しげに強く歪んだ。
怒鳴りたかった。
お前はいったい何を考えているのかと。
何かを言おうとして、しかし言えないままのオスカーより先に、リュミエールが口を開いた。
「あの……オスカー」
そこまで言って、リュミエールはわずかに頬を染めて俯いた。
「……何だ」
乾いた咽喉で、辛うじてそれだけを答える。
「……今夜は、私が……貴方の屋敷に伺っても……よいでしょうか」

オスカーは目を見開いて水の守護聖を見た。白い頬に浮かんだ血色はより一層濃くなって、顔は完全に俯いてしまっていた。
今まではその逆ばかりで、リュミエールがオスカーの私邸へ来たことは一度もなかったのだ。
喜びや不安の綯い交ぜになった煮え滾る感情が、オスカーの中を駆け巡った。
細い両肩に手を置いて、リュミエールの耳元で、囁く。
弾かれたように顔を上げたリュミエールの顔が、耳まで真っ赤になって、水の守護聖は素早く身を翻して早足に歩み去っていってしまった。
後姿を見送るオスカーの表情は、一瞬だけ笑みの形に緩んだが、すぐに厳しい形に引き締められた。
「……俺は、本気だからな……リュミエール」
囁いた言葉を、口の中でもう一度繰り返す。
――今晩、俺のベッドの上で、お前の全てを、俺の前に曝け出してやるよ――――

【オリヴィエより通達】
（対象：服飾店店長及び従業員）
梱包品、貴店にて展示されたし。売却不可。

――――愛されているとしか、思えない。
近頃には珍しく、リュミエールの体力も考えずに何度も抱いて、オスカーですら疲れ果てて眠りに落ちるほどに抱き合って。
浅ましいほどに貪欲にリュミエールを求めて。体の中を、心の中を何度も探った。
「最近……貴方の、様子が、……おかしかったから……」
吐息に混じらせて、桜色の唇が囁く。
「私で……貴方の役に……立てるのなら……」
オスカーは、リュミエールの躯に溺れながら、そんな睦言を聞いた。
「……ああ……」
オスカーを不安にさせるのがリュミエールなら、その不安を打ち消してくれるのもまた、リュミエールしか居なかった。
強く抱き締めて、リュミエールのより深い所へ飲み込まれるように、共に沈んでいった。

眠気なのか、快楽なのか、疲労なのか。
それすらもわからないほどに意識を泥のように混濁させて、眠りとも気絶ともいえないものに共に堕ちようとしていたとき。
「……私の、涙の、せいですか……？」
――――隣に居るはずの、かの人の声が、なんとなしにどこか遠くから聞こえたように思えた。

……俺の、不安。
「……そう、だな……」
……お前の、涙。
腕の中の肩が、揺れたような気がしたが。
意識はそこで途切れた。

愛されているとしか、思えないけれど。
――結局、聞けなかった。
何度も、何度も何度も聞こうとして、口を開いて――どうしても聞けなかった。
「俺のことを愛してるか」――と。

――それを激しく後悔したのは、夜更け過ぎに目が覚めてからだった。

自分のベッドで意識が目覚めた。
――今日は独りだった？
――いや、今日はあいつが……珍しく自分の館に来ると言って。何度も。何度も抱いて、一緒に眠った――そのはずで。

冷えた隣の空間に目を開いた。

見慣れた自分の館へ、ようやく今日迎え入れることが出来た愛しい人の姿を探し回った。
全ての部屋の扉を開いて、庭まで出て探し回って。

リュミエールが自分の館へ帰ったのだと、夜明けの光の中で理性が認めざるをえなくなったその瞬間

突き上げるような衝動が、オスカーの中を駆け抜けて。
オスカーの足元の、固い大地の感触が、ぐずぐずと音を立てて崩れ落ちていった。

自分の館に帰ったリュミエールが独りで、いつものように泣いたであろうことは容易に想像がついた。

少しずつ、少しずつ自分から遠くなっていく人。
少しずつ、少しずつ遠くで泣くようになっていく人。

主星に出向いて、淡々と仕事を続ける炎の守護聖は、随行した研究員が誰一人として近づけないくらいに恐ろしく無表情で。
どうやら何か彼をひどく激怒させることが在ったらしい事だけは推察できた。
自分の分担されたやるべき仕事を済ませると、守護聖とわからないような軽装に着替え、他の連中を置いて街へと出て行った。
恐る恐る同行を申し出た随行員は、極低温のアイスブルーの閃きに一瞥されただけだった。

――――よくセーブできたと、自分でも思った。
本当ならば、守護聖の――仕事など、直ぐにでも放棄して、リュミエールの所へ行って――――

――もう、限界だ。

何処とも考えず歩いていた裏路地の、看板を思い切り蹴り壊した。

――――こんな、真綿で首を絞めるような、日常の、時の輪など、
「――――壊してしまえ」

歯軋りの鳴るような、炎の守護聖の決意の言葉を聞いた者はなかった。

唐突に、開けた通りへ出た。
いつの間にか街は夜を迎え、街灯の明かりにアンティークな作りの路地が照らし出されている。
今いる場所が何処なのか、確かめようとして辺りを見回し――――釘付けになった。
その、ショーウィンドウに。

――――――――――――刹那。
混濁した意識の視界が、霧から抜けたように一気に開けて。
オリヴィエが行き当たった事実に、オスカーもようやく――気づいたのだ。

純白。
細い身体のラインを強調するように、余計なドレープは使われておらず、皺一つなく流れる線を描く。
肩を大きく開いたデザインのそれに、一切の飾りはない。
ただその長い裾にだけ、光沢のあるやはり純白の絹糸でびっしりと刺繍が施してある。
普通、外に向けて、正面を向いて展示されるはずのそれが横を向いているのは、ショーウィンドウの左端から右端まで伸びてなお余り、途中で幾重にか折り重ねられている長い長い裾を強調する

ためだろう。
紫を基調とした相手方の礼服も、並べて展示されてあった。
本来、青い色が一部に混ぜられるはずのそれが、あくまでも純白で統一されているのは。
あの人の青銀色の髪が、深海色の瞳が、その白を鮮やかに飾るためだとしか思えなかった。
「……リュミエール。」

4

――――全て。

リュミエールが望むものは、全て与えていたつもりだった。

――――何も。

あの人の、何も求めない優しさにかまけて。

何も、何一つ、「リュミエール」に、あの人だけに、与えるべきものを、与えていなかったことを。

今この時、初めて、自分の愚かさを嫌というほど思い知らされた。

――――今までに戯れに抱いてきた女と、同じ事しかしていなかったじゃないか。

ただ抱いて、愛していると、馬鹿みたいにそれだけで。

約束も、それ以上のことも、何もなく。

オスカーには、リュミエールが愛しているのが自分だけだと、自分だけに抱かれていると何の躊躇いもなく思えるけれど。

リュミエールに同じ事を求めていた自分が――今までに星の数ほどの女たちのとの、戯れの恋愛を繰り返してきたオスカーを、ある日いきなり信じろと、無言のうちに強要してきた自分が――本当に馬鹿だと思った。

真綿で首を絞められる想いだったのは、きっとリュミエールのほうだったはず――――

オスカーが横にいる今に、今を巡る時の輪に、縋るしかなかったリュミエールの痛さを思い知った気がした。

店に入ってショーウィンドウケースの展示品を両方とも買いたいと申し出ると、どちらも一点ものでしかも非売品だと最初断られた。

炎の守護聖の名と紋章を出した。店の従業員はオスカーが気抜けするほどにあっさり折れた。宇宙における自分の無比の権威をこういう事に使ったのは初めてだった。

それでも、他のものでなく、どうしてもそれが欲しかった。

自分が着ることになるほうはともかく、純白のあのドレスは、これしかないと、リュミエールのためだけに作られたものだと思ったから。

その後、宝飾店に入って、気に入ったものを見繕って、シンプルなデザインの、2つのプラチナの輪を買った。

裏には当然のように彫ってもらった言葉が入っていた。

(from Oscar to Lumiere)

（from Lumiere to Oscar）

【オリヴィエより通達】
（対象：炎の守護聖私邸の使用人）
以下の徴候在りし折には連絡されたし。
……

【オリヴィエより通達】
（対象：全守護聖（除2名）及び女王、女王補佐官）
至急礼服と心の準備されたし。

「オスカー」
……夜の聖地の私邸に帰ると、自分を待っていた暖かい笑顔に迎えられた。
誰よりも、何よりも見たかった微笑。そして自分が、今まで、無意識のうちに蔑ろにしてきた微笑――――。

「お帰りなさい。ご無事で何よりでした」
……なのに。
なんてこの人の微笑は、自分を包み込んでしまうほどに暖かいのだろうか。

自分に見せなかった、涙の理由が、血を滲ませた微笑の理由が、わかった。
自分の前で微笑うために。
オスカーには、オスカーにだけは、翳のない、暖かくて優しい、心からの微笑を見せるために。
その代わりに。自分のいないところで、泣いて、血を滲ませていたのだと。

壊れ物に触れるように、そっと手を伸ばして、頬に手を添えた。
そのまま、絹糸のような髪を梳く。
ゆっくりと、恐る恐る近づいて、包み込むように柔らかく腕の中に抱き込むと、指で、唇で、目元から頬へ、髪へ、何度も触れた。
いつもオスカーが見せる激情とは違う、羽根のような愛撫に、リュミエールは少し驚きながら、やんわりとされるがままになっていた。

愛しくて愛しくて、胸が痛みに壊れてしまいそうだ。

この愛しさを、自分はどれだけ無為にしてきたことか。

「お前が欲しい」

軽く抱き留めたまま、耳元で、柔らかく……心を込めて囁いた。

少し離れて視線を絡めると、深海色の瞳は大きく開いてオスカーを見詰めた。

それからリュミエールは目元を朱に染めると、恥じながら俯いた。さらりと音を立てて流れ落ちた青銀の髪が頬に掛かる。

「お前の何もかもが……欲しい」

少しだけ間を置いて、両腕に優しく抱き上げた。愛しい人はゆっくりと自分の首に腕を巻きつけて、首筋に顔を埋めた。吐息が首筋にかかる。

寝室に入った。この間、ようやく愛する人を迎えることが出来た部屋。

目覚めて無くなった気配に、地に落ちるほどの絶望を覚えた……ベッド。

腕の中の人を、ゆっくりと、横たえた。

ベッドの端に腰掛ける。いつもなら性急に覆い被さるところを。

不思議そうな顔をして横たわる目の前の人の、細い顎に手をかけ、薄めの柔らかい唇を親指で辿る。

「もう、二度と離さない……」

ゆっくりと躯を傾けて、目元に口付けた。

「もう、何処にも行かせない……」
それがこの間の、夜明け前に離れてしまった夜のことを指しているとわかったのか。
リュミエールの目が、葛藤の表情に細められた。
オスカーは少し身体を離した。視線を絡めるように。
「……リュミエール」
目を覗き込むようにして、宣言するようにはっきり呼びかけてから、ゆっくり身体を傾け、白い首筋に唇を当てた。
「……オスカー？」
明らかにいつもと違うオスカーに、熱くなった吐息を混じらせながら、困惑した声で呼びかけるリュミエール。
「……今を巡り続けるだけの、時の輪など、要らない」
オスカーの言葉に、リュミエールの身体が一瞬で強張った。
「……だから、聞かせて」
固まったままの肌の上に、唇を滑らせながら、オスカーは囁いた。

「……俺のことを愛している、と」

腕の中の躯が、大きく跳ねた。

しばらく、沈黙の時が流れた。
やがて、緩やかな愛撫の衣擦れの音が再開される。
片手で細い身体の、脇から腰へのラインをなぞりながら、唇を滑らせて、ゆっくりと白い胸元を開いた。
「俺は、お前に求めてばかりで……何もおまえにしてやれなかった」
慈しむように、滑らかな肌に唇を滑らせる。
「……んあっ……」
腕の中に囲った躯が一気に熱くなって、オスカーの褐色の身体の下で揺れた。
「お前が感じて当然の不安に、気づいてもやれなかった……」
「……っ……違っ……あ……」
一つ一つ、水の守護聖の纏っている衣装を開いていく。
少しずつ、心のベールを剝がすように。
「……俺に不安を見せまいとして、今を繰り返す時の輪に縋って……俺を自分の涙で傷つけまいとして、俺の居ない所で泣いて……そうだろう？」
「やっ……違うっ……」
愛撫を受けながら、顔を歪めて、泣きそうな顔でオスカーの言葉を否定するリュミエール。
――――まだ、本心を話してくれないのか？

そこまで追いやったのは、他でもない自分で――――――
「……本当に、すまなかった。悪かった。」
「違……」
オスカーはわずかに身体を浮かせた。オスカーに向けて見開かれた、深海色の目を見る。
認めてくれないことが、辛い。
「……許してくれないのか？……」
「違いますっ……！」
激しくかぶりを振る。
急激に、リュミエールの声のトーンが上がった。

「貴方のせいじゃない……！」

「……何故？」
初めて、自分の前で感情を昂ぶらせたリュミエールの、話を促すように穏やかな、しかし熱情のこもった愛撫を加える。
「……たは、…貴方は、こんなに私を愛してくれているのに……それを信じようとしない私が嫌い……」

「……」
「私を愛していると告げてくれる、……っ……貴方に素直に返事できない私が嫌い……」
「……リュミエール」
「変わらず愛情を注いでくれる、貴方を……失ったときに……傷つかないよう、心の準備をしている私が大嫌い……！」
「リュミエール」
「貴方との未来を信じられずに、時の輪に縋る私自身が大嫌い……！」
大きく頭が揺り振られて、青銀の髪がシーツの上で乱れ、白い頬から涙が散った。
「こんな私が、貴方の傍にいて良いわけがない！　私なんて大嫌い！」
吐き出すような叫び声だった。
初めて、涙を隠しもせずに、自分の腕の中で本心を見せて泣き叫ぶリュミエールがそこにいた。
初めて知った。本心を曝け出した涙が、こんなにも胸を熱くさせる、愛おしいものだと。
口付けた。ゆっくりと、どこまでも深く。

ようやく本心を発露したリュミエールは、泣き叫んで上がった息を口付けの合間につきながら、涙に濡れた目を閉じ、断罪を待つような諦めの表情でなすがままにされている。
「……それでも、構わない」
オスカーの言葉に、リュミエールが弾かれたように目を見開く。
「お前が、お前自身を愛せなくても構わない」
リュミエールと視線を合わせるオスカーから、自然に笑みが零れた。
この自分に、炎の守護聖に、ただひとり、心底から惚れられてしまった半身の運命だ。
諦めて、甘受してもらわねば。

「お前の分も、俺がお前を愛してやるよ」

リュミエールの深海色の瞳が、これ以上はないくらいに大きく見開かれた。

「……もう二度と、離さない。絶対に」
愛撫を再開した。自然と熱がこもる。
「もう、お前しか要らない。他の女など愛せない」

「……オスカ……あ……」
「信じられなくても構わない。絶対に離さないから」
「……あ、……んあっ……」
「お前はただ、俺の傍で、俺を愛してくれればいいから」
「……オスカー……あ、だ……」
「だから、聞かせて」
「オスカー……」

愛撫が急に苛烈さを増した。

「オスカッ、や、あ、やっ……！」
「愛してる……」
「……あ、……んぁ……っ……！」
「言ってくれ」
「……スカッ……」
「愛しているリュミエール。……聞かせて」
「……オスカー……ぁ……」

観念したように、震える白い手がオスカーの紅い髪を掴んだ。

「……なたが、……です、オスカー……」
「……もっと」
「貴方が、好き……です、オスカー……」
「もっと」
「貴方が、好きです……大好き……」
「もっと、聞かせて」
「好きですオスカー……好き……愛してる……」
「もっと」
「愛してる……愛してるオスカー……何処にも行かないで……！」
「もっと。もっと俺を求めろ」
「愛してるっ……ん…っ、あい、し、てる…っ、離れ、ないで……！」
「もっとだ。もっと俺に堕ちてこい」
「や……も、何処、にも、行かないで、……私、を、私だけを、抱いて……愛して……愛してる……愛してるオスカー……！」

叫ぶリュミエールの声は、涙声になっていた。

「……何もかも、全部、お前にやる」

「……カー……んぁっ……」
「お前の望むものは、全部、俺が満たしてやる」
「……オスカー……ぁ……」
「……お前だけを、永遠に、愛している……リュミエール」
「……っ、や、あ、」
細い指が、痛みを覚えるほどにオスカーの髪を握り締めた。
「……いしてるっ、オスカー……！」
語尾は、遥かに深い高みに上り詰めた嬌声に変わった。

涙に濡れながらぐったりと意識を手放したままのリュミエールを、オスカーは心地よい気だるさの余韻が残る自分の腕に抱き上げ、たっぷりと湯の張られた浴槽に連れて入った。
腕の中に抱えたまま、乱れた躯を綺麗にしていく。リュミエールは何度か、ほんの微かに意識を浮かび上がらせていたが、そのたびにオスカーが優しく微笑みかけると、安心したように再び引き摺られるような眠りについていた。
リュミエールと自分の体を一通り洗い終えると、浴槽から出て、リュミエールの身体をソファに

横たえ、丁寧に拭いていった。
それから、今日主星で手に入れた純白のドレスを、ゆっくりと身につけさせていった。
思った通り、誂えたように、ぴったりだった。
自分も、同時に購入した紫の礼服に着替えた。

全ての用意が終わると、ビロードの小箱から、２つの輪を取り出して――――一度、強く握り締めて――――それから胸ポケットに納め、眠ったままの純白のリュミエールを両腕に抱え上げて、部屋を出て行った。

【オリヴィエより通達】
（対象：全守護聖（除２名）及び女王、女王補佐官）
時、来たれり。集合☆

――――少し、眠っていたらしい。
そう気がついて目を覚ましたのは、腕の中に納めたままだった愛しい人の、身じろぎする気配が

身体に伝わってきたからだった。
いつもは強い太陽の光が差し込む天窓の下、白い翼の持ち主を強く照らし出す、この数段高くなった場所で、今は自分と――――真円の月の青い淡光のもと、純白のドレスを纏って、浮かび上がるように光るリュミエールの姿が照らし出されていた。
そのリュミエールの、瞼がゆっくりと上がり、そのままオスカーと視線が合う。
「……オスカー？……」
ぼんやりとした顔が、ゆっくりと巡らされて、辺りを見回した。
目に映ったのは、行事ごとに訪れる、ある意味、見慣れたこの場所と。
――なぜか、私の腕が、足元が、とても白くて――――
――その白が、遠くへ、扉の方へ滑らかに伸びていて――――
「……え……」
リュミエールの意識に、ゆっくりと、浮上してきたそれは。
床に座るオスカーの両腕に、抱えられたまま。この、謁見の間で。
――ウェディングドレスを、身に纏った自分――――
「……リュミエール」

認識した状況を理解するより先に、オスカーの手によって、何かがリュミエールの手の中に握らされた。
先に握り締められていたオスカーの片手が開いて、一瞬、月光を弾いたのは、銀より白く光る細い輪で。
……自らの手を開こうとする、リュミエールの白い指先が震えた。
……その中に在ったのは、オスカーの手の中のものより、一回り大きい、揃いの輪。
同じように月光に照らされて、縁が光った。
「リュミエール」
再び合わされた視線の、オスカーの表情は、とても穏やかで――――
次に来る言葉に、リュミエールの唇が、心が、震えた。
「結婚しよう。リュミエール」
リュミエールの意識の中で、長い間、見えない縛めになっていた時の輪が、水の中で水飛沫を上げて砕け散った。

「……ッスカー……」
堤防が決壊したように、リュミエールの両目から溢れ出す大粒の涙。
あの日と同じように、月光を吸って青く光り、白い頬を転がり落ちるのに――

愛しい人の、歓びに流す涙が、どれほどに優しい微笑を誘う、心温まるものであるか。
オスカーは、この日に初めて知ったのだった。

オスカーの胸に顔を埋めて、リュミエールが本格的に泣き出してしまった。
「受けてくれるか？」
オスカーの問いに、リュミエールは声を出すこともできず、ただ何度も頷いた。
背中に回されたリュミエールの片手が、ぎゅっと、強くオスカーの服を掴む。
「愛して、います、オスカー……永遠に、貴方だけを、……」
涙混じりの声で、切れ切れに、辛うじてそれだけを告げた。
「誓いの言葉はまだ早いぜ。それは俺から先に言う言葉だ」
オスカーの優しい笑いを含んだ声に、リュミエールが涙の乾かない瞳で、微笑った。

バタン、と唐突に乱雑な扉の開く音。
「はァ～い見届け人も準備せずに式挙げるつもり？　ホンット～に甲斐性のない男ね～アンタって！」
開かれた両開きの扉から覗いたのは、派手な礼服に身を包んだ派手な髪色の持ち主だった。
「オリヴィエ!?」
驚いたオスカーとリュミエールの言葉が綺麗に重なる。
「も・ち・ろ・ん、アタシだけじゃないわよ」
……2人は、本当に呆然とした。
オリヴィエの後ろには、彼らに笑顔で笑いかけながら、揃って礼服に身を包んだ守護聖全員の姿が、それどころか金の髪の女王と紫の瞳の女王補佐官の姿までがあったのだ。
慌てて共に立ち上がったものの、驚いて声も出せず動けもせずにいる2人の方へ、オリヴィエがゆっくりと歩み寄ってきた。
「……ああ……」
そして2人から少し離れた所で、立ち止まって、数段高い位置に立つ、天窓からの月光に照らされたリュミエールを眩しそうに見上げる。
「やっぱり、よく似合ってる……すっごく綺麗よ、リュミちゃん」
そう言って、足元に靡いていたウェディングドレスの裾を綺麗に広げると、階（きざはし）を上り、2人のすぐ傍まで歩いてきた。

「――――これ、アタシがリュミちゃんのために作ったのよ」
「――――は？」
思わずオスカーが声を上げる。
「あの日さ――――リュミちゃんが、オスカーを愛してるって言ってくれたらあげるつもりだったのよ、コレ。でもリュミちゃんたら強情なんだもの」
あの日、オリヴィエが持っていた大きな荷物。
「そのままどこかに押し込むのもあんまりに口惜しかったから、主星の行きつけの店に展示だけしてくれるように頼んでおいたんだけど」
炎の守護聖が買っていったって聞いた時は驚いたわぁ、とオリヴィエは言葉を続けた。
――――道理で、店の店員があっさり引いたわけだ、とオスカーは思った。
「オリヴィエ……」
呼びかけるリュミエールの声が、震えていた。
「リュミちゃん、ちゃんと自分で幸せになれたのね……よかったわ」
手を伸ばして、ゆっくりとリュミエールの髪を梳くオリヴィエの言葉に、再びリュミエールの涙が溢れる。
「いいえ……いいえ」
青銀の艶やかな髪が揺れた。
「私の力ではありません……オスカーの、おかげです……オスカーが、私の傍にいてくれたから……」

その言葉に、オリヴィエが柔らかく微笑んだ。
「――――――さ、ノロケはそのくらいにして、結婚式、やるわよ☆」
へ～いか～～、とオリヴィエが扉のほうを振り返って手招きする。綿菓子のような金の髪を持つ女王は、小走りにてとてとと走り寄ってきた。
そのままぐるっと回り込んで、本来の結婚式で神父が立つべき位置、オスカーとリュミエールのすぐ脇まで来て歩みを止めると、2人に向かって、にこっ、と、陽光のような明るさで微笑みかけた。
オリヴィエがゆっくりと下がり、他の守護聖たちが壇上を取り囲んでいる、その中に混じる。
「女王、および全ての守護聖の名の下に於いて、これより、オスカー、リュミエール、双方の結婚式を執り行います」
脇に立つ、紫の瞳の女王補佐官の凛とした声が謁見の間を渡った。
「ではオスカー、誓いの言葉を」
女王に笑顔で呼びかけられたオスカーは、ゆっくりとリュミエールのほうへ向き直り、アイスブルーの瞳に真摯な色を浮かべて、リュミエールと視線を合わせた。
まだ涙の露のついたままの、水色の睫へ、右手を伸ばし、そっと拭う。
「リュミエール……誓う。俺は、お前だけを、永遠に愛する」
そのまま、今までで一番綺麗な表情を見せる、リュミエールの顔に手を添えた。
「ではリュミエール、誓いの言葉を」
リュミエールはわずかに顔を傾けて、この場を見守る女王に微笑みかけた。それから再び視線を

戻し、まっすぐにオスカーを見つめる。
「貴方を、貴方だけを、永遠に愛することを誓います、オスカー……」
震える手を持ち上げて、頬に添えられた暖かい手に重ねた。
「では、指輪の交換を」
頬に触れていたオスカーの右手が動いて、きゅ、と重なっていたリュミエールの左手を握った。
ゆっくりと、オスカーの前に導かれていく。輪をその中に抱いて、ずっと握り締められたままだったオスカーの左手が、動いた。
その中に光るのは、紛れもない、澄んだ光を弾く輪で。
リュミエールの、震えの止まらないまま開かれた手の薬指へ、リングが触れ、差し込まれた。
ずっとオスカーの手の中にあった細い輪は、オスカーの熱をその中に孕んで、熱かった。
……リュミエールは、無意識のうちに握り締めていた自分の右手を、確かめるようにゆっくり開いた。
自分の掌の上で輝く、輪。
リングを嵌められたばかりの、震える左手で持った。
差し出されたオスカーの左手の、薬指に、ゆっくり、ゆっくり、嵌めてゆく。
最後まで差し込んだところで、重なる手が強く握り締められた。顔を上げる。
視線を絡めたオスカーへ、少しずつ、自然に、顔が寄せられていった。
目を、閉じた。目尻から涙が溢れた。

――唇に触れる唇の感触と、耳に入る、同僚たちの祝福の歓声。
閉じたままの視界が、真っ白な光に包まれるように、何も、何も見えなくなって。

私を縛っていた、今を永遠に巡る時の輪は。
貴方のくれた輪が――跡形もなく、消し去ってくれて――

遥かに続く新しい未来が、足を踏み出したリュミエールとオスカーを暖かく包んだ。

医者から告知されたその病名は、オスカーにとってずいぶんと聞き慣れないものであった。
「最近、名称が変更されましたからね……」
小さな声で医師が言葉を繋いだ。
ベッドの上は無人だった。この部屋にいるのは医師とオスカーの2人だけで、患者であるあの人は――また、あの丘にいるのだろう。
「症状などについては以前にお話した通りで……脳内の物質的、生理学的な変化がこの疾患に関連している事は、薬剤中の化学物質により症状が軽減される事から、ほぼ間違いないと考えられています――ですが何故、どのような機序でこの疾患に罹患するかは未だに不明な点が多いのです」
オスカーは椅子に座ったまま、やや俯きがちのその視線の先になにか、とても大事なものがあるかのように、硬直したまま動かない。
しばらく間を置いて、医師は言葉を続けた。
「これといった原因が特定できない事が殆どですが、脳内の物理的な変化が心理学的、精神学的な変化を及ぼして発症する事もありますし、逆に精神的なダメージが脳内の細胞にダメージを及ぼして発症する事もあるようです」
医療部内のこの部屋は白い色彩が一面に広がっている。白いベッドに白いシーツ、棚を覆う白い

布。
この時期、この聖地の日差しは夏のそれであるはずがないのに、窓から差し込む光は目の痛くなるほどの白い色彩にくっきりと闇の部分を作り出している。
「以前――――まだ私がこの分野の勉強を始めた当時、先輩の医師の方から聞いた話が印象に残っているのですが――――」
独り言のように医師が話す。
「この病気にかかる人は、とても――――とても優しい人が多いのだそうです」
その言葉に誘われるように、オスカーは目を閉じた。
白い光景から遮断された瞼の裏には、淡い青の色彩が静かに浮かぶ。
「症状が強い時には非常に激しい反応を示す事もあるのですが――――薬剤などを使用して症状が治まると、とても人に気を配って、周りの人たちの体調を心から心配したりするのだそうです」
オスカーが目を開くと、そこは先ほどと変わらない、不自然な白さに覆われた部屋だった。
白と翳のコントラストは、暖かみのある他のわずかな色彩を知覚から排除するほど、滑らかに金属的で。
「彼が言うには――――『神に選ばれた人だけが罹る、とても尊い病』なのだ、と――――」
オスカーは、自分の真紅の髪すらもが痛いほどの白い光景に溶けてゆくような錯覚を覚えた。

ある日突然に、私の世界は現実から切り離されてしまいました。

目の前の光景に映る草木も花も、懐かしく愛おしかった筈の人々も、まるでそこから生命感だけが奪われてしまったかのように機械的で不自然で、その意味を欠落したただの器になってしまったのです。花が風に揺れるのは目に見えない存在である誰かが振り子のように永遠に続く運動をそれに対して強いているかのようであり、親しかったはずの人々の手の動き、足の動き、その関節の動きや角度といったもの、それらは全て機械仕掛けの人形のようにぎこちなく他意的な生命感に欠けたものとして映るのです。

慣れ親しんだはずの宮殿や私の館は山のように膨れ上がり、もはやそれをそれとして認める事ができなくなってしまいました。そしてその背後に広がる森や草原は何処までも果てしなく続くようであり、無数の、しかしどれひとつとして他のものと同じではない様々な色彩や大きさの緑色が斑点のように宮殿や館の壁に映し出され、それはまるで金属の上に滑らかな塗料で描かれたようなぎらぎらとした印象を与えるのです。

私はこの、ありとあらゆるものが生命感を欠失してしまった世界に、たった一人で取り残されてしまった事を自覚せざるを得ませんでした。そしてそれはなんとも言い様のない漠然とした不安を私に感じさせたのです。

私は私の現実を取り戻すため、私に残された現実をあちらこちらと探し回りました。宮殿の廊下の柱の角、執務室の机の引出しの中身、庭園の噴水の水底に沈む敷石。それらをそれらとして取り戻すため、私は何度もそれらを手でなぞり、何度も触れました。しかしそれらのどれひとつとして、生命感を帯びて私に働きかけてくれるものは見当たらなかったのです。全てが、不自然なほどに滑らかで、金属のようにつるりとしており、針のように細く長く紙のようにぺらぺらで、そして現実

味から切り離されていました。
「それがお前の罪なのだ」唐突にそのような声が聞こえました。「この世界にただ一人だけで永遠に存在し続ける事がお前の罪に対して与えられた罰なのだ」その言葉は激しい緊張感を伴って何度もぐるぐると私の中で巡りつづけました。
私はその時に思い出したのです。私が罪を犯した事を。そしてその罪に対してこのような罰が与えられた事を。
私は私の犯した罪が何なのかを理解していましたが、それはその意味を欠落し現実を抜け落とし、空っぽのまま私の中に存在していました。空虚な器を抱え込んだ私も同時に空虚なただの器でした。私は非常に泣きたくなりましたが、空虚の私の体の中に存在するのは空気ばかりで、涙を流そうとしても流すべき涙は私の中に一滴も満たされていませんでした。また涙を流すというその行為は私を罰した存在によって禁止された行為でもありました。
「これが私の罪なのです」私はそう口に出して言いました。そう言うよう、私を罰した存在に命令されたからです。
「これが私の罪なのです」と何度も繰り返し言いました。そしてその事によって、私の罪が許され、再び私の現実を取り戻す事ができると思いました。
しかし何度繰り返しても、私の罪は許されることがなく、現実は私と私の周りから切り離されたままでした。相変わらず目に映る光景はぎらぎらしており、ぺらぺらと薄く生命感を欠いていて、何処までも果てしなく無限に続いていました。私はその無限の大地に私の発した言葉が一列に並んで何処までも伸びていくのを目にしました。

私は先ほどよりも強く、とても激しく泣きたいと思いましたが、やはり私の中身は紙風船のように空虚なままで、流すべき涙は一滴も用意されておらず、また依然として泣く事は私に禁じられた行為でした。

「そりゃね……びっくりしたわよ」

自分の爪の先を弄びながら話すオリヴィエの表情は、俯き加減に伏せられた顔と日差しの角度の割合で見えなかった。

「リュミちゃん、廊下に立ち尽くして一生懸命白い柱、何度も撫でてんだもん。かと思ったら急に庭園の噴水の方に走り出して……袖口が濡れるのも構わずに水の中に手突っ込んで、水底の敷石触って……うん、そう、子供みたいな感じで。」

オスカーはテラスの椅子に座ったまま、何も知らなげな顔で無邪気にさざめく草木をじっと見ていた。

テーブルの上の手付かずのカプチーノからは湯気が消え、とっくの昔に冷めきっている。

ひとしきり、強い風が吹いた。

「なんかね、その様子が泣きそうになるんじゃないかってくらい必死で……堪らずに声かけたわよ。リュミちゃんどーしたの、って。そん時の見上げてきたあの子の目、……」

そこで一旦、オリヴィエの言葉が詰まる。言葉を捜しているのか、逡巡しているのか。

「アタシにね、ちゃんと視線は向けられてるのにね。……絶対、この世でないものを見てるんだって思った。」

大きく、ひとつ息をついた。
「焦点が合ってるのに合ってないっていうか……すごくびっくりしてそのままアタシ止まってたのよ。そしたら、『これが私の罪なのです』……って。リュミちゃん。何回も繰り返して……」
その状態で少し言葉を収めると、オリヴィエはもう一度、今度は小さく溜息をついた。爪の長く伸びた指が、やるせないように俯き加減で落ちてくる前髪を掻き揚げた。
「正直言って、恐かったけど……それ以上にこう、なんていうか……」

その時に呼ばれた単語が、自分の名であると理解するまでにしばしの時間を要しました。なぜならその声は、回転数を変えたレコードのように、生身の体では発し得ないような、奇妙な、機械的な響きを伴っていたからです。それは甲高いようにも聞こえ、また地を這うように低くあるようにも思いました。きしきしと何かをこすり合わせるように軋み、歪んで、私をあざ笑うかのように聴覚に進入してきました。
見上げた時に目に入った姿は、確かによく知っていたはずの人でした。いつもと変わりない姿であるはずのその人は、私の理性で（理性などというものが私に残されていれば、の話ですが、）よく知った、懐かしい人であると理解できるのですが、その事実は丁度その時に吹いてきた突風の中へ塵芥のように消散してしまい、後には不自然な、生気に欠けた、紙の上に描かれた落書きのような表情が私を覗き込むばかりでした。
私はとても哀しくなりました。親しかったはずの人の心、想い、そういった暖かみや厚み、重み

ある大切な感情を、自分で受け取る術を全て奪われた事に気がついたからです。ただ私に残されたものは、空っぽの器の表面に張り付いたような笑み、きしきしと不自然に軋む声の響き、無目的にプログラムされた機械を思わせるような体の動き、そういうものだけであることを、最も親しかったはずの人々から示され、思い知らされたからです。

「それがお前の罪なのだ」先程と同じような私を裁く声が、再び私の頭の中で響きました。その声は止むところを知らず、激しい緊張を持って私に襲い掛かりました。私は身を竦ませて何度も繰り返されるその声をただじっと受け止め、耐えていました。

「これが私の罪なのです」私はその緊張感に耐えられず、私を罰するその存在に許しを求めようと思い、小さな声でそう言いました。しかし同時に、私の罪が贖われることは永久にありえないということも私は知っていたのです。私はその矛盾した2つの考えを同時に抱きながら、しかしその矛盾を解消する術を知らず、ただ何度も贖罪の言葉を繰り返さなければならないという至上の命令に従うばかりでした。

とても大切だったはずの人、私の目の前にいる、昨日までとても近しかったはずのその人が、心配そうな表情で私の顔を覗き込むのが見えました。しかしその、大切なはずの人の、心配げなはずの表情は、目で見て理解できるのに、それは奇妙に変容し、現実味を欠落し、山のように膨れ上がって、ぎらぎらとした金属のようになって私に襲いかかるのです。私は恐怖とパニックに襲われ、二言三言、何かを叫んだように思います。私を心配して伸びてきたその人の手も、やはりロボットのように不自然な、機械的な動きに見え、その手の先の指が、とても太い金属の針となって私の心臓に突き刺さるかのように思われました。私は無我夢中でその手から逃れました。

そのまま――

「なんていうか、すごく――哀しかった。」

そのまま、私は走り出しました。

間違っている。この世界は間違っている。ただそれだけは知っていたのです。

この非現実的な、薄っぺらい、機械的な、無意味な世界は、あるべき世界ではないと――私はただ、それだけを知っていたのです。

しかしこの強力な枷から、私の犯した罪に対して与えられた罰から、どうやって逃れられるというのでしょうか？　それは到底不可能な事のように思われました。私が走っている間も、私を罰する声は引切り無しに続き、私の辿る道のその両脇で、緑の梢は段ボール紙で作られた舞台装置のように生気を欠き、廊下の柱は一回りも二回りもその容積を増して私を押し潰そうとしていました。私が地を蹴る時に発生した音は、とても硬い、長い針となって私の脳の中へ直接突き刺さるかのように聞こえてきました。

私が何かを、何であるかわからない何かを、私をこの非現実から救ってくれる何かを探して走っ

ている間、何人もの人に逢いました。その人たちはかつて、ほんの昨日まではとても親しくしていたはずの人々だと理解できるのですが、私がその人たちの中に、あの懐かしい、暖かみのある、豊かな、感動的な、人間的な触れ合いを求めて近づこうとすると、やはり彼らはきしきしと不自然に動き、滑らかに金属的な機械のように、無意味に、そして恐ろしく膨れ上がって見えるのです。彼らが私を心配して掛けてくる声は、あたかもそれらからすべての意味が抜け落ちてしまったかのように虚ろで、温かさも陰影も感じられず、時折、1つの言葉だけが他の言葉から、まるでナイフで切断されたかのように切り離され、頭の中をぐるぐると不条理に駆け巡りました。彼らが私の様子を不審に思い、近づこうとすると、彼らの目、彼らの鼻、彼らの唇、彼らの声、そういうものははっきりとわかるのに、それは統合されることなく、個々に私の上に圧し掛かり、彼らの不自然さ、人工的で空虚で緊張したその感覚が一層その度合を増し、私はとてつもない恐怖に駆られて悲鳴をあげてしまうのです。聖地を暖かく照らしていた太陽は、いまや強力な電光のようにぎらぎらと彼らを、全てのものを痛いほどのその白色光の下に晒し出し、それらが作り出す陰を虚ろな偽りの物へと仕立て上げ、どこへも逃げ出す術が無いということを私に知らしめているようでした。

私は再び走り出しました。

「逃げられる訳が無い」私を罰する言葉はますますその声を強めていきました。「それがおまえの罪なのだから」それは私を罰する声でしたが、同時に私自身がその言葉を口にしていることにも気がついていました。というのも、私には既に、言葉というものが、私自身の言葉なのか、私以外の誰かの言葉なのか、それとも私を罰する存在である者の言葉なのか、判断する能力を奪われていたからです。

人々のいない方向へ、私を恐怖に陥れる非現実感を見せしめる人々のいない方向へと、私は走っていきました。森の中へ出ると、木々の間を抜ける風が私の体をなぶりました。木々はやはり、模型のように薄っぺらに、虚ろに見え、人工的な緑の間を抜ける風はひゅうひゅうと悲鳴や唸り声のようになって私へと襲い掛かってきました。風はとても冷たかったので、私はその風が氷河の上から生まれ、吹いてくる風、その通り道にあるあらゆるものを薙ぎ倒そうとする恐ろしい生き物であるかのように感じました。

次々と私へ襲い掛かる、有形無形のそれらの手から逃れようと、私は足を絡ませながら走り続けました。

絶望。

もはや私にはただ、それだけしか残されていませんでした。

およそ女王陛下の統べる宇宙全てのものが住まうことを許された、暖かな、色彩に満ちた世界は、私からことごとく奪い尽くされ、代わりに私に永久的に強制されたものは、恐ろしく非人間的な、機械のように空虚で人工的な、荒廃した、身の毛のよだつような恐ろしい空間の中で生き続けることでした。

そんなことが可能であるとは到底思えませんでした。ぎしぎしと軋むこの世界の空気では、息をすることすらもままならないことであるように思われたからです。

ですがそれかといって、私はこの世界から抜け出せる方法を、ひとつたりとて見出すことはでき

ませんでした。
その事実に、恐ろしい事実に慄く自分がいながら、また頭の隅のもう一人の自分はそれを当然だと思っていました。この世界は、私の罪に対して与えられた罰なのですから。そしてそれに対して、長年自分が慣れ親しんだ物も土地も、かつて心を交し合った親しい人々も、何もかもが今となっては無力であったのです。
涙すらも絶え果てるような絶望の中で、それでも何とも理解らない何かに向かって走り続けていた私は、足元の何かに躓き、蹌踉めきました。足を縺れさせながら、かろうじて転ぶことを免れた私が、目を上げると、

目の前は、何時の間にか、草原になっていました。
少し離れた小高い丘の上に、人影が見えました。
こちらに背を向けた姿の、長い青いマントが、強い風に大きくはためいていました。

そのひとの、あの——あのひとの、紛うことのない紅い髪を目にした瞬間、

弾けるような、眩いまでの光のような、心が締め付けられるように掛け替えのない暖かさに満ちた波動が、あのひとから一瞬にして広がって、
その光に包まれた全てのものは、その美しい色を取り戻して、

私は駆け出しました。
あのひとに向かって。

私の全てを救ってくれる、あのひとに向かって。

私の足音に振り返ったあのひとは、あの凍るような瞳を大きく開いて、私にはその表情は酷く驚愕しているように見えました。
ですが私は、その表情の意味を考えることもなく、ただただそのひとに向かって、走って走って走って、そして——全身でぶつかるようにしてその懐に飛び込みました。
あのひとの体はとても暖かく、その心は紛れもなく鼓動を打って、なんと生命力に満ちていたことか。
私を取り巻く景色は、そのひとを目にした一瞬のうちにその色を取り戻し、あの懐かしい、優しい、暖かな気配をもって私をその中に抱擁していて。
そのひとが言葉も無くして、驚きのあまりに動けず、かすかに身じろぎする、その気配さえ、なんと愛おしく、涙の出るほどに暖かに豊かな人間味に彩られていることか。

私は生き返らせてもらえるのだと。
ただこのひとだけに、生き返らせてもらえるのだと。

その後の私はもう、狼狽している様子のあのひとにしがみついたまま、ただただ泣きじゃくるばかりでした。

程なくして、私は気がつきました。

世界が色を取り戻し、暖かい気配を持って私を迎え入れてくれるのは、ただあのひとが傍にいてくれるときだけなのだと。

医師団によって診察を受け、診断が下された私を、その綺麗な氷青色の瞳で痛ましく見詰めながら、彼もまた（それが何故なのだかは判らないのですが）手放し難いような様子で私の傍に長時間居てくれるのですが、世界が彼を必要としない訳はなく、また――彼と共に有った後にはいささかの人間味を取り戻したように感じる私自身も、彼が私以外の彼の世界へ戻る事を、彼が自由に彼らしく有る事を自ら望むものですから、なお後ろ髪を引かれるような表情を残しながら、彼は私の傍から離れ、彼自身の仕事へと立ち戻るのですが。

彼が視界から消えたその瞬間から、世界は再びじわじわと私を苛み始めるのです。

有機物はその生命感を欠失し無機物へと成り果て、無機物は有機物のように圧倒的な存在感を持って私に襲い掛かり、再び恐慌に襲われる私は、たったさっき固く心に誓ったはずの決意も雲散霧消してしまい、私を生かしてくれるただ一人の存在を捜し求めて駆け回るのです。

何度かの、結局無為に終わった試行の後、彼も私も、否が応でも思い知らされざるを得ませんでした。

私が生きるためには、彼が絶対に必要だったのです。

私が生きるためには、——

私が生きるためには、彼が絶対に必要だった。
それは確かに最初は、純粋に愛情の対象としてであったと思う。
彼と出会ったその瞬間から——私は確かに彼を愛していた。ずっと。ずっと永い間。
一度知ってしまったそれは、奪われてしまえばすなわち私にとって死と同じ意味を示すほどに。
だがその感情が生まれたその当初から、摂理に反するものとしての翳い背徳と退廃と罪業の性質を帯びていたそれは、永い永い年月の間に、行き場のない駄物としての閉塞感と、彼が常に私に向ける敵意と冷たい視線とに揉み歪められ、その原形を留めぬほどに大きく変容してしまった。
彼と口を利くたびに掻き乱されるその感情は、もはや愛であるか憎であるかの区別がつかない。
ただ彼に、彼だけに、厳密な単一方向性を持って激しく向けられるその感情。

そのように生まれ育ってしまった感情を、奇形児を慈しむように、私は仄かな哀しみと共に胸に抱いている。
両手で掻き抱くように、後生大事に、この胸に抱えている。
たとえそれが、許されざる罪であっても、この感情こそが、私に生きる意味を与えてくれる――私が生きるために絶対必要なものであったから。
この感情があるからこそ、私は私以外の何者でもなく、この世界に在れるのだから。
愛と憎は、常に背中合わせで、紙一重だ。
私を生かしてくれるそれが、愛情であっても憎悪であっても、どちらでも良かったのだ。
どちらでも良かったのだ。

彼の濁った瞳の奥に、どちらでも良いそれを探り当てようと、必死になって足掻いたのだ。
突然の暴力の恐怖に晒されながら。

激した呼吸で、大きく溜息を吐いたのはどちらであったのか。
荒い声音での論争――怒鳴り合いと呼んでも一向に差し支えないほどのそれは、声帯が痛みを訴

えるほどに長時間に渡って続き、もはや理性は怒りに、怒りは倦み疲れた倦怠に取って代わられていた。
この水の守護聖の執務室の中に二人以外の姿はなく、しかし壁を隔てた向こうでは、息を潜めるようにしてこちらの成り行きを伺う複数の気配がひしひしと感じられる。
同じ色の、しかし微妙に異なる色合いの、きつい眼差しを正面から見据え合ったままだった、それを先に逸らしたのは炎の守護聖のほうだった。
「……もういい。おまえの考えることは全然判らないという事だけは良く判った。」
その言葉に、水の守護聖が唇を噛む。
何度理解しようと努力をしても、結果として生み出されるものは不毛と空虚ばかりだ。
そのままオスカーは背を向け、扉のほうへ歩き出す。
その背から立ち上る、強く激しい気配を、水の守護聖は哀しみの混じる感情で、愛しいと思った。
炎の守護聖が扉に手を伸ばし、開けようとした、その直前。
リュミエールは、自分の執務机の上に、忘れられた書類を見つけた。
炎の守護聖が持参した、先ほどまでの二人の論争の対象になっていた惑星に関する、それを。
だから呼び止めたのだ。何の他意もなく。

「オスカー」

炎の守護聖の肩が、大きく揺れたような気がした。

緩慢な動作で振り返った、その薄い氷色の瞳は、翳い淵を覗き込んだように、澱み、濁んでいて――。

急にかつかつと軍靴の硬い音を響かせて近づいてくる。

大きな手の、強い力で上腕を掴まれた。

何が何だか判らぬままに、気がついた時には、隣続きの私室の床の上に引き倒されていた。

背に硬い床の衝撃が当たり、一瞬息が詰まる。

何かを言おうとした水の守護聖の口は大きな広い掌で塞がれ、上げようとした声は遮られた。唇に強く押し当てられる熱い掌の感触を感じた。

両手は上げられ、掴まれ、肘で押さえられ、足は足で動きを封じられる。あっさりと床の上に、強固に縫い留められていた。

軍人の手馴れた拘束。

ただひとつ自由になる目を動かして、必死に炎の守護聖の表情を追った。
これほど翳い眼をしている彼を見たのは、未だかつて、一度も無い。
どんよりと深く濁った瞳。
「……お前の罪だ」
びくりと震えた。
自分の内に秘めていた感情を、暴き晒されたように感じて。
オスカーは手加減無しに細い手首を握り締め上げる。
爪が食い込んで、リュミエールの腕に鋭い痛みが響いた。
「……いつもそうだ。お前だけが俺を掻き乱す。この業火を消し鎮めることもままならない程に」
首筋に噛み付かれた。
愛撫とは程遠い、暴力以外の何物でもない行為。
上がった苦痛の声は、オスカーの掌の中でくぐもった不鮮明な音に変わった。
頭は真っ白で何も考えられず、ただ本能的にこの拘束から逃れようとして身体を捩らせた瞬間。

「だってそうだろう？　俺が何か悪い事をしたか？」

何を言われたのか判らなかった。
大きく目を見開いて、一度は離した視線を再び炎の守護聖に向ける。
オスカーは、濁った瞳を水の守護聖の顔の上に固定したまま、言葉を継いだ。

「……なあ、俺は何か悪い事をしたのか？」

水の守護聖は、押さえつけられて動かない顔を、必死になって左右に振ろうとした。

いいえ。いいえ。
私は罪を犯して、貴方を愛したけれど。
貴方は何も悪くない。
いつだって鮮烈に、真っ直ぐに、前だけを見据えて強く輝かしく生きている。

「だったら、何故これほどまでに俺が苦しまなければならない？」

答えるべき言葉が見つからなかった。

「……だから、これはお前の罪だ。」

——私の罪。

口を塞いでいた掌を離されても、上肢を戒めていた手を放されても。
それが無造作にロープを手繰り上げて、素肌の上を滑っても。
身体の震えは大きくなりながらも、突きつけられた事実のあまりの衝撃の大きさに、声一つ上げられず、指一本動かすことが出来なかった。

「俺をこれほどまでに苦しめ苛む、お前の——お前の罪だ。……そうだろう？」

——私の罪。

……そうだ。私は咎人(とがびと)なのだ。
抱いてはならぬ感情を想ってはならぬ相手に抱いた罪を背負った咎人なのだ、と。

そう考える思考とは別の所で、躯の上を這い回る指に得体の知れない恐怖を覚える。歯の根が合わなくなる。

……ああ。目の前に暗く澱んだ冷たい蒼い冬の海が広がる。
波はその高さを増して、大きく、大きく膨れあがって、私の上に落ちかかろうとして――
躯を開かされ、足を折りたたまれて。
私は罪を犯したのだから。
……それでも。それでも。
こんな風に抱かれたいわけではなかった。
嫌、と叫んだ悲鳴は、再びリュミエールの口を塞いだオスカーの掌に吸い込まれた。
次の瞬間、全身を激痛が走った。

……それが愛であっても憎であっても、どちらでも良かったのだ。

痛みに動かない躯に鞭打って、緩慢に身を起こし、のろのろとした動作で乱れた服を整えた。
ボタン。椅子。テーブル。ソファ。天井。窓。
目に映るもの全てがまるきりばらばらの奇妙なサイズに見え、まるで自分に襲い掛かろうとして――。

手を付きながら立ち上がり、引き攣れた足をがくがく震わせて、壁に縋って、執務室の方へと出て行った人の後を追う。

緋色の髪の人は、執務机の上の書類を覚めた目で眺めていた。
炎の守護聖らしく端正に整えられた、まるで普段と変わらない日常の、何事も無かったかのような、姿。
書類を手に取って、背を向けた。

「……オスカー」

去り行こうとするその背中を、弱く擦れた震える声で、再び引き留めた。

炎の守護聖の歩みは止まらない。

どうしても訊いておかなければならない事があった。

「……どうして、……私を抱いたのですか」

扉に手をかけたところで、炎の守護聖の動きが止まった。

壁に縋ったまま、震える身体の、胸元に白い手を置いて、強く強く握り締めた。

「それは、憎悪なのですか、それとも、……愛情なのですか」

どうしても訊いておかなければならないと思った。

……でも。でも。

それが愛であっても、憎であっても。
どちらでも良かったのだ。
そのどちらであっても、私はあの人から与えられたそれを大事に大事に抱いて、生きていけたのだ。

扉を薄く開いてから、炎の守護聖は振り返った。
何の感情をも伺わせない目で。

「……何の事だ？」

水の守護聖の目が、大きく見開かれた。

……私が生きるためには、絶対に彼が必要だった。

扉の閉まる音と同時に。
リュミエールは、世界の弾ける音を聞いた。

目の前に映る草木も花も、そこから全ての生命感が抜け出でて、
慣れ親しんだはずの宮殿は山のように膨れ上がり、私を押し潰そうとして、
背後に広がる大地は何処までも果てしなく続き、その上には、見渡す限りまで、

……嗚呼、累々と私の罪が横たわる。

……私が生きるためには、絶対に彼が必要だった。
それが正の方向であれ、負の方向であれ。

けれども、そのどちらの意味に於いても。
けれども彼には、私は必要でないのだと。

けれども彼には、――

けれども彼には、私は必要でないのだと、私は充分すぎるほどその事を知っていました。
なぜかその事に関してだけは、私がこうなる前から、ずっとずっと前から知っていた事のような気がします。
私が生きるためには、彼が絶対に必要であり、そして彼には、私が必要でないのなら。
何を迷うことがあるでしょう？
私は彼を、罪を犯した私をこれほどまでにも暖かく生かしてくれるただひとりのひとである彼を、縛りつける軛（くびき）に成る事など望んでいなかったのですから。
少しも恐くはありませんでした。

丁度その頃、彼が炎の守護聖として惑星の視察を命じられることがあり、噂に聞き知ったところによると、彼自身は私の身を案じてか、酷くその計画に反対し、またそういう状況の彼に視察を申し付けた事を、彼自身が敬愛して止まぬ光の守護聖に何度も抗議したそうですが、しかし流動を続ける宇宙の情勢が、守護聖であるとはいえ唯一個人の状況を鑑みてくれる筈も無く、他ならぬ炎の守護聖の助力を求める幾百幾万もの尊い命を見捨てることが彼に出来る訳も無く、私に何度も何度も謝罪の言葉を重ねて（彼に感謝こそすれ、彼の謝罪を受けるようなことなど、本当は何もなかったのですが）、彼は視察に出る事になったのです。

私はその、彼が視察に出る数日前から出立ぎりぎりの時間まで、何時もよりも長く傍に居てくれるようにと彼に甘え、彼と共に在ってこれまでに無く落ち着きを見せる私に、彼はいくらか安堵したようで、また私はというと、彼からそうやって何時もより長く多く与えられた暖かい生命感が、私の計画を成し遂げるだけの時間の間持続する分だけ有ればそれでよかったのです。

彼が聖地を立ち去り、完全にその気配が消えてから、私は昔から私だけが密かに馴染み知っていた、森の奥の小さな泉へ向かいました。

森の梢は鳥や虫や、種々の生命を育み、木漏れ日は暖かく大地に降り注ぎ、泉は清浄な光を湛えて私を迎え入れてくれました。

なんと世界は、涙の出るほどに美しいのでしょう。

何時もはただ見過ごしていた日常の、細やかなそれらが、どれほどに暖かく、優しく、美しく、

宝石よりも貴重な存在たちであったか、それは私がこの病を得て、生命感の欠失した翳い空虚な世界を体験してから初めて理解しえたことであるという事実を考えると、私はこれほどまでに世界の暖かさを教えてくれたこの病に感謝さえしたい気持ちになりました。

そして彼の事を想いました。ただひとり、私を暖かい世界へと導き、生かしてくれた彼を。

何を恐れることがあるでしょう?

私の身には、つい先ほどまで触れ合えるほどに傍近くにいた彼の、暖かい気配が満ち満ちているのですから。

その気配は、私の罪をもさえ、果てしないほど人間的で愛おしい物に変えてくれたのですから。

そしてこの気配を抱いたまま、暖かい気持ちで世界を去る事が出来るのならば、これほどの喜びは有るでしょうか?

泉の冷たい水の中へ、私は足を踏み入れました。幾つもの生命を育む、清く澄むこの泉を今から汚すのかと思うと、少し良心が痛みましたが、しかしまたそれほどまでに何処までも生命を受け入れる泉に、私も溶けてけゆけるのだと考え、暖かい喜びを感じたのもまた事実でした。

確実に計画が遂行されるよう、深く刃を立てた手首の傷口は酷く痛みましたが、その痛みさえ、私が生命感に満ちたこの暖かい世界に生きているということの紛れもない証であり、どうしようもなく暖かく愛しく思える痛みでした。

赤い血がぽたぽたと水の中へ落ちると、それは斑点のように透明な水の中へ滲み広がり、幾つもの模様を形成するに到って、ああ彼の気配が私の傍から失われつつあるために私の内で再びあの病が力を得ているのだと気がつきましたが、しかしもう、充分すぎるほどに時は過ぎ去り、かつまた

近づいていました。
そのまま私は水の中へ身を躍らせ、
水の中へ、暖かく私を迎えてくれる世界の中へ溶けて、――――

だからどうやって私が助かったのか、私自身は全く覚えていないのです。

後から知ったことですが、彼は聖地を去って程なく、嫌な予感がするからと予定を全て切り上げて帰還し、私が外出したという話を聞くと、真っ直ぐに私の溶け込んだ泉へと来たそうです。
私以外、だれ一人として知る事の無い筈の泉を、どうして彼は知っていたのでしょうか？

とにかく気がついた時には、医療部のベッドに横たわる私を、酷く憔悴した様子の彼が、あの綺麗な氷青色の瞳で覗き込んでいました。

彼が傍に在ることで、私の病は再びその身を潜め、暖かい気配が私の中へ流れ込むのを感じました。生命力を得て起き上がった私に、彼は一瞬強い瞳を向けると、私の頬をその大きな平手でしたたかに打ちました。目の前に閃光が弾け飛ぶほど強い痛みを感じましたが、その痛みこそが、何よりも私が人間味に溢れた暖かい世界に生きていることの証拠でしたので、私はとても嬉しくなって

微笑みました。
何かをかみ締めるような表情の彼の、強くシーツを掴んでいた手が急に私のほうへ伸ばされ、身体が折れるかと思うほどに抱き竦められました。先ほどの殴打と同じくらいにとても痛かったのですが、やはりそれも私がこの暖かい世界に包まれていることの何よりの証でしたので、私はまた微笑みが湧き上がってくるのを抑えることが出来ませんでした。

……強さを司る自分が、自分自身の弱さに引き摺られた時、どんな破滅を引き起こすか。
何故、それを背負うのが、他ならぬこの水の守護聖でなければならなかった？

ずっと見ていた。
気が遠くなるかと思うほどに、優しく、暖かく、綺麗な笑顔を。心を。
だから何でも知っていた。
どんな風に笑うか。どんなものが好きか。どんな風に執務をこなし、どんな風に発言し、どう考えて、どのようにサクリアを送るか。
休日にどんなところへ行き、何をしているか——何でも知っていた。
俺だけに向けられる、強さを伴った深い瞳も、知っていた。

心が締め付けられるほど、
誰よりも優しくて、
誰よりも暖かくて、
誰よりも綺麗なひとが、
手を伸ばせば、すぐ届くところに居るのに、
どうして正気でいられるだろうか？

……そのときに生まれるのは、愛情か、憎悪か。

それすら、どちらでも良かったのだ。

俺は、何もかも知っていたのだ。

ただ、それを認める強さを、持てなかった。

それが俺の罪。

屈んだ姿勢で強く強く私の身体を抱き締めていた彼の身体が、膝から力が萎えたようにずるずるとベッドの脇に沈みました。緋色の髪はベッドの縁に伏せられ、力強い手は何かに縋るようにシーツを掴み、広く逞しい身体は寒さに襲われたかのように酷く震えていました。

何かに酷く打ちひしがれたような、その彼の様子があまりに痛々しく、しかし私にはその理由が一向にわからず、ただ彼を慰めようと伸ばした私の手を彼の手が掴み、その綺麗な蒼い視線はじっと包帯の巻かれた私の手首に注がれました。

こんなものは何でもないのだと。

これこそが、貴方のくれた溢れるほどの生命感の証なのだと。

私の犯した罪を贖ってくれる赦しなのだと。

そういう想いを込めて、私は彼に向けて微笑み、そっと彼の緋色の髪を両手で包みました。

蹲(うずくま)ったまま、私の背に回された彼の手は小刻みに揺れ、彼の身体ごと音を立てそうなほどに大きく震えだし、私の身体を強く強く抱き締めて、そのまま——

……俺の犯した罪を、

俺の罪を、

お前が、全て背負った――――!!

……そのまま、私の身体に縋るようにして、火の付いたように泣き出した彼を、それほどまでに苛んだ原因が何なのか――私には一向に判りませんでした。
どちらの答でもお前はきっと俺を許したのだろう
お前は俺を許さなくても良かったのだ
お前を傷つけた俺を許さずに生きてくれればそれで良かったのだ
だからどちらも選べなかった
しゃくりあげながら涙混じりの激しい声で彼から告げられる、懺悔の告白のようなそれらの言葉も、そして何度も何度も繰り返される許してくれという言葉も、私にはどれ一つとしてその意味を正しく捉えることが出来ませんでした。

ただ彼を、私にとっての大事な大事な彼を慰めたいと思いましたので、
泣かなくていいのだと、
貴方が泣かなければならないような事など、何も無いのだと、
貴方を哀しませるような事など、何一つ無いのだと、
貴方が微笑って、明るく強く生きてくれることこそが、何よりも強く私の望むものなのだから、
だから泣かないでと、
そう告げる私の言葉がなおいっそう彼の涙を煽っているようで、彼の涙は止む所を知らないかのように激しく続きました。
これほどまでに彼を泣き咽びさせ、何よりも大事な彼を哀しませてしまうのは、きっと私が犯した罪に対する罰なのだろうと、私は哀しみと共にそう感じました。
それから彼は何か、激しい感情のこもった、何かとても大事な言葉であるような言葉を私に告げてくれましたが、私にはその、とても貴重そうなその言葉の意味を理解することが出来ませんでした。
それもきっと、私の罪の所為。
それは彼にも伝わったようで、彼は再びその表情を強く歪め、力の限り私を抱き竦めると、綺麗な氷青色の瞳から新たに生まれた同じ色の涙と共に、繰り返し繰り返し、私の中に刻み込むように何度もその言葉を口にしました。
……ている、
……ている、

お前を……ている、
……ている、
……ている、
と。
何度も、いつまでも。
永遠に続くかのように。

医師との面会を終えたオスカーは、宮殿を背にして歩き出した。
森の中の落ち葉を踏み、草原の青草を踏み、歩いた先には――。

少し離れた、小高い丘の上の人影。
こちらに背を向けて。
強い風にはためく、白いショール。

自分の紅い髪の、見たはずの無い既視感をその人の後姿に重ねた。

「……リュミエール」
ゆっくり近づいて、自分の肩から外したマントを掛けた。
「何度も言っているだろう、こんなところにずっと立っていたら風邪を引くと」
その言葉に、ゆっくりと淡い水色の姿が振り返る。
それから、その面に、静かな微笑を浮かべた。
「……ここに来たら、必ず、――貴方に逢えるような気がして……」
しばらく、そのままお互いに見つめあった。
それからオスカーは、ゆっくりとリュミエールの身体に手を回した。リュミエールは背中をオスカーの胸に当てるように凭れ、再び地平線の方へと目を向けた。
聖地の日は傾き、風景が徐々に黄昏の色に染まっていく。
「……何を見ている」
オスカーが訊いた。
リュミエールは数瞬の無言を重ねた後、穏やかに口を開いた。
「…何処までも果てしなく続く大地と、その上に、累々と――横たわる……」
「横たわる？」
「……」
リュミエールは両手を広げながら、前へと差し出した。その姿は何かを悼んで花を捧げる仕草に似ている。
強い風が吹いて、見えない花弁が朱い空へ舞い散った。

投薬を中心とした治療によって、リュミエールの病はある程度改善された。
しかしいまだにリュミエールの大部分は、自分の手の届かない世界の中にある。

オスカーは、先ほどの医師との会話を思い出した。

（急性に発症した場合のこの疾患の経過は2通りで、まず1つは発症時と同様にその治癒も急速になされるもの。この場合、ほとんど後遺症を残さずに完全寛解となります。それからもう1つは、経過が長引くもので――この場合、疾患は慢性化することが多いです）
（薬物療法、作業療法などによって症状は改善されますが、この疾患の予後は、必ずしも良いものだとは――限りません。……ただ）
（ただ、まだ薬物療法も何も無かった、いわばこの疾患の暗黒の時代の、ある症例の報告として、患者と心理的にとても近しい関係にある人物の継続的な精神的サポートが、この疾患を完全寛解に導いたという報告があります）
（この症例報告に対して、疑問を投げかける専門家も多いですが、私は――信じたいと、そう思っています）

「……そろそろ帰ろう、リュミエール」
オスカーはリュミエールの身体に回したままの手に、少しだけ力を入れた。リュミエールは逆らわずに身体の向きを変える。
朱い夕日に照らされながら、共に歩みだして数歩歩いたところで、オスカーの足が止まった。
「リュミエール」
無言のままに、リュミエールが深海色の瞳を向けてくる。
「俺が生きるためには、お前が絶対に必要なんだ。……今まで一度も、言ったことは無かったけれど。」
リュミエールの目が、驚きの表情に見開かれた。
「だから生きていてくれ。俺のために。」

……そう。
生きてさえいれば、きっとこの想いが届く日が来る。
こうして二人、共に在れるのだから。

「リュミエール」

……ている、と。

こうやって、名を呼ばれた後に続くその言葉を、私はもう何度も彼から告げてもらいました。

未だにその意味は判りません。

けれどもその言葉に込められた、とても激しく、同時に優しく、暖かい感情は、日を追うごとに私の身へと近づき、染み渡ってきているような気がします。

だからそういう時、私の顔からは、抑えようとしても抑えきれないほどの微笑が零れるのです。

彼もまた、嬉しそうに微笑み、私の肩を暖かく抱いてくれます。

私たちは、共に歩みながら、朱く朱く照らされた、その場を後にしました。

彼がこうやって、私の傍に居てくれる、それが少しずつ、私の罪を浄化してゆきます。

そしていつの日か、私の罪が許される時が来たならば。

この暖かい言葉の意味も、きっとその時に判るような気がするのです。

とけあう恋

薄く紅をひいたような色みを帯びた白い脚が、オスカーの目の前で、長い裾を持つ純白の服に覆われている。

オスカーはゆっくりと身をかがめて右手で僅かにその裾をからげ、左手をリュミエールの右の足首に添えて軽く力を込め、露にした内側の踝（くるぶし）の上へ、もう幾度目になるかわからない口づけを落とした。

「……本当に綺麗だな」

優雅な下腿のラインをオスカーの指が辿って布地の下へ忍び込み、膝の裏の窪みへと回って膝を立てさせようとすると、一瞬浮いた服の下の白い脚はオスカーの手の動きを遮るように傾き倒れた。

「恥ずかしいか？」

仕方なく脚から手を離し、両腕を添えて上半身を起こさせ軽く抱き締めると、素直にオスカーに身を任せて凭れ掛かる、その柔らかな躯が愛おしい。

そのままオスカーは、リュミエールの躯を横抱きに抱え込むようにして腕の中へ収めた。オスカーの脚の上へ乗り上げる形になったリュミエールの両脚の、覆う裾を膝までたくし上げてから、オスカーの指が白い脚を行き来して愛撫する。

リュミエールはされるがままに、逆らわなかった。

愛しくて。
ただ愛おしくて仕方がない。

心の底から込み上げるような高い温度を持った想いのままに、オスカーはリュミエールの躯を力の限りに抱き締め、艶やかな青銀の髪の上に強く唇を押し当てた。
甘い香りが辺りに漂う。
痛いほどに抱き竦められても、文句ひとつ言わない水の守護聖にオスカーの想いは一層つのる。
流石に少し可哀想になって、オスカーは腕の力を少し緩めた。安堵したようにリュミエールの躯が僅かに傾いで、炎の守護聖の片腕にその身を任せる。
さらさらと自分の腕の上へ流れ落ちた青銀の髪の流れの上へ、オスカーのもう片手が伸びてきて優しく撫ぜた。

「なぁ、俺たち、喧嘩ばかりしていたよな……」

今となっては古い過去を思い出したのか、炎の守護聖がくつくつと小さく笑った。オスカーの腕の中のリュミエールの、その表情は僅かな微笑を湛えたまま変わらない。

「あの日も……そう、お前が出る前に一騒動やらかしてさ」

水の守護聖が聖地の時間で1週間、視察に出ることになっていたその出発日、早朝から始まった水の守護聖と炎の守護聖の論争は、結局視察団一行の出立の時間まで延々と続けられていたのだった。

憤然とした表情のオスカーと、少し哀しげな表情を見せるリュミエールとの間で、シャトルの扉は閉じられた。

「でも多分、俺はお前がずっと好きだった。」

事あるごとに反発した心は、どうしようもなく惹かれていく綺麗な人への心の裏返しで。

口を突いて出る刺々しい言葉は、伝えたくて伝えられない押さえきれない想いを綴る言葉と同等で。

「……好きだ」

だから今は、惜しげも無く何度も、何度も繰り返し繰り返して想いを告げる。

「愛しているよ。」

白くて細い脚の一方をオスカーは手に取り、少し持ち上げて頬を摺り寄せた。
炎の守護聖の、その少し高めの体温に、ひんやりとしたさらさらの肌の感触が心地良かった。

「愛している。……永遠に」

炎の守護聖の言葉は、固い金属の壁に当たり跳ね返って、暗く閉ざされた冷たい部屋の中に木霊した。

……本当は。
哀しげな色を湛えた瞳など、……それも甚だ綺麗な表情ではあったのだけれど。
そんなものが見たいわけではなかったのだ。
ほんの時折目にしていた、春の陽の光を一身に浴びたような暖かい微笑を、ずっとずっと……いつもどんな時も、見せていてほしかったのだ。
……俺がそんな微笑を与えてやって、与えられて、そして何時までも護っていきたかったのだ。

……帰ってきたら。
あいつが帰ってきたら、今度こそは間違うまいと。もう二度と哀しい表情はさせまいと。

この胸の奥から込み上げる、熱く迸る想いを……愛していると、そう告げようと。

そう決めて、水の守護聖が帰ってきた時に、想いと共に手渡すはずの贈り物を選んでいた時、報せは炎の守護聖のもとへ伝えられた。

オスカーの手の中から滑り落ちた硝子細工は、地に落ちて粉々に砕けた。

女王府に対して反乱を起こしたその組織は、その規模も活動もとてもささやかなもので……怒りに猛り狂った炎の守護聖に、それこそ蜘蛛の子を散らすようにあっさりと壊滅されたのだけれども。それでも、シャトルに修復不可能な損傷を与えるには、充分だったのだ。

オスカーはリュミエールの両瞼を開いた。

瞳の深海の色は、白い霞みの向こうにあって判然としない。

「……可哀想に。これではよく見えないだろう」

オスカーの舌がリュミエールの霞んだ目をぺろりと舐めた。

幾度となく繰り返された行為は、濁った角膜をすり切れさせ、再び深い海の瞳の色を露にさせ始

めていた。
炎の守護聖の手が、ひとりでには閉じない水の守護聖の瞼を優しく下ろした。

空気の注入されたシャトルのこの冷たい金属の部屋の中で発見されたのは、折れ重なるように倒れていた幾人かの随行員と、眠るように静かに横たわった、純白の衣装の水の守護聖。
その白い躯の前に膝を突いて、俯いたまま動かない、救援隊に先発した炎の守護聖の姿――その掌は、水の守護聖の裾のたくし上げられた右の大腿の内側に置かれたままで止まっていた。

どこか離れた場所の、しかし換気の繋がった所で火災が起こったのか……亡くなった随行員の死因所見から、水の守護聖のそれも一酸化炭素中毒と推定された。仄かな紅みを残す身体。
リュミエール本人の所見は取れなかった。炎の守護聖がその躯を手放そうとしなかったので。

仕方なしに丸ごと回収された半壊状態のシャトルは、今は聖地の片隅にひっそりと置かれている。

オスカーは再びリュミエールの脚に指を這わせ始めた。
膝から上へとあがっていく指は、何度も繰り返された道筋を通ってなめらかな曲線をゆっくり辿り、やがて右脚の、付け根に近いその内側で止まった。

急いで退避して隔壁を閉じ……それでも逃れようの無い運命をまざまざと突きつけられたこの部屋には、冷たい壁と床しかなく。
伝えなければならないことを書き残す紙も筆記用具も、何も無かったのだ。

水の守護聖の手元にあったのは、常に持ち歩いていた小さな懐剣だけで。
争いには最後まで役に立たなかったそれを、水の守護聖は別の手段に使った。

何者であったかもわからなかったであろう敵方に先に発見されることを恐れてか、ゆったりとした袖の中に隠されていた白い左腕には、聖地に残した人々への連絡事項が血の滲んだ鋭い掻き傷でびっしりと刻まれていた。

……なあ、リュミエール。
なんだか皆、揃って、泣いて泣いて……オリヴィエなんか、俺たちの足元で壊れるかと思うほどに大泣きしてたよな。
馬鹿だよな……泣かなければならないような事なんて、何も無いのに。

オスカーの手が、右の脚、その付け根にほど近い内側を愛おしげに何度も撫で擦る。
それから、節の目立つ指がそこに並んでいる赤い文字をゆっくり辿った。

逼塞した状況の中、咄嗟に取った行動は、伝えたかったのか……それとも知られたくなかったのか。
半ば隠されたような位置に残された、文字の列。

『オスカーへ――愛していました』

オスカーの視線は、白い肌に刻まれたその文字をしばらく見詰め続けた後、静かに伏せられた。
祈りを捧げるように、身を屈めてその文字に唇を寄せる。

「……俺も、愛しているよ――リュミエール。」

口の中に滲む、もう僅かになってしまった血の味は、錆びた鉄の味。
そして漂う血の匂いは、仄かに甘い。

ゆっくり横たえた水の守護聖の……「元」水の守護聖になってしまったその躯の上へ、オスカーは覆い被さった。
燃え尽きる直前の、炎の守護聖の普段より高い体温が、冷たい床の上に横たわった躯を温める。

「ひとつに溶け合おう。……もう、二度と離れたりしないから。」

意識は、先に逝ってしまったひとと同じところへ行って。
残された物は、どちらがどちらともわからないほどに重なり溶け合って。
過去も未来もなく。
ただ、愛しているから。

「……愛しているよ。」

一切のものを遮断する扉は、もう二度と開かれることはない。

そうして消えてゆくサクリアの気配と、新たな守護聖の出現とが。
炎の守護聖の最後の望みが叶った事を、静かに外へと伝えるだろう。

3倍返し

「ようこそいらっしゃいませ、リュミエール様」
「こんばんはーごきげんようです～、ごはんは食べてきましたー。ちょっと一晩オスカーの部屋をお借りしますね。」
「どうぞごゆっくりお過ごし下さいませ。御用があれば何なりとお申し付けください。」
ナイトキャップにパジャマ姿、小脇には持参の枕…ではないものの、それに比類する気安さで炎の館に現れた軽装の水の守護聖は、だが相変わらず惚れ惚れとするほど美しかった。廊下を歩み去るすらりとした後姿に向けて、薄く笑みを浮かべ頭を下げる執事の背後で、居合わせたメイド達が手を取り合ってきゃっきゃと小声で盛り上がっている。

事の初めの経緯は彼らにも良く判らないものの、ある時期を境に。
館の中ではてろってろに甘い顔を見せて水の守護聖を抱き締めたりキスしたり、時にはそれ以上の事に所構わず及ぼうとするようになった、彼らの主人の変貌に。
事態は容易に館中へ知れ渡り、水の守護聖も私邸の中だけとはいえ恋人のあまりにあからさまに過ぎるそれらに、当初は躊躇いやら戸惑いやら、時には軽い抗議もしたようだが――なにぶんにも館の者全員が明らかに見て取れるほどのオスカーのその溺愛振りに、水の守護聖もやがて諦め、あ

る意味鮮やかとも思えるほど綺麗に開き直ってこの館に馴染んだ。今ではもはや館の隅々まで勝手知ったる、である。

彼らの主は現在、またもやの惑星の視察中で不在だが、そこにこそ館の彼ら彼女らが水の守護聖の来訪に、そこはかとなく浮き立ち盛り上がる訳がある。

炎の守護聖と共に過ごす時間以外にも、こうやって不在の際に炎の館へ姿を見せる水の守護聖。恋人に心を尽くすべく、部屋を彩る植物、花々、淡い聖地の四季に合わせた室内の設え、疲れて戻ってくるであろうひとを、温かく迎えられるように。館の者の手を借りて、あれやこれやと考えを巡らしつつ微笑む水の守護聖の、その想いの尊さと幸福とが匂い立つような美しさと言ったら、他に喩えようがなく。

あるいはまた、遥かな地にいる人の身を思い遣り、憂いに遠くを見詰め、艶やかな唇から溜息を漏らすその姿。翳を淡く帯びたその姿も、芸術のごとく嘆息するほどで。

彼らの見ていない所でこの水の守護聖にさんざっぱら思うままのことをし倒しているであろう主に、成り代わろうなどと夢にも思いはしないが、主不在時の水の守護聖の得も言われぬこの姿だけは自分たちだけの秘密にしておこうと、内々で密かなる暗黙の協定が結ばれている程だった。

で、そんな館の者たちには悪いけれども、今晩水の守護聖が炎の館を訪れたのは、心尽くしのためでも溜息つくためでもない。端的に言うなら、炎の守護聖のためですらない。

「ふっふふー。うーふーふー。」

のびー、と。
「んー！」
外出用の上掛けを既に脱いで、照明の大半は落としてベッドサイドの灯りのみ、すっかり寝姿の薄手のローブ1枚で、この上なく晴れ晴れしい顔をして、だだっ広いベッドの上で四肢を子供のごとく思い切り伸ばすその姿。
「一度でいいから、このベッドでのびのび寝てみたかったんですよねー」
そう呟くと体勢を変え、ベッドヘッドの落ち着いた色々のクッションの群れに、ぼふー、と顔から突っ込む。遠慮する相手はいない、今晩なら。洗い立てのカバーの匂いと淡い香り付けの薔薇の芳香がした。
オスカーの身長が相当に高いので、標準サイズを最初から遥かに超えた長さの、それから横幅だって相当にあるベッド、いくら男二人でも普通に寝るには充分な広さがある。普通に寝るなら。
問題は、物理的な広さではなかった。
再びごろんと仰向いて、両手両足を脱力させ、普段はそれらを伸ばせない原因たるその人に思いを馳せる。
あの腕、あの手。あの脚。あの瞳。触れ合う肌から伝わるその暖かさ、熱さ。
このベッドで寝る時はいつも——すなわちオスカーと共にこのベッドに居る時はいつも、リュミエールの身体はオスカーのその両手両足にしっかりと絡め取られたままだった。いつでも、夜でも

朝でも、寝ても覚めても。だから未だかつて一度も、リュミエールはこのベッドで手足を伸ばして眠ったことがなかった。
それが彼の真摯な愛情の証だと重々承知していて、もちろん幸せだと思うし、辞めてほしいなどとは毛頭思わない。
だが守護聖だとて、人の子。
水の守護聖様だって寝るのもおふとんも大好きで、ほんのりとした恨みがましい気持ちがあったのは確か。水の自邸の寝台より一回り大きいここで一度のんびりしたいと思っていて、今回の視察なら特に気を揉むような心掛かりの要因もなく、だからこそこの度の主の不在時に、こうやって訪れている。
（それにしても……）
のびのび、を満喫しながら、時々ひどく不思議に思う事をまた思い返す。
眠っているのに、しかもこれもまた軍人らしいというのか、自室で恋人の自分と共に有って気を許している時間にはこれ以上ないというほど熟睡しているのに、どうして自分を一時すらも離さずにいられるのか。
一心に自分へ注がれるあの尽きることのない彼の愛情は、どこから湧いて出てくるのか。
自分が彼のただ一人の相手であるという事が、何かの間違いではないかと未だにふと思う事がある。
『愛してる』
二人で穏やかに寄り添って過ごす時間の、甘い笑顔が嬉しそうにそう告げる姿。

『愛してる……』
切羽詰まったように、半ば苦しげに耳元で囁く声。もっともそんな時はたいていベッドの上で、たいてい自分の方が遥かに彼より、彼に追い詰められて、彼の腕の中で喘いでいるのだけど。
（えっと）
ほんのり顔が赤らむのを自覚し、意識を振り払って、ごろりと横を向き手近なクッションを手に取る。今日は思う存分くつろぎに来たのだ、伸びようが丸まって転がろうが自分の自由、今日なら抱き締める相手がオスカーでなくてクッションでも許される。えい、とばかりに、ぎゅむーと抱き込んだ。
（あ）
その瞬間、胸に刺し込む、衝撃にも似たもの。
カバーは全て洗い立てで清潔この上なく、中身も良く天日に干されていて、それでも抱き締めた瞬間、確かに薫った。オスカーの匂い。伊達男の香水でなく、その生命力が彷彿とするような、獣にも似た彼自身の。
クッションに顔を埋めたまま、大きく、溜息が出た。匂いは恐ろしいまでに直感的に、その人の存在を体の芯へ思い起こさせる。
……好きなんだなぁ、と思った。改めて。彼の事が。
その匂いを初めて知ったのは、想いを告げられ抱き締めてきた彼の腕の中でだった。その身体から直接に伝わる圧倒的な熱量と、ただの一人の人間であることを自分に改めて突き付けてくる、初めて知る彼のその生身の匂いに強い眩暈を覚えながら、オスカーの身体が小刻みに震えていた事を

今でも覚えている。そういう自分だって間違いなく震えていたのだろうけど。
いい匂いだな、と思った時点で、拒絶する選択はもはや残されていなかった。その匂いのする素肌の腕の中で愛撫にまみれて溺れるまでにもさして時間は掛からなかった。
あまりにも簡単に落ちた自分自身に、一時の気紛れだったと飽き捨てられ、さっさと他所に移られても仕方ない、とふと思ったこともあるけれど、今のところ彼の情愛が自分に対して尽きる気配は一向に見られない。
「尚更お前のことが好きになるので手一杯」だそうだ。彼曰く。「どうしてくれる」とも。

そう言うならばこちらにだって、ひとつ、「どうしてくれる」という気持ちのようなものがある。
好きというそれまでただの透明だった想いを、何も知らなかった自分へ、その身体の匂いで、その指先が全身に施す愛撫で、重なり滑る唇と舌で、そして自分の秘部の中へ深く深く侵食し、感じさせ、翻弄してくる熱いもので、紛れもない快楽としてべったりと上書きされてしまったことだ。
好き、人を愛するというのはただそれだけでいいと思っていたのに、こうやって彼を想うこと、それが今ではこの躯の、時に切ない、時にもどかしい感覚に直結するようになってしまった。
横向きに寝転がったまま、クッションを抱き締める手を離し、躊躇いながら、その手を薄い布越し、自分の腕に、それから…腰に滑らせた。彼が自分にそうするように。ぞくりとする。
…酷い。オスカーの馬鹿。こんなことを自分の躯に教え込んだのはあの人だ。
「お前、自分の躯が普通じゃないって自覚した方がいい…」
いつもは冴え冴えと煌めくアイスブルーの瞳が、呆とした目付きで、耳元へ顔を寄せ、熱っぽい

吐息とともにそんな言葉を吹き込まれた。以前。よりによって、挿れられている時に。身の裡から広がり全身を覆い続ける快感の中、霞む思考で言われていることの意味が判らずにいたら、彼は繋がったまま上半身を起こした。中に響くその動きにも思わず声が出そうになったけれど、その大きな手で触れるか触れないかというほど微かに腰から胸元を撫で上げられ、屹立する自分の熱いものに指が這い、滴る先端を撫で、その濡れた指が胸のほんの先端を滑らせた。度を越した快感が声にならない艶声と悲鳴になって空気を揺らし、彼が押し入っている箇所の粘膜が蠢いて、その人も小さく呻いた。

「…恐ろしく繊細で敏感で、感じやすい躯。」

続けて言われた言葉のその後はもはや記憶が曖昧だったので、そこで一人ベッドの上で寝転ぶ現実に立ち返った。

私のせいじゃない。すべて貴方が私に教えたこと。だいたい普通じゃないって、そうだとしても、それを知ってどうなると言うの。熱を帯びるこの躯と、触れなくても判る、充血して熱いこれとを、貴方の居ない間に持て余すだけなのに。

もし仮に面と向かって彼にそう言えば、彼は心の底から歓喜し、喜々として触ってくるのだろうなぁと思った。

「……」

……こんな風に？

留めようのない手が恐る恐るローブの裾をたくし、下着の中で張り詰めるそれへ忍び込む。触れて、思わず吐息が出た。

彼の熱がどこにも無いのが寂しい。もう片手は自然と、躯に、唇に這う。
「……あ、」
屹立を探る指が先端の滴りに触れ、躯に痺れが走った。唇にも、そして胸先にも。どうしようもなく恥ずかしいけれど、指先はそのまま無意識に滑りを辿り続ける。密やかに濡れた音が聴こえて、それに尚更いたたまれなくなった。
羞恥にベッドへ顔を埋めたら、再度オスカーの残り香が立ち込め、ぞくりとした背筋を軽く仰け反らせた。
「オスカー……」
心だけでなく、躯までもがこんなにも絡め取られてしまった、その恨み言ももう意識の外だった。
好き。好き。逢いたい。

急激に長躯に伸し掛られて口を掌で塞がれ、唐突な他人の存在に全身総毛立った。反射的に身悶えて、大きな手で強引に塞がれた口から悲鳴が迸りそうになる。
「俺だ、リュミエール。落ち着け。」
だが直後に耳に入ったその言葉に、死ぬほど心臓が飛び跳ねたものの、覆われたままの掌の下で辛うじて声は抑えることができた。眩暈う視界の中に映る、紛れもない緋い髪。それからようと視線の焦点が合って、見えたのは、自分の上で隠しきれない笑みを作る氷色の瞳。
ゆっくりと口を塞いでいた手が離れ、
「……オスカー？」

身体は組み敷かれたまま、その姿はどう見ても見間違えようがないのだけど、小さく問うたら、さも可愛いと言いたげに彼の笑みが深くなった。
「ただいま、リュミエール。帰って早々、最高の出迎えをありがとう。」
笑いながらさらりとそう告げてくる言葉に、先程までの自分の媚態を否応なしに思い出させられた。
頭に血が登った。幾分かの逆上混じりで。
長々しい沈黙の後、
「……ひとまず、一旦、避けてもらえますか。」
「はいはい」
文節をひとつひとつ区切りながらそう告げたら、その程度の反応は想定済みだったのだろう、ぞんざいな返事とともに身を起こしてベッドの脇に立つ。旅装はすっかり解かれて普段の軽装に戻っており、自分がローブの裾を整えながら緩慢にベッドの上で身を起こす様子を、その端麗な顔立ちでにやにやと笑って見下ろしている。
どんな反応が自分から発せられるのか、明らかに楽しんでいる様子だった。激しい羞恥と沸き起こる怒りに身体が震え、火照る顔を伏せて彼から視線を逸らす。
「……無事のお早いご帰還、大変重畳です。お疲れ様でした。私も、大変、嬉しいです。が…、……ご自室に忍んで入るようなことを、なさらなくてもいいのでは？」
「恋人が眠ってるかもしれない所を、騒ぎ立てて押し入るほど野暮じゃないさ」
ただそれだけで、どこまでも徹底的に気配を消してしまえるのだ。軍人というものは。…いや、

この人は。
　自分が訪れてきて既に寝室に入ったと知ってからは、廊下ひとつ歩くのにも音を立てないよう気遣ってくれたのだろうな、という想像に心が緩むが、溢れる怒りを未だ鎮めるには残念ながら至らない。
「吃驚しました。本当に。心底。死ぬかと思いました。あんな拘束などなさらなくても、普通にお声掛けして頂ければ…良かったのに。」
「普通に俺が声掛けして、リュミエール、で、お前が、きゃー、とか大声上げて、」
　きゃーとは何ですか。きゃーとは。不本意。
「何事かとやって来た使用人たちに、お前の乱れた姿を見せるのはもったいなさ過ぎたからな。」
　乱れた姿……。
　俯いたまま、顔をより一層火照らせながら、リュミエールは最後の質問をした。
「……いつから、ご覧になっていたのですか。」
「そうだなぁ、のびのびー、ぎゅー、の辺りから。」
　明らかに含みをもたせた口調で答えられた。要するに媚態の部分に関しては、最初から最後まで全部見られていた、という訳だ。
「ずっと見てたかったよ。可愛かった。一人を満喫してたところ。…ひとりを。」
　ぷっちん、とリュミエールの中で何かが切れ、糸端が明後日の方向に飛んでいくのが判った。
　オスカーは判断を誤った。喋り過ぎた。少々。
「そうですか、ではお望み通り、そこでずっとご覧になってて下さい。ひとりを。」

甘い笑みとともに当たり前のように近づいてくるオスカーの手を、ぺしん、と片手で払い除けて、リュミエールは火照る顔をきっと上げて断固とした口調でそう告げた。
「は？」
「貴方も仰ったでしょう、今晩は私、ひとりを満喫しに来たんです。私は一人で続きを楽しみますから、貴方はそこでどうぞ好きなだけ、いつまでもご覧になってて下さい。」
紅潮したままの頬、目元、とろりとした深海色の瞳が帯びる挑戦的な光に、オスカーは混乱して口走った。
「えーと、いや、ほら、ここからじゃよく見えないし。」
「わかりました、よく見えればいいんですね。」
云うや否や、リュミエールはベッドの上でローブの裾をからげ下着を脱いで放り出し、ローブ自体もたくし上げて一気に脱いだ。オスカーの口が言葉にならない小さな叫びを飲み込む。
流石に羞恥が残るのか、リュミエールはオスカーに背を向け、肩越しにオスカーへ挑戦的な視線を投げかけたまま、伸ばした腕の先、その手がゆっくりと脱いだローブをベッドの上へ落とした。
ベッドサイドの僅かな明かりに照らされた、ほんのりと色付いた一糸纏わぬ躯、背から腰への曲線、艶やかな海色の髪。物言いたげに僅かに開いた、朱く色づく唇、伏せた水色の睫毛の奥からこちらを見詰めて離さない深海色の瞳。
完璧な、一箇の芸術だった。この上なくなまめかしい。
呆然とした表情で、ごくり、と喉を鳴らしたオスカーに、リュミエールは多少溜飲が下がる思いがした。何ひとつ身に着けていない躯を、ぼふり、とベッドに横たえ、彼に背を向けたまま肩越し

に再度振り返れば、呆然としたままオスカーが硬直している。
本当に、誰のせいだと思っているのだろう。彼の居ない時間を耐え難く寂しいと思う、こんな躯にされてしまったことを。
「……オスカー…」
視線を外してベッドに顔を埋めれば、彼の残り香が再度微かに匂って再び下半身が反応を始め、それを彼から覆い隠すように膝を曲げて蹲った。
手が伸びた。オスカーが、いつも自分にそうするように。彼の視線の陰で、くちゅ、と濡れた音がする。
「…は……」
キスが欲しい。いつもこのあたりでくれるのに。感覚に乏しい唇へ指を当て、関節を吸い、噛んだ。無意識に喉が反る。もう片手はゆるゆると、緩やかに、だが先程から続くその動きを止めることは出来ず、湿った音が断続的に響いた。
もっと、欲しかった。貴方のくれるもの。教えてくれたもの。その体温、その躯の重み、その肌の感触、その指の愛撫。唇には深い深いキス、全身を探る舌、…そして私の中に押し入って滑り、貴方にも私にも快楽を与える、熱い熱い塊。
「オスカ……」
躯から唐突に全ての刺激が消え失せた。
両手首を片手で頭上に纏められ、ぱたん、と躯が簡単に表へ返される。

ぱっちり目を開けば目の前に、鍛えられた胸筋と腹筋を晒し、残る片腕を抜いてから服を放り投げるオスカーが居た。
「ええと、オス」
「悪魔か貴様は。」
性急に重なった唇から深々と熱い舌がねじ込まれる滑りの感触に、全身が一気に疼いた。思わず上げた声が二人の唇の間でくぐもった音になり、それが消える間もないうちに刺激を欲しがっていた乳首を抓み上げられ、んん、あ、と声が漏れた。
空気を求めて唇を離して思い切り息を吸い込んだら、汗ばんだ熱い躰から噎せ返るほどの彼の匂いが立ち込め、脳髄まで染み渡るそれに眩暈がする。
熱い滾りを強く刺激されて悲鳴が出そうになるが、濡れた手はすぐ離れて後ろを手早く解してゆく。
「あ、ん、早い、や、」
「我慢できない。大丈夫。」
何が大丈夫、と思ったが、意味がすぐ判った。指と入れ替わりに入ってくる彼のそれは既に激しく濡れていて、かつ避けようも無い程にがちがちに固まっていた。
熱く滑る塊が一気に最奥までを快楽で貫き通した。

……。

「……この次の出迎えも趣向を期待していいかな？　奥方。」

やっぱり拘束されたままの彼の腕の中、力の入らない手で、ぺこ・ぺこ・ぺこ、とその緋色の頭を三度叩いた。

○初出

ＷＡＴＥＲＢＥＡＴ
https://waterbeat.hisagi.com/

理想の箱庭 - Side Black -
２００２年８月20日～９月11日

Melancolia
２０１６年４月16日

籠は連理、鳥は比翼
２０１８年６月11日～６月16日

輪（リング）
２００２年３月29日～４月11日

手記

２００２年6月14日～10月23日

とけあう恋

２００３年2月11日

3倍返し

２０１７年1月7日

WATERBEAT 2002-2018（下）

発行日　2022年10月17日

発行者名　楸

連絡先　WATERBEAT
https://waterbeat.hisagi.com/

表紙画像　Cosmic Cliffs in the Carina Nebula
RELEASE: NASA, ESA, CSA, STScI
Public Domain